
フーと散歩 - 大地を感じて -

水霧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フーと散歩 - 大地を感じて -

【コード】

N8900W

【作者名】

水霧

【あらすじ】

ある男と？声？はいろんなところに巡ります。なつかしくて、あつくて、たくさんで、かたくて、ひろいところ。そこは一体どんなところなのでしょうか。

はじめ…きいろのだいち（前書き）

ん？ ……なんだ君か。びっくりさせるなよな。 ……え？ ここはどこだつて？ そんなの口に出さなくても知ってるだろ？ ほら、あそこだよ。よく先走っているいろする ……そう。ここは？まえがき？だ。残念だったな。？あとがき？が読みたかったのだろう？ ……え？こつちでもかまわないって？ ……つくづく物好きなヤツだな君は ……。

さて、これから物語に突入するけど、心の準備はできたかい？ ちなみに、グロテスクな表現やいかがわしい表現があるから、引き返すなら今のうちだぞ？ あと、？例の小説？を参考に著^{あつちや}しているから、オリジナリティを重視しているようだけど、そういう？系統？が苦手な人も今のうち。

それじゃあ、怪我しないように気をつけるよ。水とかバンソウコウとか持ったか？ よし、いってらっしゃい！

はじめ：きいろのだいち

砂塵荒れ狂い、太陽が霞み、汗が湧き出るほどの猛烈な暑さが、この砂漠一帯に閉じ込められています。とても人が生活できなそうなところ、村がありました。

そこはとても貧しい所でした。崩壊した家が道の両側に一直線に立ち並んでいます。その道は砂に埋もれていて、村を素通りできるようになっています。

崩れ散って中が見えている家に頂垂れた男や、薄汚い布切れを纏った肌黒の女、道端に寝っ転がっている少年など、人々は貧相です。骨身が露になっています。

そこに数人、足を踏み入れました。一人は全身黒尽くめで大きい荷物を肩に抱えています。どしゃりと砂を踏み、見た目以上に重量感がありそうです。

「ひどいな」

二人目は砂の混じった唾を吐き捨てました。低い声で男のようです。

「助けましょ？ 苦しそうだし」

三人目は女でした。

ある男は、

「無理」

平然と断りました。

「そんな義務はない」

「で、でも、」

「第一、ここの村人全員を助けられるほどの余裕はないんだ。オレだって死にたくはないんだよ」

「……どうにかならないの？」

「どうにもならないな。言い方は悪いけど、見捨てるしかない」

「……」

男は女を説き伏せ、そのまま歩き出しました。すると、
「！」

真正面から子供二人がぶつかってきました。男が振り向くと二人は軽く頭を下げて、走り去りました。二人は二人三脚しているかのように、肩を組み合っています。仲良くマントを着ていました。

「なんだ、元気な子供もいるじゃん。子供は風の子元気の子だな」
「といっても、盗っ人がうろついてそんな所では遊びたくないものだけ」

男はにたりと笑って、子供二人と反対方向に再び歩き出しました。
「……？」

しかし、すぐに立ち止まりました。

「……ふう……？」

「どうした？」

溜め息をついたように、自分の胸に呼びかけます。反応がないように、中を探ると、

「……」

固まりました。

「盗まれた！」

「なっなにいつ？」

「まさか、今の子たちが……？」

「私が行こう。二人は周囲を警戒してくれ。依頼品がパクられたんじゃ話にならないし」

男は急いで二人を追いかけます。砂をずさず蹴り上げ、全力で走ります。

一方の二人は歩き出しました。

「かなり手癖が悪いようね」

「こんな所じゃ仕方ない。そうでもしないと生きていけないんだろ
う」

「へえ、寛容なんだ」

「さあね」

その途中にあつた物置の中に、様々な物が保管されています。大量の本が詰め込まれた本棚や真新しい食器棚、オブジェだったり銅像だったり、楽器など、芸術的な物が特に多いようです。

「ぎゃあああ……!!」

「……! 悲鳴?」

「あなたはここで待機しててくれ。オレが行く」

「あつあいつは?」

「……とりあえず見てくる」

銅像の首元に、何かが飾られています。水色の四角い物体で、紐を通して首にかけられています。

それを一瞥^{いちべつ}して、男は悲鳴のした方へ走り出しました。

「まったく、気が緩みすぎですね」

その物体から?声?が出ていました。冷淡で気品のある女の声です。

「しゃ、しゃべった!」

女は四角い物体をつんつんしてみたりしますが、

「爆発しませんから安心してください」

埃っぽい物置に放置される四角い物体はその後も女に愚痴をこぼしていました。

数十分後、男が帰ってきました。男は、

「どうだった?」

男は颯爽と、ぶちりと四角い物体の紐を引きちぎり、物置を後^{あと}にします。行き止まりの方を見ると、細かい何かが真っ赤に浸っています。

「まさか、殺したの?」

「オレも殺されそうになった。仕方がなかったんだ」

「……」

男はナイフを出し、リュックから取り出したタオルで拭きます。べつとりと赤く汚れました。

「……」

女は声を閉ざし、男の作業を見守りました。丹念に洗い落として
います。

「どうして手にかけてたんですかつ！」

「……」

女はまた驚きました。一方の男は淡々と作業を続けます。

「私を回収して立ち去ればいい話じゃないですか！ なのになぜそ
こまでする必要があるんですかつ？ この悪魔！ 人でなし！ 殺
人鬼！ シリアルキラー！」

「……なんとも言えよ」

「反省すらしていないのですかつ！」

「……」

男が涙を落としていました。

「まっまあ二人とも……とにかく、任務に戻ろうよ」

「……」

女たちが歩き去っていくのを、

「……」

一人の別の女が見送っていました。

はじめ…きいろのだいち（後書き）

大地は繋がっている。あなたの足を留めまいと……。

第一輪：なつかしいとこ

大草原が微風でうねり、真つ青な空に浮かぶ太陽から暖かい恵みをいただいている。時折、澄んだ池が見られ、生き物が食物連鎖の一部として存在する。特に暑くも寒くもない気候で、日差しによって暖かさを感じる程度の気温だ。

ちょうど、そのような生態系から離れている所に、豪華でも貧相でもない街があった。特に防壁のような物はない。石材を四角くカットして敷き詰めた道に噴水や公園、広場、店があり、緑や木々が見栄えよく生い茂っていた。洋風な感じのする街はほどほどに栄えていて、ほどほどに家が立ち並び、ほどほどに人が住んでいる。ごく普通の街？、この一言に尽きる。

その街の西にあるカフェで、
「つま」

客はカップをかちやりと置いた。

心地良い昼下がりの日差しの下、オープンカフェのテーブルに客がいた。テーブルは日差し除けの parasol が開いていて、明るい中に影を作り出す。

「いかがですか？」

男のウェ이터が尋ねる。客の男はあれこれと褒めちぎり、
「ありがとうございます」

ウェ이터は紳士のごとく、ダンディに言葉を返した。

「何かありましたら、お手元のベルをご利用ください」
そう告げて、店内へと戻っていった。

客はカップを啜り、

「にが」

表情を曇らせた。

「?ダメ男?」

「なに?」

「つまらないです」

?ダメ男?と呼ばれ、客だった男は広場のベンチに座り、空を眺めていた。フードの付いただぼだぼの黒いセーターにダークブルーのジーンズ、真新しく黒光るスニーカーという格好だ。隣にまん丸に膨れた黒いリュックサックと黒いウエストポーチが二つ置いてある。リュックサックを横に貫通するように、黒い棒状の包みが挟んであった。

掌を半分くらいまで覆う袖を少し捲り、くしくしと目を擦る。そして、

「ふああ……」

大きく欠伸をかいた。

「何というか、一味違う長閑さだよな」

「何が違うかをご教授していただけませんか?」

「……」

「早くしてください」

「?急せいては事を仕損じる?って言うだろう? 何事も落ち着いて
だな、うん……」

「確かにその通りですね」

「だろう?」

「それで、何が違うのですか?」

「……」

「分からないのですか?」

「……すみません、許してください」

「まったく、変に大人ぶらないでください」

「年齢的にはオレは……って何歳だっけ?」

「興味がありません」

「手厳しいな」

先ほどから、清涼感があって落ち着いた女の?声?がするが、そ

れに見合う人物はダメ男の周辺にいなかった。それなのに、怖がることなく会話を続けていく。

「田舎の長閑さは静かで気が安らぐんだけど……その、ここは元気で笑顔が溢れる感じだな……」

セーターの裾をこねこねと弄る。ジーンズのポケットを覆うくらいに長い。

「感性の鋭さは流石ですね」

「そんなに褒めるなよ、？フ？」

「テンションが上がりが過ぎたナルシストみたいです。吐き気がするので、とりあえず埋没してください」

「声？の？フ？は、

「？フ？？じゃなくて？フー？です」

「手厳しい……」

きりりと言及した。

広場は円状になっていて、街の中心にあり、そこから四方八方に道が連なる。道の分岐点とも言える場所で、噴水が水のアーチを八方に作っていた。

今度はそちらを見て、ぼーっとする。すると、噴水のアーチを通り過ぎるかのようになり、五、六人の子供の集団が走っていった。それを左から右へ見送ると、ダメ男はにこりと笑う。

その時だった。

「あつ、懐かしい曲……」

「懐かしい？」

「うん。なんか眠くなってきた……」

「確かに、眠気を誘いますね」

街中に曲が流れてきた。ゆったりとしたアコースティックな曲調で、歌詞のない曲だった。

「で、何の話だったっけ、？フー??」

「え、いついや、何でもありませんよ？ 思い出せなければ、はい」

「……そうだな」

ダメ男は荷物を持って、ぶらりと歩いていった。ニヤニヤが止まらなそうだった。

「ダメ男のばか」

ダメ男は夕方には宿に泊まり、そこで夕食を済ませた。その間にも昼間の曲は繰り返し流れていく。曲はダメ男が部屋に戻ったとほぼ同時に止まった。

部屋は一人で泊まるには広すぎた。正確には分からないが、十五畳はある、とダメ男は見立てている。ベッドは窓際にあり、部屋の中心には来賓用のテーブルかと思うくらいに豪華だった。しかも、壁には高価そうな装飾が施され、絵画まで展示されている。ダメ男が不安になって受付に問い合わせたくらいに豪華だった。

「……」

「まるでお姫様の居室みたいですね」

「こんな待遇、両手両足の指分くらいしかないぞ」

「そうですね。一番は一国のお姫様とお泊まりでしたからね」

ダメ男は荷物をベッドに置き、ついでにベッドの感触を確かめる。ふわふわしていて、綿に包まれているようだった。

セーターを脱いでテーブルに置き、黒いシャツになると、

「……はあ」

いつものように床で寝っ転がった。

「あれは思い出したくない」

「電池を抜かれていたので解らなかつたのですが、どうなったのですか、？ロミ男お？？」

「今聞いてなかつたっ？ しかもロミオとかけるなしっ」

「フーはくすくすと笑っている。」

「大人の階段を登りましたか？」

「言い方が気持ち悪いし！ しかも別に何もしてないし！」

「ふん」

「な、なんだよ今のリアクション。信じてないだろ？」

「男女が夜を共にして何も無かったなど、幸せのツボを買えば幸せになれると謳^{うた}っているくらいレベルですからね」

「信頼性ゼロだな……」

「今日の夜は眠らせませんから」

「……え？」

ダメ男はきよとんとした。おそろおそろ服の中から何かを取り出し、テーブルに置いた。

「どうしたのです？」

ネックレスにしては大きい物だった。水色と緑色を混ぜたような色をした四角い物体に、黒い紐が通してある。それから？声？が出ていた。

「いやだって……フーがそんな積極的だったなんて……」

「勘違いしすぎですっ！ これだからダメ男はダメ男なんですよ！ すけべ！」

四角い物体は？フー？のようだ。

「明らかにミスリードだろ！」

「ダメ男がそんな不埒^{ふらち}な男だったなんて、思っていましたよ」

「ああ、予想はしてたんだ。それはそれで悲しいな、じゃなくて……」

……オレは何もしてねえ！ できなかつたんだよ！」

「そんな証拠がどこにありますか！」

「姫さんは男だったんだよ！」

「え？」

ダメ男は顔を赤くしていた。

「ダメ男、まさか、男に興味が、」

「お約束すぎるわああっ！ だから、」

これ以上の内容は過激すぎるので、割愛させていただきます。

かくかくしかじかで、ダメ男は何とか誤解は防げたようだった。ただし、その代償は大きかったようで、

「これからはその話はタブーですね」

「あ」
フーが腫れ物を触るように、ダメ男に気を遣^{つか}っていた。

はしゃぎすぎていたのか、いつの間にか夜を迎えていた。窓辺から入ってくる月光がベッドを照らし、何か舞い降りてきそうなくらいに神々しい。ダメ男は電気を点^つけず、落ち着くために、しばらく眺めた。

立派な満月が太陽のように地上を照らしている。夜なのに明るく街をはつきり見渡せる。影に影が差し込み、さらに暗い影を作り出していた。

ダメ男は荷物であるリュックやウェストポーチ二つから、いろんな物を出し始めた。月光が眩^{まぶ}しい。でも、そのおかげで手元が見える。そして、あつという間に辺り一帯はダメ男の荷物置き場と化した。

「ダメ男」

「なんだよ、フー」

「そういえば、昼過ぎに音楽が流れていましたよね？」

「……そうだけど……」

「とすれば、ここは出番ではないでしょうか？」

「？ フーの？」

「はい」

「おふざけ第二弾かよ。本当にやめてくれ。耳が吹っ飛びそうになるから」

ダメ男は椅子に座り、セーターからナイフを抜き取った。黒い格子^こ子が細かく組まれ、その隙間を透明の膜が貼^うつてある。その先端にあるボタンを押しながら一振りすると、刃が出てきた。長さは拳三つほどだ。

「おふざけではありません。音程は合っています」

「そうじゃなくてさ……」

「では、何が不満なのですか？」

用意した容器から掬^{すく}い取った謎のクリームを刃に付けて、布で隈^{くま}

なく塗りたくっていく。

「……恥ずかしいんだよ」

「それを言うのなら、ダメ男の顔面を公衆の面前で曝け出している方が羞恥の極みだと思えますが」

「窓から投げてやるうか？」

「今日は月明かりで外がよく見えますから、拾いに行くには絶好です
すね」

「……く……」

ダメ男はナイフの手入れを終えると、刃をしまってテーブルに置く。そしてジーンズを脱いで、ベッドから毛布と枕を引きずってきた。
た。

「そろそろ寝るよ」

「ダメ男、お手入れを忘れています」

「やったじゃん」

「ナイフだけです。こちらをしていません」

「ひどいこと言ったからやんない」

ダメ男は拗ねている。

「おやすみ」

「子守唄を一曲歌いますから、機嫌を直してください」

ダメ男は散乱した荷物から耳栓を取り出し、耳にはめて、

「おやすみ」

「お手入れしてくださいよ、気持ち悪いのですぶつぶつぶつぶつ
眠りについた。

翌日の暁あかつき。まだ仄暗ほのぺらく、太陽は現れていない。気温はそぞろ寒さ
を感じるくらいだ。

「おはようです」

フーが起きた。ダメ男は、

「あ」

まだ眠っている。早起きしてしまったようだ。

「フーは囁くように、」

「ダメ男、起きてます?」

声をかける。しかし、うずくまって眠っていて、起きる気配はない。うつ伏せになって、毛布を手放せまいと、ぎゅっと掴んでいる。毛布に深いシワが寄っていた。

「では、気付けの一曲を、ん?」

すうつ、とダメ男の目から流れていた。

「泣いている?」

「フーは少し黙ってダメ男を観察することにした。」

「すう……すつ……」

ダメ男の静かな寝息に混じる鼻の吸り。一粒一粒が枕に伝い落ちて、シミを作る。

「フーは何となく反省した。」

「そのうち、」

「ん……」

「ぴくりと瞼が動いた。」

「ん……」

ダメ男の眼に光と景色が入り込んだ。瞼が上がっても、景色がぼやけていて何度かまばたきする。身体をゆっくり起こして、

「うはよ」

起きた。ずっと見ていたフーは間を置いて、

「おはようです」

返した。

ダメ男はストレッチをし始めた。少し痒くて頬を擦ると、

「ん? なんだ?」

「ちよつと驚いて、」

「オレはウミガメかつ」

呆れて笑った。フーは何も言わず、見守る。

ストレッチを軽く済ませると、今度は服を脱いでタンクトップと

トランクスになった。放置してあったナイフを持ち出した。

「ダメ男」

「なに？」

「様子が変ですよ？」

「そうか？」

「街に入ってからずっとそうです」

「多分、気が緩んでるだけだろ」

フーは腑ふに落ちない。

ダメ男の何かを感じ取ったのか、さらに追及する。

「眠っている間に泣いていました」

「なんだ、オレの寝顔見てたのか。カッコよかったか？」

「真剣たすに尋ねています。真面目に答えてください」

ダメ男は頭をしゃくしゃく掻かいた。

しかし、

「す、すみません。寝起きでピリピリしていました」

フーはすぐに取りやめた。

ダメ男はじつとフーを見た後、訓練を開始した。目を軽く瞑つむり、脳内で想定した敵と闘たたかう。この所作はまるで踊っているかのように無駄と隙がなかった。鋭く空を切る音と素足で刻むステップ音が静かだ。

動作を止めた瞬間、ダメ男の全身から滝のような汗が溢れた。一心不乱に練習していたようで、膝をつかないように手で支えるほど疲れている。そして肩で呼吸をしていた。

「ダメ男」

フーが呼びかける。ダメ男はそちらに顔を向けた。

「明らかにオーバーワークです」

「……そうだな」

「ダメ男、そ、その、」

「相変わらず心配症だな。大丈夫だよ」

ダメ男はにこりと笑った。

タオルを持って、シャワーを浴びに行った。

朝食を済ませると、ダメ男は必要最低限の荷物を持って、街を歩いていた。セーターではなく、黒いジャケットを羽織り、黒いパンツに黒いスニーカーを履いている。

心地好いそよ風がダメ男の顔に触れ、穏やかな日差しがダメ男の身体を温める。

「昨日の音楽は流れませんね」

「そうだな。曲が聞こえてきても歌うなよ」

「仕方ありませんね。ハミングで我慢します」

「ハミングもダメ」

「ダメ男は鬼嫁ですね」

「オレを女にすんな」

「ダメ男が女性になったら面白いと思いませんか？」

「何のフリだよ。むしろ、フーが男になった時にどうなるか知りたいわ」

「やってみます？」

「やめてください。オレがなくてもキモイだけだから」

「それはそうですね。画面えいざとしては、カマキリの捕食シーンといい勝負です」

「あのさ、話の腰折るけど、そこまでひどいの？ オレの顔」

「語ったら三時間ぐらいかかりますね」

「しまいには肌年齢とか細胞成分まで調べられそうだな」
暢気のんきに雑談している。

特に観光できる場所もなく、あると言えば店やカフェくらいで、ダメ男は街中を歩いていく。石造りの民家で女が洗濯物を干していたり、庭先で子供たちがかけっこをしていたり、こんな時間帯から男たちが酒を交わしていたり。これと言って特に異常のない日常だ。そのおかげか、ダメ男とフーの雑談は尽きることがなかった。

少し歩き疲れてベンチに座った。昨日と同じ、噴水がある広場のベンチだ。

日がようやく昇り、汗ばむ程度に暖かくなっていく。ダメ男はポーチから、水の入ったボトルを取り出し、喉のどを潤した。

「フーとボトルを膝の上に乗せる。」

「しかし、噂通りの平凡な街ですね」

「いいじゃん。骨休めにはいいよ」

「いろいろありましたからね」

「そうだな」

そこに、

「あの」

女が話しかけてきた。ブロンドで大人っぽい女だ。胸の開いたかがわしい服装をしている

「ん？」

「あなたが？ダメ男？さんですか？」

「いや、違うけど」

即答だった。

「そっくりさん……なの、かな……？」

女は持っていた紙とダメ男を見比べている。おどおどとしていた。

「人探し？」

「ええ。この方なんですけど……」

女は紙を見せると、右上の隅まぎっこにダメ男の顔があった。紛れもなくダメ男。しかし、張本人は動揺の色を全く見せず、一面を見ている。

「これってこの人のプロフィール？」

「はい。この方と仲良くなりたくて、探しているんです」

「へえ」

身長体重、性格いわざに声色まで、ダメ男に関する身体的な詳細に加え、好みの食べ物や趣味、服装など、何かの履歴書と思わせるくらいに情報が記載されていた。

「オレに似てるけど、オレじゃないな」

「そうですか。じゃあ、この方を見かけたらこの人が探していると
お伝えください」

「分かった。伝えとくよ」

女はお辞儀をして、またどこか探しに行った。

何事も無かったように身体を伸ばすダメ男。そして、

「その人が探していますよ、ダメ男」

面白そうに告げるフー。

「……なんか日光浴してたら眠くなってきた」

「朝の練習のせいです」

「そうかもな。今度は森林浴に行きたいな。もっと眠れそうだし
大きな欠伸あくびをした。

「それより、よかったですか？ ダメ男に求婚を申し込もうとして
いたと、予測します。性格もプロポーションかたも良い方ですし」

「どうるいのかん、はあ……いいでやる、オレには……いや、そん
なことによりねむふああ……いんふある……」

「何を言っているか分かりませんし、眠いようですね」

ダメ男はベンチに横になった。ボトルを枕代わりに頭に敷く。フ
ーは頭の近くに置いた。

「じゃあ、オレ寝るから適当に起こしてくれ」

「では、起きてください」

「適當すぎるだろ。まだスタートラインにすら立ってないし」

「今は座っています」

「そういうことじゃなくてっ！ まだ寝てないってことー！」

「ではフライングということで、地球上から退場してください」

「フライングはフーだろうっ」

「これは手厳しいですね」

「なんかイラついてきた……」

「ほら、眠気が取れてきたのではないですか？」

「いや、寝てやる、寝てみせる！ おやすみ」

「子供っぽいですね、まったく」
心なしか、フーが嬉しそうだった。

「……ちゃん、……お兄ちゃん、ここでねてるとかぜひいちゃうよ」
「？」

「はやくいこうぜ。はじまっちゃうよ」

「ぐーたら星人はムシムシ」

「でも……」

「ん？ なにこれ？」

「へんなの」

「それ、こいつのдаро？」

「いいじゃん、もってちゃおうぜ」

「これほしい……」

「ほらあ！ はやくいこう！」

「駄目です。これは置いていってください」

「うわ！ しゃべった！」

「なにこれっおもしろい」

「置いていかないと十秒以内に爆発します」

「ほんと〜！ やってみてやってみて！ あっちにおいてあげるか」

「らー！」

「どうせうそだろ。ばくはつしたら、ぼくらしんじやうもん」

「あうその、爆発しますよ？」

「はやく！」

「お願いだから置いていって、ね？ これはそこのお兄さんの物だから、勝手に取るのは悪いことなの。だから、」

「おねえさんのこえかわいい」

「え？ ちょ、ちよっと、やめ」

「あははは〜！」

ダメ男が起きたのは数時間後だった。ちょうどお昼ごろだ。ベンチから降りて、ぐいっと背中や脚、腕を伸ばす。こきこきと関節が鳴った。

「よく寝た……。久しぶりに熟睡できた」

枕だったボトルを手に取る。冷水を口一杯に含んだ後、ごくりと喉へ通した。

「フー、行くか！」

はい、という一言はなく、ダメ男の言葉が虚空に消える。ベンチを見てもフーはいなかった。

「……あれ？」

首やポーチの中、ベンチ周辺を隈なく探す。しかし見つからない。自分の頬をつねったり顔を殴ったりしても見つからなかった。

「おかしいな……。なんでいないんだよ……。あつ」

ダメ男は閃いた。

「さてはどっか遊びに行ったな？ 一人でずるいやツだな」

ダメ男はまだ寝ぼけているようだった。

「仕方がないな……。お？」

突如、曲が流れてきた。昨日とは違う曲だ。ハードロックだった。「仕方ない」

ダメ男はポーチを取り出すと、中からフーとは違う四角い物体を取り出した。掌に収まる黒い箱で、モニターにいくつかの同心円と中心点、離れた所にも黒い点がついている。

いわゆるレーダーだった。

「こつちか、いやあつち……。じゃなくて……」

ダメ男は拳動不審ながらも探しに行った。

「これから、どこに行くの？」

「ん？ ?ダイヒョウウ?じいちゃんのところ!」

一方、子供たちに誘拐されたフーはすっかり溶けこんでいた。女の子の首にかけられている。

「?ダイヒヨウ?じいちゃんとは誰なのですか?」

女の子一行は道を走り、東の方向へ進んでいた。フーがリズムよく揺れている。

「おとうさんをみつけてくれた人!」

「それは凄い人だね」

「うん! だけど、おとうさん、またたびにいつちゃったの」

「じゃあ、待ってるんだね?」

「いつかかえってくるっていつてたから……。そうじゃないと、おあさんさびしい……」

フーはそれ以上のことは何も言わないことにした。

「あ!」

女の子が指差す方向に老人がいた。スーツ姿でギターを抱えて、ベンチに座っている。老人というより老紳士という表現のほうが適切かもしれない。

子供たちは老紳士の前で座り込んだ。息を荒らげているが、目がキラキラと輝いていた。

「今日はどんな曲なの?」

「わたし、三日前のやつがいい」

「もつとはげしいやつにしてくれよ」

彼らはあるだこーだ言い始めた。老紳士は笑いながら、じゃらりと素手で奏でた。

老紳士がギターを弾き始めた瞬間、

「!」

ハードロックな曲が消え、カントリーな曲が流れてきた。老紳士の弾く通りに街中に音が響いていく。澄んだ音で、気分がうきうきしてくる。

「昨日の曲はこの方が弾いていたということかな?」

「そうだよフーちゃん」

「おっちゃんみたいになりたいな〜」

「そうだね」

「? どういうこと?」

フーには今一つ状況が飲み込めなかった。そこに、

「あ、ダメ男」

ダメ男がやって来た。手を見ながら女の子たちをちらちら見ている。傍^{はた}から見れば不審者のようだ。

ダメ男は話しかけてきた。

「え、えつと、誰か? フー? っていう四角くて水色の変なヤツ持っていないか?」

「気をつけてください。彼は不審者です」

「えっ!」

老紳士の目付きがダメ男に向けられる。ちくちくと刺さる眼光を、ダメ男は、

「フー、変な情報吹き込むなよ」

軽くスルーした。

「なんで起こさなかったんだよ」

「ダメ男が気持ちよさそうに眠っていたので、そのままにしました」

「この人だれ?」

女の子がフーに聞く。

「男です」

「そりゃそうだろ」

ダメ男はすかさずツッコミを入れる。

「とりあえず、返してくれないか? オレのなんだ」

「いや! わたしのだもん!」

女の子はいたくフーを気に入っているようだった。さすがのダメ男も困り果てる。

「うーん、フーがいないと困るんだよ。だから、返してくれないかな?」

「わたしのほうがフーちゃんのことすきだもん!」

「ぶは！」

思わず吹いてしまった。

「ダメ男、子供が言っていることを真に受けてはいけませんよ」

「分かっているよ！ まさかの不意打ちくらっただけだ」

「フーちゃんはわたしの！」

「まいったな……お？」

老紳士がギターを演奏し終わった。

「これ、お嬢さんや、旅人さんの大切なものを返しておやりなさい」

「でも……」

それでも^{しぶ}泣く。

「お嬢さんがフーさんを独り占めしたら、旅人さんは一人寂しく旅をしなくてはならなくなる。独りぼっちじゃぞ？」

「……」

女の子はむつと額にシワを寄せて、彼女なりに考えている。もう一度老紳士と目を合わせると、にこりと笑った。

「お兄ちゃんごめんね。フーちゃんとおわかれするのはさびしいけ

ど……」

女の子はフーをダメ男に手渡した。きゅつとダメ男は握り締める。

「フー」

「はい」

ダメ男は蝶番のようにフーを開き、ポチポチとボタンを押して操作する。それを、

「みんな、笑って。はいチーズ」

子供たちと老紳士に向けた。ダメ男も自分が入るようにフーを持つ。数秒してぱしゃりと電子音が鳴った。

ダメ男は全員にフーを見せた。そこには戸惑いながらも笑顔を見せる子供たちとそれを優しく見守る老紳士の絵が映っている。

「これでフーも忘れないよ」

「……ありがとうお兄ちゃん！」

女の子は笑いながら他の子供たちと走り去っていった。

ダメ男はフーを首にかけ、服の前に出す。

「恩に着るよ。フォローがなかったら、ずっとあのままだった」
ダメ男は素直に礼を言う。

「とんでもない。むしろ私がお礼をしたいくらいですわい」
「？」

老紳士はふふつと笑みを零した。狼狽ろうたいするダメ男に、

「い、いや、オレは何もしてないんだけど……」

「ん？ いやいや、そんなはずはない。恩人や、こちらに来てくだ
さい」

「え、えつと……」

隣に座らせた。老紳士はギターを持ち直し、奏で始めた。その曲
は昨日と同じ曲だった。

キユツキユツ、という弦のスライド音と細かく爪弾つまびいて弾はじける音。
休日のゆったりとした昼下がりのような独特の雰囲気きふきに、感性豊か
なダメ男は聞き入った。時間を忘れた。

「はつきりと覚えていきますぞ。私に生き甲斐かひをくれた恩人なので
からな」

「この曲……」

「そう、あなたが私にこのギターを譲ゆづってください、あなたの曲を
教えてもらった。今では自分でも作曲こくしたり、旅人に教えを乞こうた
りしておりますわい」

「……」

老紳士は綺麗きれいで白い歯並びを全面に見せて笑った。

「しかし、些ちかか声こゑが若返わかったように聞こえますわい。年寄りの耳も
ボケてきとるようですのう……」

「……」

ダメ男は、につ、と無理やり口角を上げた。

「その曲を教えてくれた人の息子なんだ」

「！ ほおお……！ どうりでそっくりなわけですからわい。見間違まちがい
のようでしたけど……しかし、恩人さんはあなたの父親ちちでしたか。」

いや、非常に似ておられる……」

「そんなにダメ男のお父様と似ているのですか？」

「ええそりゃあもう」

「悪いが、あまり特徴はあげないでくれ。……ちょっとその……」

「そうでしたか。では、やめておきましょう」

会話していても、一切手元が狂わない。弦を押さえている左手は白く細く、その割にアクティブに動いている。弦を爪弾つまびいている右手はしなやかに細かく動いている。

「因果なことですわい。親子揃って旅をなさっているとは……」

「……それと、」

「分かっておりますぞ。この老いぼれ、野暮なことは聞きますまい」

「つくづく恩に着るよ」

「？」

フーには何も理解できなかった。

そして、老紳士はじゅらりと弾き終えた。この場では二人しか聞いていなかったが、ダメ男は身体の中が気持ちいい感覚がした。

ダメ男はせめてものお礼にと、老紳士をカフェへ招待した。ダメ男はミルクティー、老紳士はアップルティーを注文した。しかし、

「こ、これはこれは……」

紳士のように接客していたウェイターが取り乱している。彼はダメ男に尋ねた。

「お客様はこのお方のお知り合いですか？」

「今知り合ったばっかだけど……」

「失礼いたしました。先日召し上がったお食事のお代金を返却いたします」

「ええっ？ いいよそんな……」

慌はたてて手を振って拒む。

「そう言わず、お受け取りしてください」

「いや、オレは客としてここに来てる。だから相席した人が誰だろうと、そういうのは無しにしたいんだ。それでもというなら、オレは投げ捨てるけど?」

結局、ダメ男は支払った代金を受け取らず、押し通した。ウェイターは何回も頭を下げ、仕事に戻っていった。

安堵のため息をついたダメ男はもう一口飲んだ。

「あなたは旅人としてはお優しいようですね」

「ただのお人好しです」

「? 情けは人のためならず?。旅人の信条なのですか?」

「オレは見返り目的にやる善意は大嫌いなんでね。その分、オレも受け取らないようにしてるんだけど」

「それは素晴らしい。……恩人さんが自慢するのも無理はない」

「……」

ダメ男はミルクティーを啜る。

「ところで×××さんや、あなたの旅の目的はなんですか?」

「! ご老人、できれば?ダメ男?でお願いします」

「ああ、失礼……」

持っていたカップを静かに戻した。

「ダメ男さんや、お答えしていただけんか?」

「お、オレはただぶらぶらしてるだけ。親父のように立派にやってるわけじゃない」

「本当か?」

「本当ですよ、ご老人。ダメ男は世界中の景色を見たくて旅をしているだけです」

「……とある方を探しているとも伺いましたぞ」

「そりゃあ、会ってみたい人は何人もいる」

「例えば……?色々?お世話になった人とか……」

「……!」

ぴくりと眉が動いた。

「あんた、一体……?」

「ここは、人探し請合いつけあの街なんですわい」

「……人探し？」

「この街は思い人を紹介したり、離れ離れになって会えなくなった大切な人を捜索する街なんです。色んな旅人や放浪者を招き入れ、できるだけ情報を収集する。あるいは、この街に長く滞留させる。」

「そうやって数少ない出会いの機会を増やしているわけですよ」

「そついや、声かけられたな。でも、オレの情報が流出してるけど？」

「勝手ながら、プロフィールも観察して作成しとります」

「どつりでダメ男の詳細データがあるわけです。しかし、凄くそつだい壮大で便利ですね」

「全てが上手くいけばいいんですが、これを利用して悪質な行為をする輩やかいもいますのう」

「たとえば？」

「例をあげたらキリがない。……人身売買、強姦、快樂殺人、違法物品の密輸と売買……黒い部分も存在はありますわい」

ダメ男は眉を曇らす。

「本当に出会いを果たしたい方々もいる中で、こついう事は迅速に排除しております」

「そつだな。……でも、この街はオレみたいな旅人には向かないな」

「？」

「ダメ男？」

ミルクティーをまた飲んで、カップを置く。

「やりたいことを残して所帯くさくなるのは嫌だし、会いたい人は山ほどいるけど、別れを告げたのにまた会いに行くのは照れくさい」

「そつですか。実は、ダメ男さんに会いたい方がいらつしやるんですわい。面会なさる気になりませんか？」

「さつきの女か……？」

「いや、自称？父親？さんです」

「悪いが断る」

ダメ男は頭を下げて、

「ささやかながら、代金はこちらでもつよ」

早々と立ち去っていった。

テーブルに綺麗な紙幣が置かれていた。

「デマかどうかは別として、会ってみるのも良かったのではないですか？」

「……」

「ダメ男？」

「なんだよ」

「どうしてそんなに怖い顔をしているのですか？」

「そうか？」

「あまり踏み込んでほしくない話題でしたか？」

「まあ……全然楽しくないし」

「私はダメ男と出会ってからのことしか知りませんから、興味があります。断片的には知りえてはいますが」

「それなら今度、機会があったら話してやるよ。有料で」

「では、お断りします」

「あっそう。じゃいいや」

「……」

「……」

「親父か……」

「懐かしいですか？」

「いや」

「そうですか」

「むしろ親父って聞いても、懐かしさがこねっぽっちも感じないよ。何でだろうな？」

「ダメ男の脳の重量が減少しているからだと思います」

「逆パカどころかツイストすんぞ」

「爆発しますよ?」

「まじか! じゃあやめとこうか」

「ダメ男の脳は子供以下ですね。あるいは子供並みに純真なのか分かりませんが」

第二輪：あついと」

薄い橙色の巨大な高台は聳え立っていた。太陽から照りつけてくる太陽光線を自身で受け止め、その背後に安楽の日陰をもたらしてくれている。

ところが、まだ南中を迎えていないにもかかわらず、そこでさえ熱気が込もっていた。

「はあ……はあ……」

ブルーシートに人が横たわっていた。熱い吐息を漏らしながら暑さに悶えている。怒涛の勢いで湧き出る汗。ブルーシートに汗の溜りができていた。

その人は長くて白い布を体中に隙間なく包んでいた。傍らには登山用の黒いリュックと薄汚れたスニーカーがきっちり揃えられている。なぜか黒いシルクハットまであった。

「大丈夫ですか？」

その人に、どこからか？声？が話しかけてくる。淡々とした妙齡の女の声だった。

「ぐ、ああ……はあっ……」

その人は悶えているというよりも苦しそうだった。

「誰か、通りすがりの方が来てくれればいいのですがね」

「うるせえ……はっっ！」

「ほら、死にはしませんから、大人しくした方がいいですよ
唸っていたその人の身体は次第に、

「はっ……！ はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、
痙攣を起こしてきた。

「た、たすけてくれはっ！ はっ！ はっ！ はっ！ はっ！」

「こんな身なりではどうすることもできません」

？声？は慌てることなく、冷めた一言を放つ。

「ぶざ、はっ！ はっ！ はっ！ はっ！ はっ！ はあっ！ はあっ！

「はああっ！」

その人は目を見開いたまま、ごろりと横たわった。そして何もしなくなった。

「声？はため息をついた。」

「これで七十三人目ですね。？金貨強盗？と言えばそれまでですが」「強盗したのはそいつだろ」

突如、どこからか汗だくの青年がやって来た。七分袖の白いシャツに薄手の布でできた白い羽織を着ていて、青いチノパンを履いている。靴は真新しいハイカットの白いスニーカーだった。

腰に付けてあった黒いウェストポーチをシートに置く。どさりと重量感があった。

「ダメ男の頭は人類稀に見る軽さのようです」

「そのシートにできてる油ぎつときとの水溜まりにぶち込んでやるうか？」

「？ダメ男？と呼ばれた青年は？元？男の首元を漁る。黒い紐が掛けられていて、ぶちりを切り離れた。吊り上げてみると、

「ウォータープルーフですから大丈夫です。それに、どちらにしてもお手入れしなければいけないですね」

水色の四角い物体が付いており、？声？はここから発信している。？元？男の脂汗でぬめりとした光沢が出ている。

「確かにそうだな。……オレの荷物に手を出すと、ほとんどこうなるからな……」

「ですが、そのおかげで、望みの村は見つかりそうですね。ここから北に十八キロメートル進んだところにあると言っていました。時間としては三時間半くらいでしょうか」

「確かに、普通に歩いて行けばそのくらいが妥当だろうな。でも…

…」

「でも？」

「ここは砂漠だろうがああああ！」

ダメ男の叫び声は黄色い砂原に沈み込んでいった。

「はあ……」

ダメ男のいる高台周辺は砂漠ではなく、土で押し固められた大地だった。しかし、黄色い砂地は視界に収まる距離にあり、ここが休憩できる地点だとダメ男は悟った。

ちょうど正午になり、太陽は遺憾無くフル活動する。日光だけで物を燃やす勢いで、じりじりと肌を焼く。

ぼこりと膨らんだ地面の前で、ダメ男は大量の汗をかいていた。

「いつ出発するのですか？」

まだ高台の陰から出立していなかった。

「日差しが強いから、もう少ししてからだ……」

そう言いながら、小さなナイフを突き立てた。

「十字架の代わりですか？」

「最低の事はしないとな……」

「そうですね」

そして合掌した。数秒間。その間も汗は止まらない。

「……うん」

ポーチから黄色い箱と水入りのボトルを取り出して、開封した。

中には袋が二つ入っていて、そのうちの一つを開ける。白っぽいブ

ロックが二個入っていた。携帯食料らしい。

もこもこさくさくと口に含む。

「こんな所に涼しい街があるなんて、信じられないよな」

「砂漠に涼しい場所といえば、オアシスしか思い付きませぬね」

「……？おあしす??」

「ダメ男は知らないのですか？」

水をぐびりと飲み込んだ。

「まあ……砂漠自体が初めてだったし……」

「声？は溜め息をわざと漏らした。」

「仕方ないだろ！初めてなんだから！」

「なんだか、言い訳が気持ち悪いですね」

「で！ 何なんだよ！ ? おあしす? って!」

「顔面崩壊なのに、女々しい言い訳とは、さすがはダメ男です」

「話題は変えないのなっ」

「辞書で調べてください」

「うわぁ……最終的に投げやりかよ」

「自分で調べることもしないと、ダメ男の脳みそが本当に萎縮して
しまいます」

「お前も一緒に砂漠に埋めてやろうか? ? フー??」

? フー? と呼ばれた? 声? は、

「るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるら、」

「いきなり歌ってゴマカすな」

歌い出した。

昼食を済ませ、荷物をまとめて出発したのは四時過ぎだった。日
が傾いていきたとはいえ、まだ灼熱地獄は続いている。

ダメ男は健気にも歩き続けた。

「こんな所でいつもの格好をしていたら、とっくにミイラになって
いますね」

「そうだな。近くの村で買っというてよかった」

「これからは、その服装で旅したらどうです?」

「これカツコイイ?」

「ダメ男は青が良く似合いますから、悪くはないと思います」

「へへ、珍しいな。フーがホメるなんて、どっという風の吹き回しだ
よっ。」

「その答えは西の方にありますよ」

「? 西?」

ダメ男が左に向くと、

「そちらは北東です」

「ごめん」

改めて、西には、

「え！　なんで砂漠なのに、湖とかつ？　しかも木でかつ！」

青々と茂った緑と、それに囲まれた大きな湖が見えた。草木は長々と生えていて、砂漠からすつと伸びている。

「あれがオアシスです」

「すげ……」

ダメ男はそちらを目指して歩き始めた。

「ああして目標ができるよ、やる気出てくるよな」

「進路が変わっていますよ」

「よりみち！　目的地に着く前に死んだら元も子もない」

「そ、そうですね。その前にダメ男の体力が持てばいいのですが」

「人間つてのは一つのこと集中すれば、とてつもない力を発揮するもんだ」

「例えば何がありますか？」

「え？　ええくと……例えば、目の前で車に挟まれた人がいたとしようか」

「どんな事情で挟まれたのかは聞かないこととして、サイズはどのくらいですか？」

「重すぎても可哀相だから、七百キロくらいにしとくか」

「挟まれた人は死にますね」

「もちろん、普通の人間じゃそんな重さの物を持ち上げることなんてできっこない。でも、だ」

「でも？」

「？その人を助けたい？つていう思いが極限までに高まると、力が一気に解放されるんだ。すると、その車を持ち上げられるんだ」

「へえ。まさに？アキバのアタラクシア？というわけですね」

「……」

「ダメ男、どうしました？」

「ああ、いや、何でもない、うん……アタラクシアねえ……」

「？　変なダメ男ですね」

そんな他愛のない話をし続けておよそ一時間後、

「なんかさ」

「はい？」

「いっこうに縮まらないんだけど。そのオアシスってやつに……。あついでよ……」

「それなら、怖い話でもします？ 涼しくなりますよ」

「やだ！ するなよ！ 絶対に聞かないかんっ！」

「ダメ男、あのオアシスをよく見てください」

「だから怖い話は……ん？」

ダメ男はもう一度見てみた。確かに、湖があり、草木が涼しげに生い茂っている。

「何が変？ つーか、怖い話関係ないし」

「ところが、あれは通常ではありえないのです」

「……なんで？」

「なぜなら、草木の根元が？上？にあり、下に向かって跳ねているからです」

「ん？ ……！」

よく見ると、草木が上に一つにまとまり、下に向かって細く四方八方に？砂漠に貫通している？。

ダメ男の汗は一気に引いた。

「な、なんか怖いんだけどあれ……どういことだよ、フー？」

「人間の目に映る景色というのは、光線が物体に反射して網膜に入ることにより見えるのです。しかし、光線は気温差の激しい気候によつて屈折率が変化し、人間の目に錯覚を起こすのです」

「え、えっと……よくわからん。つまり何なの？」

「つまり、目の前のあれは幻影なのです」

「な、なにいいい！」

「これは砂漠でよく見られる？ 蜃気楼？ という現象なのです。幻影はいくら歩いても近づくとができず、逃げていくようにも見えろとされ、？逃げ水？ という風にも言われるのです」

「つ、つまり、オレは存在しない幻影を追い続けたっつーことかよ！ 一時間もっ！」

「先に言うべきでした。まさか、実物と見間違えるなんて」

「恐ろしく怖い話……だ、な……」

ダメ男はへなへなと砂漠に倒れた。

「ダメ男！ しっかりしてください！」

「こ、これが自然の脅威か……」

「ダメ男、ダメ男！」

「たのしかったぜ、フー。オレはここまで、」

しかし、

「へぶちやあ！」

いきなり、ダメ男の顔面を水が直撃した。そちらには、

「大丈夫か？」

ラクダから降りた男がいた。男は薄くて涼しそうなマントを羽織っている。

「……ああ……これも幻影か……」

「リアルだわボケ！」

思わず男はダメ男を殴った。ダメ男は目をくるくる回して、あえなく気を失った。

「あ」

「ダメ男、ダメ男！」

「まあいいか。こいつも追加で」

男の後ろには、仲間らしき集団がいた。十人ほどで、全員がラクダに乗っている。

ダメ男はその内の一人のラクダに乗せられた。

「……ん……」

ダメ男はふとして目が覚めた。

辺りは暗く、しかも疲労のせいなのか、視界がぼやけていた。た

だ、ふかふかのベッドで眠っていたことだけは理解できた。

「さ、むい」

ダメ男はタオルケットを身体に纏った。服装は白のアンダーシャツに履いていた青のズボンだ。

ふらつと起き上がってベッドから下り、壁伝いに歩きだす。よく見れば木の木目があった。そのまま進むと、ドアが見えた。さらに、すぐ隣にはスイッチがあった。カチリと明かりを灯した。

「……」

部屋は八畳くらいで、浴室に繋がる通路と窓辺にテーブル、ベッドが設置されている。そこにダメ男の荷物が綺麗に揃えられていた。上着はテーブルに畳んで置いてある。

ダメ男はいきなりびくりとして、胸の辺りを探った。

「フー……！」

「いますよ」

ダメ男は声のするベッドの方へ向かった。フーはダメ男の枕元に置いてあった。無意識に安堵のため息が漏らす。

「フー、ずっと見てくれたのか？」

「違います。たまたまです。なぜダメ男の醜い顔を見ながら睡眠を取らなければならぬのですか？ 見るに堪えないほど、世界を破壊へと誘うほど顔面が崩壊しているというのに、一緒に眠るのは拷問に等しい行為です。なので、」

「ありがとうございます……。もう寝るよ」

「いいえ。お休みなさいです」

ダメ男は倒れるようにベッドで眠った。どことなく微笑んでいる気がした。

外が明るくなり始めた。窓辺からぼやけて広がっていく薄明かり。だんだんと部屋全体へ浸透していく。

砂漠らしい暑さはなく、肌寒さが気になる気温だった。その表れ

なのか、ダメ男は、

「……………す……………」

床で眠っていた。うつ伏せで、ブランケットを掛けて熟睡していた。よほど気持ちいいのか、ぎゅっとブランケットを掴つかんでいる。いつもなら目覚める時刻だが、ダメ男は目を覚ましそうにない。

枕元に置いてあるフーがちかちかと赤く点滅していた。

「ダメ男時間です。起きて下さい」

「……………」

起きないどころか反応も薄い。

フーはため息を吐いて様子を見た。どこにあるのか分からない？
眼？で、ダメ男を見た。

「……………」

ダメ男は静かな寢息を立てて、心地よく眠っている。そして、ごろりと寝返りをつつて仰向けになった。ううん……………、と幼い声をあげる。

「でーでん……………でーでん……………」

「……………す……………す……………」

まるで何かが迫ってくるように言い出した。

「でーでん、でーでん……………」

「……………」

「でーでん、でーでん、でーでん……………」

「あ……………」

「でーでんでーでんでーでん……………」

「う……………」

「でんでんっでんでんっでんでんっでんでんっでんでんっでんでん

っでんでんっ……………」

「うるさい！……………」

ダメ男は叩き起こされ、ベッドに向かい、フーを手に持って、

「おはようです……………」

「あ、あぁ……………あはよう……………」

一步踏み止まった。落ち着いてから、フーに通してある紐を首にかける。

ぐいっと身体を伸ばす。

「襲われる悪夢、か……」

「まだ寝ぼけているようですね。悪夢を見ているとは思えないくらいに気持ち良さそうでしたよ」

「適当なこと言って……あ！」

ダメ男は突如、下を見て驚いた。

「どうしました？」

「ズボン、洗濯してないし……」

よく見ると、裾のあたりに砂がひっついていて。

「仕方ありませんよ」

「……そうだな」

ダメ男は気を取り直して、毎朝恒例の朝練に取り掛かった。

テーパーの近くに整列された荷物のうち、リュックからナイフを取り出した。そのナイフは黒い骨組で柄えが作られていて、隙間には透明な膜が貼られている。差し込み式で、ボタンを押しながら振ると刃が出てくる。刃渡りは拳三つほどで、柄も同じくらいの長さだった。

そのナイフを振り回す。眠気がまだ完全に取れていないようで、動きが鈍かった。そのせいで、

「あ」

手が滑ってしまった。

「だめ、」

ナイフは足の指先数センチ先の床に深く突き刺さった。

「……」

「もう、しっかりしてください！ 怪我を負いますよ！」

「悪い悪い」

苦笑いで誤魔化そうとしても、顔は引きつっていた。

「今回はケガしなかったんだからいいだろ？」

「もし怪我したら、三十三回目です。そのうちの二十五回は右足の親指です」

「えらーいえらいつ。よく数えましたね」

「切断すればいいのに、とは言いませんよ」

「へえ、それってやっぱりおなじ、」

「ナイフが胸に刺さって死んでしまえばいいです」

「もつとひどいなっ」

「特に大動脈が切られて、悶え苦しみながら出血多量で絶命すればいいです。それが喉のあたりのどを切って、」

「朝からグロテスクなトークはやめよう、な？」

「それを言ってしまったら、ダメ男の顔面には常にモザイクが必要になりますよ」

「そうだ、寝起きだから口が悪いんだっ……」

「ダメ男は口が臭いですけどね」

「……！」

ダメ男は崩れ落ちて、打ちひしがれた。

「顔が気持ち悪いとかは我慢できるけど、……口が臭いってのはシヨックだ……」

「元気出してください。口臭用の医薬品もありますから」

「……」

「口臭は口の中だけでなく、胃にも原因があるらしいですよ。だから歯磨きだけでなく胃にも気にかけて方がいいです」

「……」

「あれ、ダメ男？」

「……」

ダメ男が立ち直るのに、太陽が登りきった頃でも時間が足りなかった。

日干し煉瓦で組み立てられた家や建物が点々と並んでいる。その

中にいくつか白いものがあつた。そしてそれを囲むように、砂を掃いて作った道が通っている。

その村は賑わっていた。村人は貧しそうな格好でも、笑いあつて楽しそうに話している。村の端っこにヤシの木々に囲まれた泉があり、そこに多くの人が集まっていた。水浴びをしていて気持ちよさそうだった。

この頃ダメ男は必要最低限の荷物を持って、村を散策していた。昨日と同じ服装で。

「このネギ、腐ってんじゃないの？ ？ 値切ね？らせるよ」

「うひゃあゝ。金あるくせに値切るとか、おっ？かね？ゝ」

「ねえ、ちよつとこれ見てよ！ 鯛たいの死？体？よ！ 生臭いわ……」
「忍者を解？任じゃ？」

「了解。ところで君、仕事をさぼって歯の治？療かい？？」

「いいかい？ この貝は？良い貝？なんだ。栄養満点だぞ？」

「殻がないから、ち？からがない？」

「力がないのはお前が怠けてるからだろ。もつと？身体？を鍛えろよ」

「ぼくは牛を？うし？なわない！」

「それじゃ、牛の縄を？うしなわ？ない」

「神の？髪？の毛」

「……」

ダメ男は鳥肌が立ちっぱなしだった。なのに、汗がだらだらと垂れっぱなしだった。

「こいつら、オレを凍死させる気なのか……？ どう思う、フー？」

「？闘志？を燃やせ！」

「くだらないこと言っていると、本気で叩きつけるからな」

「そんなに怒らないでください」

それでも、楽しい雰囲気であるから毛嫌いにすることはなかった。

ダメ男は両耳にイヤホンをして、歩くことにした。幾分かマシのようだ。

そこに、気さくに男が話しかけてきた。

「やあ」

「ど、どうも」

「ここは比較的涼しいだろう?」

「……いろんな意味でそうだな」

「それだけでなく、緑が多いですね。まさにオアシスです」

男はありがとう、と嬉しそうに礼を言う。

「実は、先人達が考えてくださったんだ。百年くらい前かららしいけど、度重なる苦労の結果、考案されたのが? ダジャレ? だったのさ」

「ダジャレ……」

ダメ男はそろそろお暇いとひましようと思ったが、男が説明したそうにうずうずしていたので、もう少しいることにした。先ほどから悪寒がしてならないらしい。

「なぜ、ダジャレはあれほど寒くできるのか? あらゆる科学者に分析させたよ。そうしたら、驚くべき結果が出たんだ」

「な、何が出たんだよ?」

「ダジャレには、気温を下げる効果があったのだ!」

「……それってさ、気持ち的なものじゃないんか?」

「これを見てほしい」

そう言ってダメ男に手渡したのは、分厚いファイルだった。表紙をめくると、数字と折れ線グラフが日にちごとに、事細かに記録されていた。

「そのページは最近のもの。およそ二十八年間分の天気と気温のデータだ。ダジャレを本格的に導入したのは十五年ほど前。導入後で平均気温が八度も下がったのだ!」

最後のページに年度ごとの月の気温の記録が棒線グラフで記してあった。確かに男の言うとおり、気温が下がっているように示されている。

ダメ男とフリーは素直に感心した。それと、ダメ男の悪寒は治った

らしい。

「平均気温で提示することに信憑性が薄くなってしまいが、ここま
で明確であれば、ダジャレの効果はあると見なしていいだろう!」

「ダジャレねえ……」

「とてつもなく素晴らしいと思います」

「とにかく、これからダジャレは続けていくつもりだ。あなた方
も何か一つ考えてみたらどうだろう?」

「い、いや、オレは体調がまだ良くないみたいだから」

「それでは一つ、」

「早く戻るぞ」

「……お、お大事に」

悪寒は再発したようだ。

あれからも村を歩き回った。ついでに買い物もして、村人たちと
交流を深めていった。ダメ男はなんとなく村人たちが勇ましく感じ
た。

日が落ちてきて雄大で広大な砂漠一帯は赤く染まる。水平線に沈
んでいく太陽は、まるで赤い閃光を放つダイヤモンドのように輝い
ていた。やがて姿が消えていき、空と大地は紺色に移り変わってい
く。

賑やかだった村も落ち着いていき、かすかな歓声と静寂が包んで
いく。

「ダジャレは……フーの専売特許だもんな」

「べつ別にダジャレを言っているわけじゃないです」

「ダジャレというか、訳の分からんことを言うもんな」

「ダメ男」

「は、はい」

「今何時ですか?」

「な、なんだよいきなり。大体八時くらいじゃないか?」

「？汝^{なんじ}？、時計がないなら買いに行つ？とけい？」

「……サブイ」

「まさに？供えあれば幽霊なし？ですね」

「すみません。本当に、手厚く弔^{うむ}うので出てこないでください幽霊さん」

「あはは」

ダメ男は部屋に戻つて、椅子に座っていた。調度品と荷物を整理整頓していた。テーブルだけでなく、ベッドやら床までもダメ男の荷物が散乱している。

フーはテーブルの手元に置いてある。

「まあ、電気も満足に使えないこの村にとって、エコな作戦かもしれませんね。ダジャレはほぼ人畜無害ですし、お金もかかりませんし、涼しい気分になりますしね」

「このまま続けたら、氷河期突入しちゃうんじゃないか？」

「暑くなければいいと思いますよ。それよりも、ダジャレで気温を下げる仕組みを知りたいですね」

「分かるわけないだろ」

「えーつと、ダジャレで気温を下げるということは、空気中の分子の熱エネルギーを吸収することになるのだから、ダジャレは、あるいはそれを放出する人間が熱エネルギーを、」

「何言ってるかさっぱり分からないし……。好きにしてる。それと、明日出発だからな」

「分かりました」

ふう、と息をついたダメ男は風呂に入っていた。

「うおっ！ つめったっ！ フーかここさむっ！」

湯船に入っていた水は恐ろしく冷えていた。仕方ないのでシャワーを、

「ひやおお！ こつちもかよ！ お湯ないんかい！」
床に叩きつけた。

ダメ男が出発する日の朝を迎えた。いつものように弛たるんだ朝練をする予定だった。

「……」

「ダメ男？ どうしました？」

「あ、いや、今日はやめとく」

「？」

ダメ男は片付けていなかった荷物をリュックやポーチに入れ始めた。

「もう出発するのですか？」

「そうだな。村を一回りしてから出ようと思ってる」

「そうですか」

「……よし、行くぞ」

ダークブルーのジーンズに白のタンクトップを着て、白のスニーカーを履いた。その上から白い羽織を着る。

ウエストポーチ二つを腰に付け、ナイフの入ったホルスターを右の横腹にくくりつける。ナイフを出し入れして、高さを微調整した。リュックをぐつと持ち上げて重さを確かめた後、部屋を一回り確認した。

「あ」

ダメ男はリュックを下ろして、中からボトルを取り出すと風呂場へ直行した。

「危なかったですね」

「うん」

風呂場の蛇口から、キンキンに冷えた水を補給していった。

改めて部屋中を確認した後、ようやく部屋を出た。きしきしと軋む廊下を進んでいくと、ほどほどに広いロータリーに着く。見た目、学校の教室ほどの広さだ。しかも、待ち合いのための木製ソファやテーブルも設置されている。

そのフロアに五、六人の人がいた。しかし、ダメ男はあまり関心

がないようで、同じ人に見えた。

一瞥して、宿から出ようとした矢先に、

「おはようございます」

女が話しかけてきた。メイドの格好をしていて従業員のようだった。

「ども」

口だけの営業スマイル。

「よく眠れましたか？」

「まあ、ここの床は寝心地が良かったよ」

「？床？ですか……」

くすくすと笑っている。ダメ男ははつとして、

「さ、砂漠を最短で抜けるには、どの方角に行けばいいか分かるか？」

話題を変えた。

「床で眠る方は見たことも聞いたこともありませんよ？」

「そ、その話はいいかからオレの質問に、」

「顔真っ赤ですよ、あはは」

からからと笑い転げている。ダメ男は一瞬切れそうになったが、いきなりナイフは駄目ですよ。落ち着いてください。相手はからかっているだけです」

小さな声で宥められて、なんとか抑え込んだ。

メイド服の女も小さな声で謝った後に話し始めた。

「お帰りですか？」

「まあ、そういうことになるな」

「それなら、一番いいルートがありますけど、案内しましょうか？滅多に案内しないんですけど」

「……まじか。予定変更だな。じゃあ、頼む」

「はい。では、こちらにどうぞ」

メイドはダメ男の来た道に戻っていく。ダメ男が素直に付いていくと、

「ここ、オレがいた部屋じゃん」

ダメ男が泊まっていた部屋に案内された。メイドがそそくさと中に入った後、ダメ男も中に入る、

「！」

直前に、ダメ男は足が止まった。

「どうしました？」

「腹痛い」

「大丈夫ですか？」

部屋の中から、メイドの心配する声が聞こえた。

「何かお薬をお持ちいたしますけど……」

「大丈夫だ。そこまでひどくないし、薬も持つてる。ちょっと待っててくれ」

ダメ男は一度リュックを下ろし、ポーチから錠剤を取り出した。ぱちりと押し込んで、口に放り込む。

「ダメ男、それは、」

「待たせた。薬飲んだから多分良くなる。今そっちに行くよ」

「それは何よりです」

ダメ男は錠剤の入っていた容器を部屋の中に投げた。

「え？」

メイドが呆気にとられた声がした瞬間、

「動くなよ？」

ダメ男はメイドにナイフを突き付ける。部屋に入ってすぐ右手の壁に隠れていた。びたりと首に切っ先がついていて、下手に動く^ねと^ね押し込まれそうだった。そのメイドはというと、

「……」

物騒な黒い？L？字型の物体を握りしめていた。観念したかのよう^うにそれを手放す。

「よく気づきましたね」

「バレバレだっつーの。部屋に入っていきなり姿を消したら、挙動不審にしか思わん」

「ダメ男が飲んだのがラムネだったので、何とか把握できました」
足元に落ちていたラムネの容器を拾い、メイドに見せつけた。
「食べる？」

「いりません」

「んじゃ、行こうか」

ダメ男はナイフをホルスターに仕舞った。

「は？」

「いや、だって案内するって言ったじゃん。まさかオレを殺すためのデタラメか？」

「そうじゃないですけど……」

「そんなら早く行こう」

「自分を殺そうとした人を信じるんですか？」

ダメ男は頭を掻く。

「あんだどんだけ中二病だよ。手際良く殺すなら、寝てる間にするのが普通だろ。確かに信じきれそうにないけど、オレはただ、近道が知りたいだけだし。嫌なら教えてくれるだけでいい。後は歩いていくよ」

「……」

黒い物体を回収したダメ男は、解体処分した。マガジンはリュックに無造作に突っ込んで入れた。

メイドは頷いて、歩いていった。

「ダメ男」

ダメ男は無謀にも、メイドに付いて行く。それを確認したメイドは目を丸くして、

「……」

何も言わなかった。

向かった先は、風呂場だった。何もないだろ、とダメ男が悪態をつく。それを尻目にメイドは風呂場の床を弄ると、ロックが解除したような音が聞こえた。

「お」

床が開いた。

「薄暗いな。ちょっと待ってるよ……っと」

ダメ男はリュックからヘッドライトを二つ出して、一つをメイドに渡した。

「気いつけるよ」

「……」

二人は中へ入っていった。

一人分が通れるくらいのトンネル。ダメ男たちは長い梯子はしこを降りた後、そのトンネルを歩いていった。先は入り組んでいるようで、暗かった。しかし、壁はしっかりと作られたようで、水漏れやひび割れなどが全くないのが分かる。コンクリートが何かで形成しているようだ。

そして、中は寒かった。深い洞窟に入っているかのような寒さで、ダメ男は黒いセーターに着替えていた。

「迷路……なのか？」

「いえ、カーブが多いだけの一本道です。光がなくても、進んでいけるようになってます」

「……ここつてどこに繋がってるんだ？ 少し寒いし……」

「来れば分かります」

メイドはつつけんどんに返答する。

それから休憩を挟みつつ、黙々と距離を伸ばしていく。しかし、メイドは疲労の色を微塵にも見せなかった。ダメ男は内心、バケモンじゃね、とか失礼なことを思っていた。

そうしているうちに、トンネルの終わりが見え始めていた。

「おお」

「見えましたね」

「そうです……ところで、先ほどから？ 女性の声？ が聞こえるんですけど、幽霊ですか？」

「あ、ああ。説明は以下省略で、名前は？ フー？」

「はじめまして。フーです」

「ちゃんと説明してくださいよ」

「実はかくかくしかじかで……」

「ダメ男、きちんと説明してください」

「言うのがメンドイ」

「では、私が言います」

フーはダメ男のごついネックレスがフーであること、喋ること、ダメ男の飼い主であることを懇切丁寧こんせつていねいに説明してくれた。

「覚えとけよフー……ん？」

そうして、トンネルを抜けると、湖面が壮大に広がっていた。右手に道が続いているが、そちらに足が進むことはなかった。

湖の奥底から光が漏れていて、なぜかこの空間を青白く照らします。底が見えるくらいに綺麗に澄んでいて、砂漠の砂が沈殿しきっていた。魚が優雅に泳いでいる。

ダメ男はおそろおそろ手を浸してみた。ひんやりした冷たさが、手に程よく染み込んで気持ちよかった。水面から手を抜くと、ダメ男が作った波紋が湖の向こうへと伝わっていく。

「ここがどのようにしてできたのかは不明ですが、おそらくごく稀に降る雨水がきれいに濾こされて溜たまったんだと思います」

「綺麗ですね」

「ああ……自然の神秘、ここにありつてな」

ダメ男はフーを取り出した。ぱかりと蝶番のように開き、カタカタと何か操作する。すると、

「ちよつとこつち来てくれ」

「？」

メイドを呼び寄せた。フーを二人に向けると、

「はいチーズ」

「え？」

カシャツ、とフーから電子音が聞こえ、突如光った。

「ほら、見てみ？」

徐おもむきにフーを見せる。ダメ男と困惑しているメイド、背景に綺麗な

湖が写っている。

「ありがとな」

「……私、あなたに申し訳ないことをしました……」

「今更かよ」

「ごめんなさい」

メイドは深々と頭を下げた。

「あんたはオレを殺す気はなかったんだらう？」

「！」

ダメ男の言葉に、メイドは目をぱちくりさせた。

「ここをバラさないように、ちょっと過激にやっちゃっただけ……

そう思うことにした」

「本当にお人好しですね。ダメ男の悪い癖です」

「……フーさんの言うとおりですね。本当に騙されやすいタイプです
すね……」

メイドはダメ男に見られないように、湖の方へ顔を背けていた。

先に行つて、と告げた。それを聞いたダメ男は先にある道を進み、地上へ戻る梯子を見つけた。上を見ても光が見えないことから蓋が閉まっていると判断した。

ダメ男は梯子に足をかけていった。荷物の重さのせいか、リュックやウエストポーチの紐が肩や腹に食い込む。涼しい環境なのに、そこからじわじわと汗が滲んできた。

一番上まで辿り着く。地上が近いのか、やけに暑く感じているように、さらに汗をかいている。

ダメ男はヘッドライトを外し、蓋を押し上げた。

「！」

外からの光が丸く縁取られる。直接眼に突き刺さるように強烈で、まぶたが不意に閉じる。

「ふんっ！」

渾身の力を込めた。ずしりと身体全体に重量感が伝わる。それを何とか横にずらした。

「……まぶしい」

ダメ男の頭上にはお天道様が見下ろしていた。暗闇から光輝へ眼が移り変わるのに、一瞬だった。

ダメ男は地上に登り切り、辺りを見回した。

「……なんだここ？」

呆気に取られた。

「砂漠地帯を抜け、ステップの地帯に入ったようですね。しかし、これほどに緑が育つなんて初めて見ました初めて見ました」

煉瓦造りの家の近くに、池があった。それを取り囲むように緑が育ち、木々がいくつも点在していた。緑は家の周り一面に生い茂っている。

さすがに暑かったらしく、セーターを脱いで、タンクトップになった。

「これ、私が全てやりました」

メイドはダメ男の背後にいた。うひょう！ とダメ男は飛び退く。びっくりさせんなよ！ 心臓止まるかと思った……」

「そんなことより、あなたが全て育てたのですか？」

「はい。水は違う村からパイプを引いてもらってますけどね」

「これほどの成果を出すのに、数年ではききません」

「そこそこに頑張りました」

メイドは照れるのを隠さず、満面の笑みを浮かべた。

「地下にあった水は使わないのか？」

「あれは村用です。飲み水と冷房用に」

「冷房用？」

「つまり、洞窟内の冷気を村に流し込み低温化を図る、ということですか？」

「そうです。それぞれの家に冷気を流して、快適にしようという提案しました。もちろん強制じゃないですよ」

「自然の冷房装置ってことか？」

にこりと微笑みかける。しかし、すぐに眉をひそめた。

「ただ、これは貴重な資源であるために、旅人やその他の集団に侵略や略奪をされかねません。そこで、村長さんは？ダジャレ？という言い回しで、隠していたんです」

「なるほど、隠語だったってわけか」

ダメ男は池の水を掬^{すく}ってみた。地下の水よりは少し温^{ぬる}い。それでも、飲んでも問題ない温度だ。

「オレが風呂に入った時と同じくらいの冷たさだ」

「お風呂は本来使わず、シャワーで済ませる人が多かったんです。お風呂の水は入れてましたけど、温めてなかったみたいですね」

ダメ男はリュックを下ろし、ボトルを取り出した。こくこくと喉を鳴らして飲む。水が喉から食道を通り、胃に到達する。その過程は？冷たさ？で感じた。

「ここはまだ砂漠地帯なんです。さらに西へ向かうと、砂漠地帯を完全に抜けられ、草原地帯に出ます。街が見えるのはそこからもつと先です」

「そうか。いろいろとありがとな」

「いえ。それではお元気で」

「お互いにな」

「メイド様、ありがとうございました」

二人は固い握手を交わした。そして笑い合った。

その手が解^{ほど}かれて、ダメ男は歩いていった。

「よし、んじゃあ行くか」

ずっと歩いていくのをメイドは見送っていた。ダメ男が豆粒くらいに遠くなつて、

「あんなに笑ったの久しぶり」

ぼそりと呟いた。

「西だったよな」

「西ですね」

「涼しいな」
「涼しいですね」
「ちょっと日差しが暑いけど、昨日みたいな気温にはならなそうだ」
「ですね」
「ん？ んう……はっはっ」
「どうしま、」
「クシユンツ！」
「ダメ男のくせにクシヤミが可愛いですね」
「うるさいっ……ふっクシユツ！」
「まさか、風邪ですか？」
「今朝からだるかったんだけど……無理したな……」
「だから訓練をしなかったのですか？」
「うん」
「いい判断ではありませんが、体調管理がなっていませんね」
「あれだけ寒かったら仕方ないと思う」
「いくら暑くても、冷房ばかりに頼るのはあまり良くないという」
「とですか」
「あそこの人たち、冷房なしでも一つも汗かかないもんな」
「適応とDNAですね。身体が砂漠に適應するためのDNAが組み込まれているのだと思います」
「それなら冷房はいらないかもな」
「それでも、涼しい方が過ごしやすいですけどね」
「それでも、風邪ひいちゃ元も子もないけどな」

第三輪：たくさんなど」

一台の車が走っていた。フロントガラスはついているが、屋根がないオープンな作りをしている。馬力のありそうなエンジン音を轟かせ、突っ切っていく。四人席で、前列には運転手に一人と助手席に一人座っている。後列は誰も座っていない代わりに、ダンボールやクーラーボックスが大量に積んであった。さらに後ろには、車輪の付いた倉庫のような荷物が連結されている。

運転手は男で、Tシャツに短パンと涼しげな格好をしている。肌黒く日焼けしていて、ダンディにサングラスをキメていた。

「あんちゃんもなかなかラッキーだな！　ここで会うのも何かの吉兆かあ？」

「そうなるように頑張るよ」

「あつはつはつは！」

運転手は豪快に笑った。

助手席にいる男は、黒くだぼついたセーターに黒のパンツ、黒いスニーカーと全身黒づくめな格好だ。セーターにはフードが付いていて、もこもこしたファーがそこに装着されている。袖は掌を半分覆い、裾はパンツのポケットを完全に隠すほどに長い。

男の足元には丸く太った黒いリュックサックが置いてあり、膝の上にはウエストポーチが二個置いてあった。

「そっぴや、あんちゃんは何か用事でもあんのか？」

「特にはない。でも、世界中を旅して、いろんな所を散策してるとこ」

「へえ、こんなに若いのになあ……。なら、俺の用事に付き合うかい？　時間があれば、だけど」

男は服の中を弄って、何かを胸の前に出した。ネックレスのようで、水色のようなエメラルドグリーンのような色をした謎の物体だった。それに黒い紐が繋がれている。服の中は暑いようで、謎の物

体は少し湿っていた。

「お礼になれば、手伝うよ」

「そりゃ助かる！ んじゃ、全速前進！」

車はさらに唸りを上げて、砂漠の中を爆走していった。

岩石が多く存在している岩石砂漠がこの地帯の特徴となっている。淡い茶色の砂地に岩石が所々に転がっていて、ちよつとやそつとでは崩せないくらいの硬度がある。

お昼を過ぎて、日が傾いてきた。それでも日光が大地を焼きつけ、地上は灼熱と化している。乾燥した気候と燃え盛る気温のせいか、植物は存在しなかった。岩石もじりじりと日光を受けて、食べ物を乗せれば、自然のフライパンができそうだ。

そんな岩石を避けるように、一本の道がくねくねと曲がりつつも伸びていた。先ほどの車はこの道を道なりに、たまにショートカットしながら走っている。

車に乗っている助手席の男は、

「……………すう……………すう……………」

眠っていた。

「しつかし、こんな格好でよく寝れるな……………」

運転手の男が呟く。

「許してあげてください。ダメ男はかなりの疲労を蓄積しているのです」

二人の声とは明らかに違う？声？。清涼で冷淡な女の？声？だった。運転手の男は、

「許すも何も、最初から怒ってたり迷惑がってたりしてねーよ」
平然と受け応えている。

？ダメ男？と呼ばれた助手席の男は、

「すう……………んう……………」

気持ち良さそうに眠っている。

「ありがとうございます、ドライバー様」

「？様？づけとか？敬語？とかじゃなくていいぜ。気軽に？シヤン？で」

「シヤン様ですね？」

「……人の話聞いてた？」

「もちろんです。これがスタンダードなので、ご勘弁ください」

「それならしゃーねーな」

運転手の肌黒い男？シヤン？は大きく笑った。

「それと、ダメ男のセーターは特殊な素材でできています。気温によつて通気性が変化し、いつでも快適に着ることができるようになっています。それでも厳しい時は着替えますが」

「へえ〜。すごいな。でも、実在するとは思えねー素材だ」

「そうですね。？作つた本人？も奇跡だと思ひ込みたいでしょうね」

ちなみに、この時の気温は三十五度を超えているらしい。

今度は？声？が尋ねた。

「シヤン様は何をなさっているのですか？」

「俺か？俺はここら辺で、支援活動をしてる」

「支援活動？」

「まあ、詳細は来てからのお楽しみだ」

シヤンはニコリと口角を上げる。

しばらく車を走らせると、シヤンが前方に指差した。

「ほら、見えたぞ」

「あ、あれって」

「村だ」

そこは家という物が破壊し尽くされている。煙が立ち、燻くすぶつているところもあり、まだ火の手が止んでいない。灰で鼠色ねずみいろが多かつた。「十分程度で到着だ。？ブラックマン？はそつとしくかい？」

「お願いします。ついでに、私も連れて行ってください。詳細は後ほど言います」

「わあーった」

「シャンは少しアクセルを緩めた。？声？はそれに疑問に感じたのか、

「あ、あの」

聞いてみる。

「ここら辺は紛争が多いんだ。だからああいうところがあっても、不思議じゃないのさ。むしろ、失望感が大きいかな」

「失望感、ですか？」

「ああ。また命が失くな^なつちまったかつてな。犠牲になるのは、いつも子供たちだ……。大人が守つてやらないなんて、何のために生きてるのか分かんねえよな」

シャンはアクセルを踏み直した。エンジンが轟音を立てて、道なりに走つていく。

二人はそれ以上話さなかった。

「えっと、君はどこにいるんだい？」

一行の乗る車は、村の門付近に駐車した。とは言うものの、何も書いていない木の看板が立てられているだけだ。

近くに来ると、現状が生々しく見える。中が露出している家、焼き焦げている木材や食料を詰める木箱と樽、焦げ臭さに生臭さ、そして血の痕。とても人が生存できるような場所ではない。

シャンたちは車から降りていなかった。？声？の正体を探している。

「ダメ男のネックレスです。水色の四角い物が付いています」

シャンは失礼して、ダメ男の首元をチェックした。黒い紐がかけられていて、それを慎重に手繰り寄せる。

「こんにちは、？フー？です」

水色のようなエメラルドグリーンのような色をした四角い蝶番。これが？声？の正体、？フー？だ。

「一人でにしゃべるのか。どんな原理？」

「それは秘密です」

「そうか。にしても、ブラックマンもこんなかわいい子ちゃんの声を毎日聞けるなんて、幸せもんだぜ」

「だ、ダメ男はバカでクズでゴミでカスでおっちょこちよいで性格破綻者で怠け者で愚か者でダメ人間で気持ち悪くて、」

「おいおい、そこまで嫌がらなくてもいいだろ」

「シャンはまともなツツコミを入れた。」

「まあ好意の裏返しってのもあるしな」

「フーはガミガミとダメ男の悪態をついていた。」

「シャンは車に大きなパラソルを立てた。車全体を覆い、その下に日陰を作る。」

「ダメ男が心地良さに、静かに寝息を立てていた。たらりと涎よだれが垂れているのを、シャンが拭ふきとってくれた。」

「行こうか。ブラックマン、ちょっとだけ相棒を借りるぜ」

「借りられます」

「シャンは村の中へ入っていった。」

「村を見回るように歩いていくシャン。すると、崩れた家の中からたくさんの人が出てきた。そして、村人たちが火を消す作業に取り掛かった。その表情は不思議と笑顔に満ちている。」

「この方々は住民ですか？」

「ああ。村が襲われると分かって、事前に避難させていたんだ。隠れてたのは、エンジン音が聞こえたからだな」

「すごい聴力ですね」

「オレがわざと吹かしたんだよ。ここの人たちは穏やかで平和的な気質の人が多くてな」

「平和ボケしている、ということですね」

「シャンは、話ができるな、と言いたげに頷いた。」

「で、今はオレだつてことを皆に知らせると同時に、仲間を探してる」

「既にシャン様の仲間が支援活動を開始しているのですね」

村人はこの風土に似合わないくらいに、綺麗でオシャレな服装だった。ロゴの入ったTシャツやワンピース、麦わら帽子など、現地では作り出せないような衣服が多い。靴もスニーカーやサンダル、中にはハイヒールを履いている村人もいた。

フーはすぐに理解したが、それは聞かなかった。

しばらく歩き回っても、仲間らしき集団に出会えなかった。なので、シャンが、

「よお、元気かい？」

後ろから、少し太った女に声をかけた。女はゴミの分別をしていた。振り返ると、驚いた顔を見せる。

「あら！ シャンじゃないっ！ 二日ぶりねえ！」

シャンにハグして、二人して笑いあった。

「いやあ、元気も何も、こうして生きてられるのもあなたのおかげよっ」

「それは何よりだよ、ママ」

「ええええ、あれのおかげで、子供たちもすっかり元気になったのよっ。私も食べすぎて太っちゃったわ！ あはははっ」

シャンは軽く肩を叩く。

「確かにポリウムが増したんじゃないか？ マムの身体には効果抜群だな」

「そうね。二日ぐらい食べなくても生きていける自信があるわ」

また、笑い合った。

「ところでさ、ママ？」

「ああ、デリカシーのないあなたの仲間なら、オアシスで働いてくれてるわ」

ママはにやにやして言う。

「皆に配っちゃったからな。下着姿は勘弁してくれ」

「あなたのも子供たちが欲しがるわよ？」

「そんな心配はいらんぜ、ママ？」

豪快に笑って、二人は別れた。

軽い足取りで歩いていく。

「仲が良いのですね」

「ああ、これでも最初は冷たかったんだぜ？ 何せわけの分からん連中が押し寄せてきたんだ。誰でも警戒するわな。それでも粘り強くやってつたことが、今に結びついてる」

「ものすごく感動します」

「よしてくれよ。俺より、あんたの相棒の方がすごいと思うぜ？」

「え？」

フーがなぜかを聞こうとした時、

「あ、いたいた」

仲間を見つけたようだった。大人の周りに子供たちがわいわいと騒いでいる。そこには山積みになったダンボールが見えた。そして、背後には、

「おお」

フーは思わず声が漏れる。

綺麗な湖があった。青々と水底が見えるくらいに澄んでいて、飲んでもまず問題なさそうだ。しかも、木々や緑が見事に生き生きと育っている。

「オアシスを見たことないか」

「写真でしかないです」

「珍しく、この村はオアシスがあるんだ。それを狙ってくる輩も少なくなない」

「では今回の紛争もそうなのですか？」

「そうだな。ここは味方の軍隊が守ってるから、すぐに駆けつけてくれる。その隙に住人は避難って寸法だ」

シャンは集団の前に着いて、大きい声で呼びかけた。すると、そのうちの一人が子供たちを掻き分けてやって来た。

「おつかれさん、リーダー」

がっしりと握手を交わす。

「車に積んであるから、何人か連れてこちらに運んできてくれ」

「了解」

男は村人と他の仲間を五人ほど連れて、走っていった。その前に、「ああ、それと！」

シヤンが叫んだ。

「ブラックマンが寝てるから、起こさないでくれ。疲弊ひへいしてたから、乗せてやってるんだ」

「了解」

改めて、車に向かっていった。

「さて、俺もやるかな。フーちゃんはどうする？」

「どうもこうも、このナリではどうすることもできません」

「なら、皆とお話しようか。ブラックマンとの旅の話は面白そうだからな」

「お役に立てられればいいのですが」

「ん……」

ダメ男はまだ眠っていた。一度起きたのか寝ながらなのか、シートを水平にして、横になっている。気持ち良さそうに日陰で眠っている。

そこに、先ほどの男たちがやってきた。見つけるや、走るのを止めて歩いてくる。

「確かに、ブラックマンだな」

「？ブラックマン？はダメ男のことらしい。全身黒づくめの格好をしているからだろうか。」

男たちは後部座席に積んであるダンボールやクーラーボックスなどの荷物と、連結されていた車輪付きの倉庫を運んで行く。

「君はできれば付き添ってくれないかな？ シヤンの大事なお客さんだ。寝込みを襲われるかもしれない」

「はい」

男たちは一人だけその場に残し、オアシスへと向かった。

人は手で顔をぱたぱた仰ぎながら、ダメ男の隣、つまり運転席に座った。日陰と日向の気温差があるのか、涼しげな表情を見せる。そして、ダメ男の顔をじっと見た。じーっと見た。

うん……、とダメ男が寝言を言うと、人はびくりと過敏に反応した。しかも顔を赤くして、さらにダメ男の観察に取り掛かる。

試しにお腹の辺りを触ってみた。セーターの柔らかい感触とその下の硬い感触がした。痩せ細っているというより、筋肉が硬く凝縮されている。なんと、服の下にまで手を入れてきた。

「ん」

ダメ男がびくりとする。人の顔は真っ赤だった。

そして、恐ろしい展開に移行した。

「……………」

人がダメ男を組み伏した。興奮しているのか、大きく肩で息をしている。顔が近づいて、近づいて、近づいて……、ダメ男が左に寝返りして左手が服の中に入った瞬間、

「！！」

ダメ男は素早く身体を入れ替え、

「お前、何者だ。五秒以内に答えろ」

人の首元に突き付けた。いつの間にか手にしたナイフで。

表情からは寝ボケた様子はなく、禍々（まがまが）しい殺意を向けている。

「……………」

しかし、ダメ男は寝起きで視界がぼやけている。右手で軽く目を擦って、目の前をよく見てみた。

「え？」

「……………」

人は女だった。がちがちと身体が震えていた。しかも、ダメ男の膝下を見てみると、

「…………… ああ、その、……………ごめん」

失禁していた。座席が汚れてしまっていた。

ダメ男は車から降りて、座席と……女の？アレ？の後始末をした。シヤンに連絡することも考えたが、迷子になる可能性といろいろと疑われる可能性を考慮した。その間に女にはダメ男の衣服を着せる。その、処理の方法などの細かいことは好ましくないので省略したい。

ダメ男はペンキで赤く塗られたように、顔が真っ赤になっていた。一方の女はダメ男の衣服の着心地の良さに喜んでい。ちなみにセーターを貸していて、ダメ男は黒のタンクトップになっている。

確信犯じゃ……、と疑ったが、自分の責任の方が大きいと自覚して言えなかった。ただし、

「なんでオレの寝込みを襲った？」

そこだけは気になり、聞いてみた。

「……」

運転席に座っている女はダメ男の顔を見るや、赤くして顔を背けた。

「……喋れないのか？」

「！」

女はダメ男を睽目した。

「聞こえるみたいだな。この村の様子じゃ……戦争か何か起こったことくらいは予想できる。そのショックによるものか、先天的なものか……そこまでは分からないけどな」

ダメ男は後始末を終えて、女に？いろいろと？物を返した。その時に、ダメ男は間近で女の眼をじっと見た。じーっと見た。

「……まだオレが怖いみたいだな。そりゃそうか……。悪かったな、怖がらせて」

「……」

ダメ男は頭を撫でてやった。

女もじっと見る。

「心に傷を負ってるのか？」

「……」

女は頭を勢い良く横に振った。

「嘘だな。動揺してる。……何で分かるか？」

今度は小さく横に振る。

「目の奥の瞳が大きくなったからだよ。興奮したり動揺したりすると大きくなるんだ」

「……」

女はしゅんと肩を落とした。その肩をぱんぱんと叩く^{たた}。

「心配すんな。もう怖いことしないから」

そして、ダメ男は助手席に座った。いや、寝転がった。

「オレはちよつと疲れが抜けてないんだ。悪いけど、仮眠する。そのセーター貸すけど、破いたり燃やしたりしないでくれよ。大切な物だからな」

こくりと頷く^{うなず}。

「それと、また変な気起こすなよ。あんたもまた、ああいうのは嫌だろう？」

うんうん、と強く頷く。

「じゃあ、おやすみ」

女は？おやすみ？と口を動かした。ダメ男は微笑んで、眠りについた。

ダメ男が起きたのは夜中だった。

「っ、さむい……」

ダメ男は鳥肌が立った。

昼間は灼熱地獄だった気温も、夜にはすっかり冷え込んでいた。

ダメ男は車から降りて身体をぐんと伸ばす。そのついでに空を見た。

「……すい」

漆黒の空一面に星が点々と輝いている。しかも、まるで宇宙に向かうように、星が集合して並んでいるようだ。そこは一段と輝きを

放ち目映い。

ダメ男は完全に言葉を失っていた。呆然と空を眺め、地球以外の惑星に降り立っているかのように錯覚した。それは大地も空と同じくらいに薄暗かったからだ。

ダメ男の意識を逸らしたのは、

「そうだ、撮らないと……！ ってフリー？」

フリーだった。ネックレスを調べてもフリーはいなかった。

「やばい……！ 早くフリーを探して景色を撮らなきゃ！ ……さむい」

セーターを返してもらおうと女を探したが、既にいなかった。仕方なくリュックから、

「暗くてわかりづら……、あった」

黒いジャケットを取り出して、羽織った。

ポーチから懐中電灯を取り出して、村に入った。しかし、

「ひどいなこれは……。復興は進んでるようだけど、家が破壊されまくってるし……」

フリーは見つからなかった。そして、別な事にも気付いた。

「このシチュエーションって、まさか……」

暗い夜道、懐中電灯を片手に一人で探検。

「……まじかよ……しまった」

ダメ男は急に悪寒が走った。

「うわあ……こええよ……」

ぞくぞくと背筋が凍る。

「……帰ろう」

ところが、お約束の状況になっていた。

「……道が分かんない」

迷子になっていた。

「まじか、まじか……！ どうするオレ？ 朝まで……いや、こんなところで寝れるか……！ でも、下手に歩いて襲われたら……あ、逆に立ち止まってたら襲われるのか？ いやでも、歩いてさらに仲

間を呼ばれたら、命の危険だ。かといって、付いてきていたら確実に襲われる。……しまったなあ……。せめてニンニクか銀の十字架か持ってくれば良かった……。それならまだ話が違ったのに……。つてそうか！？フリーリーダー？を使えば……。！」

ダメ男はポーチを漁り、？フリーリーダー？なる四角く黒い箱を取り出した。画面には同心円がいくつが表示され、その中に現在位置とフリーのいる位置を示している。

さっそく電源を入れてみた。

「……なるほどな」

ダメ男はリーダーを見て、にやりと笑う。

「まさか、車にいたとはな……」

結局、ダメ男はどこかもよく分からない所の家の残骸で一夜を過ごした。

「寝心地の方はどうでしたか？」

「ああ、最高だったよ」

早朝。太陽の日光によつて、大地に光を当て、一瞬にして景色と色が網膜に映る。日光を遮られた所は影が忍び寄る。

その光に助けられたダメ男はすぐに駐車地点に戻ることができた。ちなみにダメ男がいた地点はそこから五メートル離れたところだった。かなりパニックになっていたようで、冷静な判断ができなかったらしい。

フリーは、

「ふふふ」

不気味な笑いが止まらなかった。

「ダメ男のヘタレっぷりは折り紙つきですね」

「本気でぶん殴るぞ」

「すみません、ふふふ」

ダメ男はナイフを持って練習していた。

ナイフは掌に収まるサイズだが、切れ味はよく、手術用のメスに匹敵する。

「くそ」

ちなみに本人曰く、薬を仕込むことがあるらしい。それを両手に持っていた。

「それは置いておくとして、いろいろと分かりましたよ」

「この村のこと？」

「それもですが、シャン様の支援活動です」

「シャン？ 誰それ？」

「ダメ男を拾ってくれた運転手です」

「ああ……」

ダメ男はナイフを振り回す。しかし、闇雲に振るわけではなく、敵を想定した動きだった。無駄や隙がないその動きは舞っているようだ。

「この村の復興支援が主な活動でした。貧窮した住民への物資の配給、治療、住宅の復興も手伝っていましたね」

「まあその辺が妥当だろうな。この村の有り様を見れば……」

練習を止めて、ダメ男は村を眺めた。昨日より綺麗になり、道に残骸が散らばっていないが、まだ家に住めるとまでは言い難い。

「特にメンタルケアに重点を置いているようです」

「やっぱり戦争か？」

「紛争みたいです」

「……」

ダメ男の脳裏に、あの女が過ぎる。

「軍隊が来て戦いになる前に住民が避難するそうですが、逃げ遅れた方が一名いたそうです」

「……！」

「その方は女性らしく、敵軍に壮絶な辱めを受けたそうです」

「……」

ダメ男は練習をやめた。ナイフのお手入れをした後、水に浸した

タオルで身体を拭う。かなりの汗をかいていた。

「それでも、命辛々（いのちからがら）助かったみたいですから、本当に良かったです」

「……そうか、なんか分かった気がする」

「え？」

ダメ男は黒いジャケットにダークブルーのジーンズ、黒いスニーカーに着替えた。

「あの娘、オレを殺そうとしたのか……」

ダメ男の呟きはフリーに届かなかった。

フリーと適当に雑談するうちに、村が活気づいてきた。住民が起きてきたようだ。

ダメ男はパラソルの下でじっと考えていた。シートを水平より少し高く傾け、パラソルの裏側を眺めながら。

「ダメ男」

「なんだ？」

「その、エグイですね」

「そうだな。鬱になる」

「ごめんなさい」

珍しくフリーが謝る。

「気にすんな。そういうもんだ」

ダメ男は優しく言う。

「吐き気がします」

「！ おい、大丈夫か？ 無理すんなよ」

「で、ですが、」

「？そういうこと？ に関しては、フリーにとってはキツイからな。今日は休めよ」

「ダメ男の顔が気持ち悪いのです」

「……」

ダメ男は鼻で笑う。

「人が心配してやったのによ……」

「他人のことを心配するよりも、自分のことを心配してください。特に顔面が中心です」

「蟻地獄に埋めてやるうか？」

「やってしまったら、ダメ男も取りに行けませんよ？」

「……く……」

「その前に、迷子になると思いますが、ふふふ」

フーはまた怪しく笑う。

「……ぬう……」

すると、

「……ん？」

フーが何かに気を取られた。

「どうしつ、……あ」

車より少し離れた所から、ダメ男を見つめている。

「ダメ男の、セーター？」

フーはそちらが気になるようだ。

「また来たのか。っていうか、いい加減そのセーターを返してくれないか？」

ぎゅっ、とダメ男のセーターを固く握る。

「それはあげたわけじゃなくて、貸しただけなんだよ」

ダメ男は女に近づき、セーターを引っ張る。しかし、それでも脱いで返そうとしない。

車に置き去りにされたフーは、

「ダメ男、事情聴取を求めます。三文字以内で答えてください」

「無理だろ！」

「五文字なので、ダメ男を軽蔑けいべつします」

「ビックリマークもカウントすんのかよっ？」

ダメ男は無理やり脱がせようと、

「ダメ男、最低ですね。女性の衣服をひっぺ剥はがそうとするなんて、

まさに下等生物で下劣でカスの極みです」

「だってこうするしか、」

したが、ダメ男はすぐにやめた。

「どうしました、カス男？」

「やめてくんない？ それ……。この娘……」

ダメ男はフーを取ってきて女に手渡した。

「なるほど、そういうことですか。これではセーターはしばらく返してくれそうにないですね」

「せめて、短パンか何かを着てくれ……」

つまり、？そういうこと？だった。

お昼頃、またあの暑さが戻ってきた。じりじりと焼き付ける日光、大地から放出される熱。最早、会話の最初は？暑い？から始まりそうなくらいに暑い。

ダメ男は必要最低限の荷物を持って、だらだらと汗をかいていた。しかし、女を含む村人たちは汗をほとんどかいていない。かいていたとしても、復興作業で身体をフル活動している方々くらいだ。

女はダメ男を置いていこうと、先に歩く。しかし、ダメ男は歩いて追いつく。それを村の中でずっと繰り返していた。まるで、

「村を案内しているようだな」

「ただ、かけっこをしているのではないですか？」

二人が言っていることを行おこなっているかのようだった。どちらが正しいかは女にしか分らない。ただ、楽しそうだった。

「なあ、そろそろ着替えはないか？」

その一言に女はむっとした。

「だめか……」

「いえ、あれは違いますよ」

ダメ男はフーにちよっと感心した。

「さすがだな。で、どういうことだ？」

「あれはダメ男の顔が、」
「悪いが、それは読んでたよ」
「さすがにワンパターンでは駄目みたいですね」
女はいきなり近づいてきた。そして上目遣いうわめつかでじっと見つめる。
ちなみに、ダメ男より身長は低い。ちょうどダメ男の鼻ら辺に女の
脳天がくる高さだ。

「……………」
女は無言で微笑んだ。

「な、なんだよ急に……………」

ダメ男は赤くなつて照れた。

「可愛らしいですね。この女性がダメ男に汚されたのですか」

「受け取り方によつては誤解されるからやめれ」

内心、どきりとしたダメ男であつた。

ダメ男が、

「そついや、今何時？」

「もうとつくにお昼を過ぎましたよ」

「じゃあ飯食うか」

立ち止まろうとした時、女はいきなり、

「ん？ おいおいどうしたんだよ、急に」

背中に隠れた。そしてフードを深くかぶつた。

ダメ男が疑問に抱くや、前から誰かがやって来た。

「お？ ブラックマンじゃねーかよ！」

シャンだった。まるで運動着のような格好で首にタオルを巻いて
いる。肌黒いのが、汗で黒光りしている。

「どっちがブラックマンだよ」

「あつはつはつは！ こりやいっぱい食わされたな。そついや、ま
ともに話したこともなかつたな」

「そつだな。昨日は悪かつたな」

「いやいや、あんたもなかなか大変な旅なのは相棒から聞いたよ」
シャンはフーをつんつん突つつく。

「一日中寝てても不思議じゃないくらいの活動量だ」

「そうか？ あんまり自覚はないんだけどな」

「そこで、底なしの体力の持ち主であるあなたに頼みがある」

「なんだ？」

ダメ男に笑いかけた。

「俺たちと一緒に仕事しないか？」

「悪いな。それには賛成できない」

「あらら、即答だな」

残念そうだった。

「フーから聞いてるから分かってると思うが、オレにはやらなきゃいけないことがたくさんある。お礼は別にして返すよ」

「……そうか。なら仕方ないな」

無理やり笑う。

「あ、そういえば相談したいことがあるんだ。この娘、オレのセーター貸したら返してくんなくて、困ってるんだ。なんとかならないか？」

ダメ男は女を強引に前に出した。女の表情は明らかに嫌がっている。一方のシヤンは笑いながら、うっん、と女を見ながら考えている。ダメ男は一瞬で判断した。

シヤンは女の肩を掴み、

「ほら、ブラックマンに返してやんな、な？」

びくつと身体を強張こわばらせた。女は、

「！」

ダメ男の腕にしがみ付き、小刻みに震えている。そして、セーターのファスナーをゆっくり、

「ちよい待ちいい！ い、いきなりはダメだろ！ 時と場所と場合を考えるよっ？」

ダメ男が阻止した。

「確かにそうだな、あっはっはっは！」

三人はオアシスに寄り、衣服を揃えてからダメ男にセーターを返

した。

ダメ男はため息をついた。

「ありがとう。……もう置いていくしかないと思ってたよ」

「そんな大げさなっ。旅立つ時には返してくれるだろ」

「……ああ」

ダメ男はぽんと手を叩く。

「ま、外見は生真面目そうだけど、案外話しやすい天然クンでよかった」

「違います。ただの単純馬鹿です」

「ああ、そうだな」

「二対一は卑怯だぞ」

「……それじゃ、また何かあったら相談してくれ」

シャンは颯爽と去っていった。

「彼は支援活動のリーダーらしいですよ」

「どつりで？アニキ？を感じたわけだ」

「どつりということですか？」

「聞かんでいい。あるジャンルのリーダー的存在だと分かればいい」

「？」

フーにはちよつと意味が分からなかった。ちなみに女は、

「……」

無言で笑っていた。

橙色に哀愁を感じさせる太陽が、水平線に沈んでいく。黄色い大地も、岩石も、村も青々としたオアシスも橙色に染まる。離れていくにつれて夜の藍色が太陽に追いかけていくように、空を移し変えていく。その移ろいは夜の肌寒さも付いていく。

結局、一日中一緒だった。しかも、昼食を食べ忘れてる。それほどに女にとっては楽しい一日だったのかもしれない。ダメ男はそう思った。

二人は今、車で食事を取っている。ダメ男がシャンに頼み、二人分を用意した。明かりとして、懐中電灯をパラソルにくくり付け、下に向けて代用している。

「……」
女はダメ男を見ながら食べている。

「食べづらいんだけど……」

「……」
女は相変わらず話さないし離さない。

ダメ男は不意に言った。

「そっいや、名前なんだ？」

「ダメ男、知らなかったのですか？」

「どうやって聞くんだよ？」

「会話だって筆談でできたではないですか」

「……」
ダメ男は手をぼんと叩いた。

早速紙と鉛筆を用意して、女に持たせた。しかし、鉛筆の持ち方が分からないようで、真つ二つに折った。

「どうやら書けないようですね」

「筆談はレベルが高いな……」

それらをリュックにしまった。

「名前はあるのか？」

「……」
女は横に振った。

「ならば、？ダメ男？の名付け親である私が命名しましょう」

「お前、？クズ子？とか？アホ子？とか変な名前にするなよ？」

「私は見たままを文字に現しただけです」

「思いつきり誹謗中傷だからな……ちくしょう……」

ダメ男は先を見越して言い返せなかった。

フーはどこにあるのか分からない？眼？で女を見続けた。そしてひたすらに考えた。

「……………」

ダメ男と女にも緊張感が走る。そして、

「決まりました」

ついにその時が来た。ダメ男は何気に心臓がばくばくだ。

「第二回！ ネーミング大賞2011を発表しますっ！」

「……………」

女が首を傾げた。ダメ男は気にすんな、と耳元で囁く。なぜか女は顔を赤くした。

「今年のネーミング大賞は……………！ ドウル……………」

「前置きがリアルすぎだから
意外にダメ男は冷静だった。

「じゃじゃーん！ ナンバー二十三万五千二百十六番！ ?クレア？に決定ですっ！ おめでとうございまーす！」

「おおおお」

二人して拍手を送った。

「いいじゃん。いい名前だ」

「どうですか？ お気に召してくれましたか？」

「……………」

女はこくりと頷いた。

「笑顔がとても素敵で、心が晴れていくように感じたので、?クレア？と選出しました」

「いろいろツツコミたいところだが、一つだけ聞きたい」

「何ですか？」

「オレのとき、ナンバー一番だったろう？ なのにクレアは六桁ぐらいだったよな？ なぜだ？」

「単純に人気と顔面の違いだけです」

「ちなみにオレの時は？ダメ男？以外に何かあったか？」

「ちよっと待っていてください」

フーは少しの間話さず、そしてすぐに終わった。

「えっとですね、？ダメ男？以外には、ダメロウ、ダメカズ、ダメサダ、ダメノブ、ダメヨシ、ダメハル、ダメサク、ダメダメ、ダメージ、ダメージング、ダメージドウ、」

「とりあえず、ダメが頭に来るのは分かった。そしてオレを傷つけすぎだ……」

「他にはですね、ダメノリ、ダメアキ、ダメ、」

「誰だ！ こんな名前考えたの！」

「私です」

「あ、そっか、じゃなくてっ！」

女は腹を抱えて笑っていた。

「笑うなよ！」

「……」

「な、なあ、やめるよ、な？」

「……」

「そんなぶっそうなもん、捨てるよ……！ なんにもなんえぞ、えぞ、ええ、えっと、なんねえぞ……！」

「……」

「や、やめ、やめぎやうっ？」

「……」

そして、三日目の朝を迎えた。

ダメ男はいつも通り、太陽が登り始める頃に起きた。セーターを着て寝たおかげで、心地よく眠れた。

隣には女はいなかった。ただ、食べ終えた食器がなかった。ダメ男は帰宅したのだと悟った。

「そろそろ出発しますか？」

「そうだな。クレアの見送りが無いのは少し寂しいが、行かなきゃな」

ダメ男はウエストポーチやリュックの荷物を点検する。忘れ物はない。食料や水はシャンに頼んで、少し分けてもらっている。他の物も問題無い。着替えも薬も爆薬類も衣服もそして、

「……」

「どうしました？」

「ない」

何かがなかった。

「何がないのですか？」

「……」

ダメ男は何もしていないのに、冷や汗をかいていた。フーは危惧した。

「ダメ男、まさか、」

「そのまさかだ……！」

ダメ男は荷物を全て持って、村の中を走った。全速力で駆け抜ける。すると、オアシスに人だかりができていた。こんな朝早くから、しかも多くの村人やそれ以外の連中も集まっている。そちらに目的地を変更した。

「！」

赤かった。

「……」

ダメ男の顎あごから、大量の冷や汗こほりが溢れ落ちる。心臓がひどく痛み、頭が痛くなってくる。

「ばかやろう……」

オアシスに、シャンが浮いていた。いや、シャンの？ パーツ？ が浮かんでいた。どろどろとしたものがオアシスを赤く汚し、赤々と自身をも汚す。

その所業に、ダメ男は背筋が凍った。夜中に村に迷い込んだ時のものなどチンケなものだ。冷や汗どころか血液や内臓までも冷めて

いき、頭が朦朧もうろうとしてくる。目がどこを向いているか分からなくなりそう、平衡感覚が崩れていく。音は耳鳴りと砂嵐が混じったようなエコーとざわめきが頭の中を打ち鳴らす。ダメ男は立っているだけで精一杯だった。

ダメ男は深呼吸して、落ち着きを取り戻した後、周りを見渡した。誰もその凄惨せいさんな出来事に息を飲み、動けずにいた。もう一度オアシスに戻してみると、ある部分に目がいった。

「……！」
額ひたいに、深く、突き刺さっている。

「ダメ男、この村を、出ましよう？」

フーの一言がダメ男を迷わせた。しかし、それは長くなかった。

「！」
「あいつ……！」

ダメ男はオアシスに入ってしまった。衣服や荷物を村人に預け、トランクス一丁で肉塊の回収に取り掛かった。それを見た人々は、

「シャン」

「シャンさん！」

「アニキいい！」

こぞつてオアシスに足を踏み入れ、ダメ男を手伝ってくれた。

「シャン！　しゃあああああんっ！」

そのおかげで、時間はかからなかった。

ダメ男は一足早く、上がり、人々に感謝されながら身体を清めてもらった。ダメ男の表情は沈鬱ちんうつなものだった。

出発の準備を済ませていたダメ男は、肉塊を置いた場所へ向かった。そちらにも多くの人々が取り囲むように集まっていた。ざわつきは収まらない。村中にも、ダメ男の中にも。

ダメ男は人々を掻き分け、中心に辿り着くと、

「え？」

ダメ男は額に擦ぬじ込まれたナイフを抜き取った。ぬめぬめと赤く怪しく光る刃。エグイほどに鋭く、拳三つほどの長さがある。ナイ

フの柄は黒い格子が頑丈に組まれていて、その隙間を透明な膜がカバーする。その長さは刃と同じくらいだ。

人々は愕然とした面持ちで、ダメ男がナイフを綺麗なタオルで拭き取るのを眺めた。そして、ダメ男が去るうとして、道を開ける。荷物を受け取って、立ち去っていった。

かと思われた。

小さな男の子が小石を一つ投げた。ターゲットのこめかみに当たり、すぐに血が溢れ出し、頬骨、頬、顎へと血が伝っていく。

今度は別の女が使い道のない木材を胴体に投げてぶつけた。ターゲットは脇腹を痛めて苦しみながらも歩いていく。

そこから、一気に爆発した。石、釘、刃物、木材、煉瓦、靴、生卵、投げられそうな物を全てダメ男に向けて投げる。全ては当たらなかったものの、ターゲットは深手を負ったに違いない。人々はさらにターゲットを追い込んだ。しかし、ターゲットは車を強奪し、広大な岩石砂漠へと逃亡していった。人々は歓喜の声を盛大に、豪快にあげた。

しかし、近くに紙が落ちていた。それを見た人々は落胆の色を隠せなかった。

「だいじょうぶですかっ？」

「はあ……はあ……」

「しっかりしてください！ ダメ男！」

「う、うるさいぞ、フー……」

「で、でも、なぜあの人たちはダメ男を責めるのですか！ 真犯人は、」

「そろそろ出てこいよ、クレア」

「え？」

ダメ男が座っている運転席の真後ろに、クレアがひょっこり出てきた。

「あ、ありが、とう……」

おほつか
覚束無い声でダメ男に言う。

「あ、あなた、話せる、」

「気にすんな。でも、少し休もうか……」

ダメ男は砂漠の中心で車を停めた。幸いなことに、パラソルは意外と頑丈で壊れていない。

酷かった。顔にいくつにも傷が付き、身体を庇かばったために、両腕、特に右腕が青く腫れあがっていた。その手当てをクレアがしてくれた。

「もうちよつとゆるめて、いったた」

「す、みません……」

「どういうことですか？ 納得のいく説明をしてください！」

クレアは右腕に巻いた包帯をハサミで切り落とした。

「ただの、復讐……だろう？ クレア」

コクリと頷いた。

「オレにセーターを返したくない理由、それはナイフを盗とったことを悟られたくなかった。シャンに復讐するために……そうだろう？」

「うっん」

強く頷く。

「クレア、お前はおそらく村八分にされていた。……つつつ、しかも、シャンに酷いこともされていた。この二つを解決するために、オレを犯人に押し付け、なおかつ自分が人質になる必要があったんだ。オレのナイフを使えば、ほぼ間違いなくオレが疑われるからな

……」

「……」

クレアは申し訳なさそうに俯うつむいた。

「そう落ち込むな。ついでに書置きもしてきたから、村に帰れば、以前のように酷いことはされないだろう……」

ダメ男は傷だらけの顔で笑った。

「ダメ男、なぜあなたはそこまでして、クレアの計画を見抜いてい

たのに協力したのですか？」

「さあな」

「さあつて」

ダメ男は唾を吐いた。砂漠の砂にくつついた。赤く滲^{にじ}んでいる。

「オレはもう大丈夫。車、運転できるだろう？」

「うん」

ダメ男はジーンズを脱いで、手を突っ込んだ。中から分厚い鉄板が出てきた。そして、改めて履いた。

「よし、軽くなったな。足には被害はない。歩ければ大丈夫だしな。あとこれやるよ。オレには必要ないしな」

ダメ男はクレアに指輪を手渡した。銀色の指輪は太陽の光を浴びて、一段と輝きを増す。

「あ、りが、とう……」

「お前は十分不幸な目に遭った。これからはいいことがあるはずだ」
「うん」

クレアは泣いていた。ぼろぼろと涙を落としている。

「じゃあ、げんきつつう、……げんきでな」

「うん！ ダメ男だいすき！」

車はダメ男を置いて走り去っていった。ダメ男は砂漠のと真ん中で、その車の行く末を見送った。ずっと見送って、見送って……豆粒くらいになっても立ったまま。やっと消えたところで、ダメ男は歩き出した。

「あついな」

「そうですね」

「やっぱセーターはキツイな」

「当たり前です」

「涼しいところに行きたいな。あと、涼しそうな服を買おう。しぬ」
「当然です。ところで、どうしてダメ男はクレアに協力したのですか？」

「……クレアの声聞いてみたかったから、かな」

「つぶつぶ」

「えっ？ なにその笑い方？ 初めて聞いたんだけど」

「その台詞、くさすぎます。こちらまで恥ずかしくなりますよ！ あっははは」

「なんだよ！ 笑うな！ 真面目に答えたんだよっ！」

「まあ、ダメ男らしいと言えばダメ男らしいですね、ふふふふ」

「……ばかにしゃがって……」

「素直でいいですね」

「素直に喜べないから」

「ふふふふ」

「泣くぞ！ オレ泣くぞ！」

「どうぞお好きに、干からびるまで泣けばいいですよ、ふふふ」

「……く……」

「ふふふ」

「でも、そう簡単にいくかね……」

「え？ どういうことですか？」

「人を殺した上での幸せは、絶対にありえないってこと。なぜなら

殺された奴同様に、そいつも地獄行きだからさ」

「どこかで聞いたことのある台詞ですね」

「何て言うか知ってるか？」

「？イ を唱えれば敵爆発？ですよね」

「違うから。？人を呪わば穴二つ？だ」

「ダメ男に二十五のダメージ、ダメロウに二十三のダメージ、ダメ

カズに三十四のダメージ、ダメサダに、」

「もうやめてください。しかもそれ全部オレにダメージじゃねーか」

村は復興に力を注いでいる。破壊され尽くした家は見事に蘇り、食料や水は畑や井戸のおかげで再生し、子供たちは健やかに育っている。村人たちは協力しあい、助け合い、信頼しあい、笑いあい、

愛し合い、一致団結して結束力を高めていた。

「あと少しだな」

「ああ。今は亡きシャンさんのおかげだな」

オアシスは青さを取り戻していた。その横には、石碑が建てられている。つらつらと書き綴^{つづ}つてあるが、最後の行はこう記^{しる}してあった。

「敬愛すべき恩人、シャンへ送る」

一方、村の入り口には看板が立てられていた。何も書いてないように見えていたが、最後の行だけ薄^{うす}らと見える。

「×××領地、攻めるべからず」

そこら辺である男が箒^{ほう}で掃^はいていた。

「おい、これ片付けていいかあ？」

「かまわねえから、早くしてくれ！」

「オッケー」

男はどでかいチリトリでゴミを中へ入れていく。ゴミや砂と混じって、銀色の赤い指輪が中へ入っていった。

第四輪：かたいとこ

砂漠のような大地、真つ青な空、調子に乗って浮かれている太陽、ぼつんと目立つ……街。しかし、街のある地帯は自然の恵みを受け取っているのか、緑に囲まれていた。不自然なほどに砂地と草原の境界線がはっきりしている。

砂漠の方に視界を移すと、渓谷が連なっていた。二つに分かれていて、その間に川は流れていなく、代わりに道となっている。自然の要塞と形容してもいいほどに立ちはだかり、ミルクココアの色をしていた。そして、暑い。直射日光からの放熱で、焼き石の上に立っているような暑さが立ち込めている。

その渓谷の頂上に、誰かがいた。黒い何かを足元に置き、草原の方を眺めている。

男だった。七分袖の白いシャツに薄手の布でできた白い羽織を着ていて、青いチノパンを履いている。靴は土の被ったハイカットの白いスニーカーだった。涼しげな格好で様子を見ている。

「……行くか」

「飛び降りる勇気が出たのですか？」

四角い物体がネックレスとして黒い紐で通され、服の前に飾られている。水色のようなエメラルドグリーンのような色をしていて、蝶番はつがひのようだった。

「電池取るぞ」

「どうぞ自由。困るのはあなたですから」

「……エラソーに……」

青年は踵かかとを返し、黒い物体を持ち上げる。黒い物体はリュックサックだった。粉末みたいな砂が付いていて、叩き落たたとす。

「唯一認めているのはあなたの鋭い感性くらいです」

「褒めてんのかけなしてんのかわからない……」

青年は降り始めた。

溪谷を何とか降^{くだ}っていき、地上に辿り着く。空が遠く感じた。砂漠を渡り歩き、遂に一步先が草原というところまで着いた。既にかんりの汗をかいていた。

男はくるりと振り返る。自分が先ほどまでいた砂漠や溪谷。なんとなく哀愁漂わせるものを感じたのか、ネックレスの四角い物体を手に取り、適当に操作して、ぱしゃりと電子音を鳴らした。

「よし」

男は一步を踏み出した。足の裏に伝わる草を踏む感触。それに感動して、走った。

「ダメ男、はしゃぎすぎです」

「？ダメ男？と呼ばれた男は、

「久しぶりに……っというか微妙に涼しいな」

四角い物体？フー？に怒られた。澄んでいて綺麗で冷淡な女の声だ。

ダメ男の言う通り、草原に入った途端に涼しくなった。微風が撫でてきて心地好い。

「お、見えてきた」

そして街が見えてきた。壁が街を囲い、堅固な防壁として周りから守っている。しかも、緑色だった。

さらに近づくと、緑色の正体が分かった。

「ツタの葉がびっしりですね」

「ここは古い街かもしれないな。ちょっと楽しみだ」

ダメ男は門に着いた。駆動式なのか、上に鉄鎖が掛けられていて中へ侵入している。しかし、誰もいない。門の脇に受付があるが、人がいなかった。どこにも何も無い。

「既に滅んでいるのではありません？」

「それはないだろう。まあ、どっちにしても、せつかくのご好意だし、無下にできない」

ダメ男は荷物を下ろし、待つてみることにした。

「まあ、少し待つてみようか」

「ダメ男は人が好よすぎます。たまには疑う事もした方がいいです」

「何も起こらなきゃ、他を指すよ。まだまだ行きたい所があるんだ。それでいいじゃない」

「仕方ないですね」

とりあえず待つてみることにした。

待つてみて待つてみて、

「いくらなんでも、これは何もないと判断した方がいいと思いますよ。もう五時間以上経過しています」

夕方になった。

「確かにな。でも、ここの景色も悪くないしさ、今日は野宿しようかなって」

「ダメ男がそう言うのなら、仕方ありませんね。その馬鹿正直さにもはや呆れたとしか言えませんよ」

「んじゃ、準備するか。今日は晴れてるから、星がよく見えそうだよ。ダメ男は門の近くで野営をすることにした。リュックから黒い傘のようなものを取り出し、順序よく組み立てていく。

「? テント傘がさ? を使うのは久しぶりですね」

「? テント傘さん? !」

「そこだけはやけに拘こだわりますね」
三角錐さんかくすいのテントが完成した。

次に、唯一草が生えていない門の前で石を並べて、火を起こした。そこに金網を敷いて、厚底の鍋を置き、水と何かの粉末を溶かして温める。

ぼうつ、と焚き火が映えてきた頃、すっかり日が沈んでいた。昼間と違って冷え込んでいて、焚き火の熱が身体に染みる。

空は月がないものの、点々と星が煌きらびやかに輝いていた。流れ星

は見れなかった。

「綺麗ですね」

「そうだな。これだけでも、来た甲斐があったと思うよ」
にこりと笑った。

ダメ男は鍋からコップで液体を掬^{すく}う。湯気が立ち上っていた。ちよびちよび啜^{すす}る。

「はあ」

さらに身体が温まる。

ダメ男は折りたたみ式の小さな椅子に腰掛けた。

「疲れていますか？」

「え？」

唐突に尋^{たず}ねる。フーはダメ男の膝の上に置かれる。

「なぜ、ダメ男がここで野宿しようと言ったのかを考えていました」

「ああ、確かに疲れてるけど、こうして旅をしてるのが楽しくて、むしろ疲れてるのを忘れるくらいだ」

「そうですか」

「本当に心配症だな、つたく」

「心配などしていません。唯いっしんぱい入るとすればで、デENCHIガ……」

「わ、わああ！ だからそういうのは早く言え！ 電池が切れかけてるフーの声は怖いんだよ！」

ダメ男はあたふたしていた。

ちなみに、この時のフーの声はしゃがれて呻いているような声らしい。それはまさにダメ男の嫌いなものの声に似ているという。

翌日の早朝、フーが目覚める時には既にダメ男は起きていた。リュックからナイフを取り出して、練習をしていた。それを終えた後、身に纏う衣服を全て脱ぎ捨て、お湯に浸したタオルで身体を拭いていた。フーの視界では、ダメ男は背を向けている。

「ダメ男」

「おはようフー、起きたか」

「振り返ろうとしたダメ男にフーは、

「振り返っちゃだめです！」

「全力で言い放った。そして、

「なぜ裸なのですか？ 土に還かえってください」

「全力で返けなした。」

「だって汗で気持ち悪いし汚れてるし、フーが寝てる間に済まそうとしたんだよ。そしたら起きちゃうし……」

ダメ男は真面目に答えた。

「ダメ男にしては正論ですね。人もいませんし、お風呂もありませんし、訓練後なら仕方ありませんね」

「第一、人はな、産まれたときは裸なんだ。逆に、なんでそんなに恥ずかしがる必要がある？ 産まれたときのすがた、」

「その発言はNGです。もはや原人の発言ですよ。とにかく猥褻物わいせつぶつ陳列罪ちんれつざいなので、光の速さで三段切腹をしてください」

「三段切腹っ？」

「かの、？ハマチハンペン？が成し遂げたとされる切腹ですよ」

「誰だよ！ みんな食べ物じゃん！ 確かに成功しそうだけどな！」

「これだからダメ男はダメなのです。今や歴史ブームなのです」

「オレは過去に用はない」

「故きを温ねて新しきを知る、これが重要なのです。まさに？まん？、」

「悪かった。オレが悪かったからそれ以上は何も言うな」

「ただ？漫画維新？と言おうとしただけですよ？」

「ああ……マンガ革命みたいなのかな？ これからは紙じゃなくて電子書籍みたいな」

「何を勘違いしたのですか？」

「……ツッコまないでください」

「今日のダメ男は生物としてとことん最低ですね」

フーの声に、もはや温情の？お？の字の一画目もなかった。
「……ごめん。でも、リュックさ……テントの中にあるんだよ……」
そのテントはというと、なぜかフーの真横にあった。フーは沈黙するしかなかった。

ダメ男はしつかり隠しながら、テントに入り、きちんと服を着た。黒のだぼだぼセーターにダークブルーのジーンズ、黒の履きならしたスニーカーを履いて、ぐっと背伸びした。セーターにはフードが付いていて、もこもことしたファーが縁に装着されている。袖は掌が半分くらいまで覆い、裾はジーンズのポケットを完全に隠すくらいに長かった。

「ん、んう……お待ちせ」

「とにかく死んでください」

「悪かったってば……」

「テントの出入口も閉じずに何をしているのですか」
「……」

ダメ男は今、テントの出入口のチャックを閉じた。

「遅すぎですから。朝から何と言う気持ち悪さでしょうかね。ダメ男を見ると、吐き気しかしませんよ」

「あ、そうか。寝起きだから口が悪いんだ……」

「こんな状況に出くわしたら、誰でも気分を害しますよ！ 本当に最低です」

「確かに」

「命で償^{つく}ってください。朝から不埒^{ふいぢ}なモノを、見せつけられて本当に気持ち悪いです」

「立派だった？」

「ああああああもおおおおっ！」

フーは爆発寸前だった。文字通り。

「フー！ 煙立ってる！ 落ち着け！ ジョークだジョーク！ 下ネタだよ！」

「もう今日という今日は怒りましたっ！ ダメ男のデリカシーの無

さに加え、羞恥心の欠片も無いとは、どんな精神構造をしているのですか！ それに反省の色もありませんしっ！」

「ふ、フリー……悪かったよ。悪ふざけが、」

「いいえっ！ 許しません！ ふんっ！」

フリーは完全に怒っていた。

その後もダメ男が必死で謝るものの、貶すどころか反応もなかった。フリーを開いてボタンを押しても電源をつけようとしても、何も起こらない。

「……やべ」

ようやく、事の重大さを理解した。

「カンペキにキレてるよ……」

とりあえずダメ男は、朝食を食べることにした。昨日の残りのスープと携帯食料を一人寂しく食べる。さくさくやらずっ、といった食べる音しかない。

「フリー、オレが完全に悪かったよ。頼むから返事して、」

「しね」

何も話しかけるな、と含みを持たせて侮蔑する。

「……」

ダメ男は、

「このまんまじゃ、見てる人も飽き、」

「しね」

「……」

何も言えなくなった。

ダメ男は逆切れしなかった。というより、自分の過ちを重く受けとめてしまい、怒る気にもならなかった。頭の中では、軽はずみで何てことをしてしまったのだろう、というフレーズしかなかった。

仕方なく、荷物を全て片付けて、街に入ろうとした。しかし、やはり門は開かない。叩いたり蹴ったり、タックルしたりしても開かなかった。

「誰かいないのかあっ！」

ダメ男の言葉はどこにも届かなかった。

ダメ男は諦めようかどうか真剣に考えた。頭の中で、一人で考えた結果、もう一日留まることにした。この一日の間に何とかしようと決意した。

ところが、ダメ男は話しかけられずにいた。自分でも思った以上に？しね？が効いたらしい。何の感情も込められず、まるで息を吐いたかのように出てきた言葉だ。結局、解決策も見つけられないままお昼を迎えた。

ダメ男は昼食を摂ら^となかった、摂れなかった。負の感情が複雑に入り乱れ、一人で混乱し始めている。もし、もし××したら……、と呟^{つぶや}き始めていた。

それから今度は、ぼーっと空を眺めた。今日は少し曇っていたようで、雲の流れを見ている。ふわふわしていて美味しそう……、とか、青いなあ……とか、のんびりとしていた。時折、門の方へ行き、声をかけたり叩いたりするが、応答はなかった。一瞬誰もいないのでは、と迷いが駆け巡るが、全く進展できないこの状況を打開したい気持ちと重なり、思考が停止した。

誰が見てもつまらなかった。

まだ二時過ぎか、と呟いてみるが、誰も聞いてくれない。

ダメ男は荷物を整理してみることにした。調理セットや救急セット、テント傘、食べ物飲み物、アタッシュケースなど、必要最低限の物はある。それと黒い袋があった。開けてみると、容器と砥石^{としい}、爆薬、手榴弾、ダイナマイト、弾薬の残り、充電器、掌サイズのナイフなどが入っている。さらに、白い袋が入っていて、開けると着替えが入っていた。上着が三枚、シャツが三枚、下着が三枚ある。やけに重く黒いジャケットと白の羽織りは黄色い袋に入っていた。

ダメ男はジャケットと砥石、容器を取り出した。ジャケットから掌サイズのナイフを抜き取る。数えてみたら全部で三十八枚あった。

それを一本ずつ砥石に丁寧^とに研ぎ、容器から白いクリームを布で掬^{すく}い取る。それをまんべんなく塗りたくっていた。仕上がったものの内の一本で自分の右腕を浅く切りつける。薄^{うす}らと傷ができたが、皮一枚だけを切り裂いていて血は出ていなかった。

次にセーターの左胸からナイフを取り出した。朝練習に使用していたものだった。柄^えは黒い骨組みとその隙間を埋める透明の膜で構成されていて、柄の先端にあるボタンを押しながら振り抜くと、刃が出てくる。どちらも拳三つほどの長さがある。

これも砥石とクリームでお手入れを施していき、自分の右腕で切れ味を確かめた。やはり血は出ない。

最後に、

「……フー……」

四角い物体、フーを手に取った。

ダメ男は黒い袋から別の容器と布を取り出す。その布で容器から透明のジェルをほんの少しだけ掬い、フーにつけた。そして、丁寧に隅々まで拭^ふいていく。

「……」

暗い表情は隠せなかった。

そしてフーは綺麗になった。光沢を取り戻し、太陽にかざすと光が反射してさらに輝く。

「フー」

ダメ男は、口元が緩む。

「許してくれ……本当にごめん……。今更だけど、また一人は嫌なんだ……お前がいなきゃだめなんだ……」

フーは何も言わない。

「本当にごめん……。マヌケな謝り方だけどさ、許してくれフー……」

……

ダメ男は珍しく、

「……ごめん、ごめん……」

ぼつぼつと泣いていた。

ダメ男はダメもとで、電源をつけてみた。その瞬間、
「うわあああああああつあ！」

フーを神速で投げた。不時着した所でフーはケラケラ笑った。
「今までのお返しです」

フーが、フーが喋った。ようやく。

そこに写っていたのは、真っ黒で髪が長く顔が真っ白の女が、どアップで写っているものだった。

「これで凝りましたか？ 少しは分別というもの、あっ
「……………」

ダメ男は俯いて、

「うっ……………」

さらに涙を落としていた。

「あう、その、あのなんと言っか」

「うっ……………」

わりと本気で泣いていた。ぼろぼろと、まるで喧嘩した少年が家路につきながら泣いているようだった。

「えと、ダメ男がわる、じゃなくてその〜」

「うっ、ずっとひとり、つかとおもったよ……………」

「ダメ男」

「ごめん、フー……………！ もうひとりに……………ひとりにしないでくれっ
！」

ダメ男は声を上げて盛大に泣いた。醜く、鼻水垂れて、声が枯れるほどに叫び泣いた。フーも初めて見るようで、驚きを隠せなかった。それにも、ダメ男は気付かずに泣きわめいた。

すっかり夜が更けている。何かの鳴き声が寂しく独り歩きする。そんな夜中に仄かに明かりがついていた。闇夜に溶け込んでいく
橙色、そのおかげか、ダメ男とテントが仄めく。

焚き火だ。辺りの地面は燃えるものがないようだ。

ゆらゆらと炎が揺れ動く。ダメ男は雲を眺めるように、ぼーっと眺めていた。

「……………」

「ダメ男？」

フーはダメ男の膝の上から呼びかけた。

「なんだよ」

ダメ男の耳に伝わっている。炎のせいなのか、顔が赤かった。棒読みで返事をした。ぐりぐりと地面を指でほじくっている。

「オレはバカでクズでゴミで臆病者で性格破綻者で単純で下品で変態で暴力的で粗暴なやつだからな。……フーに迷惑しかかけてないな」

指の第一関節くらいまで深くなった。爪の間に土が入り込む。

「そうですね」

「……………」

ダメ男は言い返さなかった。

「それは、迷惑をかけられないほどに疎遠な関係ではないということですよね」

「……………フー……………」

「か、かんちがいしないでくださいよっ？ だからといって、ダメ男がダメ人間で変態であることに変わりないんですから！」

やけに声を張る。

「私も迷惑をかけていないわけじゃないですし、そ、その、はい、そういうことです」

「……………」

ダメ男はくすりと笑う。

「……………ごめん」

「まったく、本当に反省してください。普通の人間関係ならば縁を切るレベルなのですから」

「はい」

「お人好しで単純明快で寂しがり屋なおバカさんでは、一人旅がで

きるわけがないのです」

「……うん」

「それと、もう少し身の程を弁^{わか}まえて、自重してください。デリカシ
ーやマナー、エチケットを死ぬほど守ってください」

「はい……」

「それともう一つ、言いたいことがあります」

「なんだ？」

ダメ男は温めたスープを啜^{すす}った。

「もう、泣かないでください」

「……それは、状況によつてはむり、」

「ダメ男が泣いていては、どんな状況でも、こちらまで胸が苦し
くなります」

「……」

スープを一気に飲み干し、水をごくりと飲んだ。

「できるだけ」

「ダメ男、顔が赤いですよ？」

「これは焚き火で顔があつたまつたからだよ！」

「そうですか」

「……ああ」

「ダメ男は嘘が下手ですね」

「フーもな」

ダメ男は焚き火を消して、テントに戻っていった。おやすみ、と
声をかけ、おやすみなさい、と交わし、床に就いた。

ある所に大層仲の悪い旅人夫婦がいた。事ある毎に喧嘩^{けんか}し、もは
や壊滅状態で修復不可能だった。

大草原の中歩いていると、目の先に街が見えてきた。城壁に囲ま
れ、いかにも頑丈そうな作りだ。

ここが面白い所らしい、と男が言う。女は、あっそう、と興味な

いようだった。

男は門へと足を運ぶも、門番もいないし、門が開く様子はない。苛立っていた女が蹴りを入れると、ぐしゃりとひしゃげてしまった。男も倣ならって破壊していくと、中から悪臭が漂ってきた。鼻が激痛を発するほどの悪臭に、女は嘔吐した。男は何とか堪え、女の忠告を無視して中に突き進む。

中は死体の山だった。ハエやウジがたかり、どす黒い血溜まりと肉の海が無造作に放置されている。この世のものとは思えない光景に男も吐いた。すると男の背後から女が。

甲高い悲鳴と轟音が何回も響く。悲鳴が止んでも、轟音は止まらなかった。

「結局、あの街は何だったのでしょうか？」

「分かんないな」

「せっかくオススメしてもらったのに残念です」

「ダイナマイトとか使っても壊れなかったりしてな」

「まさか、そんなわけはありませんよ」

「……やっつけば良かったな」

「住人がいたらどうするのですか？ 間違いなく死亡しますよ」

「確かに」

「それより、次はどこに行くのですか？」

「……行くあてなし」

「それならば東ですね。確か、平凡な街があると聞きました」

「まじか」

「？まじ？です」

「いつの間に……。んじゃあ、ちよつと骨休みに行くか」

「昨日は休んでばかりでしたからね」

「……オレのせいかな？」

「はい」

「そうか……」

「いつまでしょぼくれているのですか。これを聞いて元気出しましょうよ、カチッ」

「……？カチッ??？」

「ごめん、フー……！ もうひとりに……ひとりにしないでくれっ
！」

「え？ こ、これって……ましゃか、」

「念のために録音していました」

「や、やめるよ、ってかそんな機能まであったのっ？」

「ダメ男が有効活用してないだけです」

「悲しき発見だな……じゃなくて！」

「ごめん、フー……！ もうひとりに……ひとりにしないでくれっ
！」

「それ、乱発するなよ。恥ずかしいから」

「保護もかけて暗証番号も設定しましたから、削除できませんよ」

「ええっ？ まじか！ ちょ、ちよつと消してくれよっ」

「さて、次はどこに行きましょうかね」

「フー！」

「これはダメ男に対しての戒めいましです。昨日言ったことを忘れないた
めです」

「……何か言っただけ？」

「ごめん、フー……！ もうひとりに……ひとりにしないでくれっ
！ ごめん、フー……！ もうひとりに……ひとりにしないでくれ
っ！ ごめん、フー……！ もうひとりに……ひとりにしないでく
れっ！

「分かった！ 分かったから、もうやめてくれええ！」

「今の惚とほけたのは完全にフリでしたよね？」

「……うん」

「素直でよろしいです。ちなみに、これをラップバージョンや女の子バージョンにもできますよ」

「変なアレンジ加えんなっ」

「あはは」

「笑い事なのか？ これ……」

「私も、忘れませんか」

……また一人は嫌なんだ……お前がいなきゃだめなんだ……

第五輪：ひろいとこ

ちようどすれ違いざまでした。

「こんにちは」

人当たりが柔らかかそうな男が話しかけてきました。その男は雑談しようとする向き合います。

「……どうも」

一方、話しかけられた男は無愛想に応答します。向き合わず、相手に背を向けたままです。

「どちらに向かわれるんですか？」

「こやかに尋ねると、」

「この先にある所に……」

「ぼそぼそと呟くように返します。」

「もしかして、墓地か何かですか？」

男は沈黙して立ち止まり、

「ああ……、実は私も行ったんですけど、かなり廃れていましたよ」

「……それでも、行くだけだ」

「素っ気なく立ち去ろうとしました。しかし、」

「それなら、私と一緒に行きませんか？」

「声高に呼び止められました。」

「ここからそんなに遠くない場所に小さな集落があるんですよ。必要な物資が入るかは保証できませんが、足休めにでもどうですか？ あなたもかなりお疲れのようですよ」

「愛想よく勧めてきます。」

「それに、あなたが行くこうとしてる所は複雑に入り組んでいて、きちんとした準備と相当な覚悟がなければ、地元の方でも迷いこんでしまうところです。ここで爪先を変えていただかないと、私があなたを殺した気分になってとても気持ちが悪いです」

「……」

男はようやく向き合って、歩み寄ってきました。もう一人の男は二コリとして、歩き出します。

「はい。では、行きましようか」

今にも雨が降り出しそうな曇天で、春の夜中のような肌寒さが辺りを包みます。

疎らにはげた林に、粗雑に舗装された道が間を縫うようにいくつか通っています。落葉の季節でもないのに、哀愁漂わせる暖色系が風景を彩ります。その中を男が二人歩いていました。案内役の男の後ろにもう一人の男が、少し離れて付いてきていました。

案内役の男は無地の白いシャツに下半身を丸ごと覆う鋼鉄製のこついでブーツという妙な格好で、腰に刀を据えており、荷物は特に持っていないようです。体格もよさそうなくせに、爽やかな童顔です。「私の名前はデインです。あなたは？」

「……」

後の男はただ黙々と歩いています。

皮のフードが付いた黒いジャケットにダークブルーのジーンズ、薄汚れた黒いスニーカーを着用しています。岩石のようにごつく黒いリュックサックを背負い込み、ウエストポーチを両腰にそれぞれ一つずつぶら下げています。フードを深く被り、顔色がはつきりと窺えません。

「すみません、調子に乗ってしまっ……。もう少しかかりますので、その間の辛抱をお願いします」
「分かった」

二人はさらに歩いていきました。進んでいくと、はげていた林に木々が増えていきます。道も一つにまとまり、やがて森林を二分するような道になっていました。しかし、道は段々と荒れ、ひび割れや砂利が増えて、足で踏む度に、森林に響く騒音と化しています。鳥や虫の声もないこの森林で砂利の音だけ。それが虚しくも寂しく

も感じさせていました。

黒い男は左耳に指を当て、何かを押し込んでいるようです。よく見ると、そこから黒い？線？が繋がっていて、服の中へと隠れています。案内役の男？デイン？は、

「耳が悪いのですか？」

遠くから黒い男を見遣ります。

「……ああ。数ヶ月前に戦争に行ってきたんだ」

「戦争……ですか」

「そこで爆弾に直撃しかけたんだ……」

「なるほど、爆撃音で耳を……」

「治りかけてるんだけど、念のため保護してる」

「フードをしてるのも？」

「……視線が気になるもんでね」

「でも、あなたみたいな格好の人、たまに見かけますよ。誰かに憧れているかのようです」

「そうか？……オレは逆にあんたみたいな人をどこかで見た気がする」

「そっくりさんかもしれないですね」

二人が話していると、

「あれか」

「意外と普通でしょ？」

「……そう、なのか？」

木々に囲まれた集落が見えました。集落のバリケードとして木々が密集していて、人一人も通れなさそうです。そして、二人の目の前だけが中に入れる玄関となっていました。

中に入れば、木造の家屋がいくつもあって、芝生が生い茂っています。天を仰げば、木々の枝が密集していて、集落の屋根代わりになっています。そのおかげで、雨粒が集落の外へ流れていきます。傘は不必要のようです。

ほんの数滴が黒い男のフードに当たり、すっと下へ伝い落ちまし

た。

「晴れていれば光が差し込んで幻想的な風景が見られたんですが…

…」

「すごい……」

デインは宿屋を紹介してくれて、黒い男はそこで二泊することに決めました。

夜。

「耳は大丈夫ですか？」

クールな女の？声？が男に話しかけます。しかし、部屋には該当する人物がいません。それなのに男は、

「森林浴には持ってこいな場所だな。雨がやんだら、やってみようか」

違和感なく返事します。

部屋は六畳くらいで、ベッドやテーブル、浴室といった設備もあります。しかし、明かりが弱かったので、電光式のランタンを点けています。

男は椅子に座って、テーブルで荷物を広げていました。ジャケットはベッドに脱ぎ捨てていて、黒のタンクトップを着ています。

耳から赤く滲にじんだ綿を抜き取り、新しいものと丁寧に取り替えています。

「まさか、耳の穴を掃除しすぎて引つかいてしまったとは言えませんがね」

「うるさい」

今度は使い込まれた布と液体を取り出し、布に液体を浸します。それで手元に置いてあった水色の蝶番ちゅうつがいを拭き始めました。

「ただ、気色悪かったな」

「ダメ男の顔ですか？」

？ダメ男？と呼ばれた男は、

「痛いです」

テーブルの角に蝶番をぶつけました。

「そういうことを言うからだよ」

「実力行使ですか。酷いにもほどがあります」

「どつちがだよつ、フー！」

「フー？と呼ぶ蝶番をこまめに拭き直します。

「見られてた。じつくりとな」

「自意識過剰です。ダメ男のきもちわ、すみません、ぶつけないでください」

「分かればよろしい。で、見られてたというより、虎視眈々（こしたんたん）と監視されているような……そんな視線を感じた」

「つまり、ダメ男の命を狙っているということですか？」

「そこまでじゃないと思うけど、追い剥ぎか何かじゃないかと思う」

「確かに、簡素な村を装った大胆な手口よておは何回も経験していますからね。雰囲気ふんいきが似ているということは、それに類したものだと察しがつきます」

「とりあえず、油断はできないな」

「そうですね。そして時にダメ男、伝えたいことがあります」

「何だよ？」

「でエたガはそんなシマシタ」

「うわあああ、まじか！ ごめん！ もう乱暴にしないから、き、消えるなあああ！」

「ウソです」

「……」

「乱暴にする男性は女性から嫌われますよ」

「……肝に銘じとく」

夜が明け、日が差し始める頃、大雨が降っていました。冷たく降り注ぐ雨は緑の屋根を伝い、集落の外へと流れ落ちていきます。――

方、中だけは雨脚が鈍っていました。

部屋で唯一の窓に、ぼつぼつと雨で殴る音が響きます。その窓からダメ男は外を見ていました。

「朝だけど、少し薄暗いな」

「そうですね。こんな所ではお買い物もできませんね」

「でも、こんな場所は滅多にない。……いい所だけだなあ。あゝあゝ……幻想的な風景とやらを見たかったな」

「ごろりと床に寝っ転がりました。」

「昨日の言葉はどこに行ったのですかね。それはそうと、明日の朝は晴れるみたいですよ」

「お、それは楽しみ」

「幻想的な風景とやらが見られると思います」

「じゃあ、今日は張り切って運動しようか」

ダメ男が勢い良く立ち上がって取り出したのは、エグイほどに鋭いナイフでした。刃渡りが拳三つほどの長さで、柄えも同じくらいです。その柄は黒い骨組みに薄く透明な膜が貼られています。

「ちゃんと大切に扱ってくださいね。借り物なのですから」

「分かっているって。昨日、めっちゃお手入れしただろ」

「ダメ男の生命線ですから、当然とも言うべきです。ところで、もう一つの方は最近使っていませんが、どうしたのですか？ 竹みたいなナイフです」

「ああ、あれはちょっと調子が悪いからお休み中。鎖が切れちゃって、今直してもらっている」

「そうですね」

「ちゃんと取りに行くから大丈夫だよ」

ダメ男はするすると衣類を脱ぎ、タンクトップとパンツ一枚になりました。

「傷が増えましたね」

「そう？ 痛みはないから気にしてないけど……」

露出している肩周りから腕に、いくつもの傷がありました。切傷、

銃創、火傷、痣^{あざ}など、筋肉の盛り上がりとは別の凸凹^{こぼれ}があります。

ダメ男は舞踏^{こと}のように、ナイフを使って練習しました。敵が目の前にいるかの如く立ちふるまい、想定した敵の急所を的確に狙います。

「ところで、その格闘術は誰に教わったのですか？」

「独学、というか自然体」

「よくそれで生き延びていきましたね」

「勝てない相手とは戦わないからな」

「なるほど。正論ですね」

ダメ男は練習を終わりにしました。その瞬間、雨を浴びたように汗がどつと出てきました。ストレッチを十分^{おこな}に行ってから、お風呂で汗を流します。

お風呂から上がって、ベッドに放置していた黒いジャケットに着替えました。ナイフは砥石^{としい}で整えて、収納してポーチにしまいました。

朝食に土を固めたようなブロック型の携帯食料を食べます。もそもそとして、最後は水で流し込みました。

それから数時間、ずっと部屋でごろごろしていました。が、

「……うん」

ダメ男の表情は曇る一方です。それを察したフーは、
「音声をイヤホンにしますか？」

ダメ男に片耳だけのイヤホンを差し込んでもらいました。ダメ男は黙って相槌を打ちます。

そして、改めて外を見て、

まだカーテンが閉まっていますね

「……突き刺さるような視線と殺気……」

ダメ男の感覚は動物並みの鋭さですね

状況を確認しました。ダメ男とフーは至って冷静です。

「デインには申し訳ないけど、ここから出ようか」

リュックから革製のフードを取り出します。それをジャケットの

襟えりに取り付けます。

それを浅く被り、荷物を持ちます。ダメ男は扉に耳を当てると、何かを感じたようです。

複数の木が軋む音がします

「……………」

ポーチから円柱状の物体を取り出しました。それには丸い取っ手が差し込んであり、それを引き抜きました。

「……………」

？三？、のタイミングでドアを少し開け、円柱状の物体を隙間から転がし、またドアを閉めました。その直後、爆発音がしました。少しだけ部屋が揺れます。

煙がドアの隙間から漏れ出したのを確認して、ダメ男は廊下に出ました。廊下はどす黒い煙で何も見えなくなっています。しかし、ドタドタと誰かが走っている足音ははっきりと耳に入りました。

一旦部屋に戻ることにしました。

足音は二人分です。かなり重装備だと思われれます

ダメ男は親指を立てて、反応します。

中に引きこもっていても、手榴弾を投げ込まれる可能性があります。早く脱出すべきです

「オレを殺すのが目的なら、最初から手榴弾と言わずミサイルでも何でもぶち込むだろ」

つまり、拘束が主目的であるということですか？

「オレにはそんな価値はないと思うけどな……。とりあえず様子見だ」

それからダメ男たちが身構えてから数時間経過したが、

「ふう」

何も起こりませんでした。念のため、防弾ベストをジャケットの下に着用して、手には掌サイズのナイフを握り締めています。それでも、さらに数時間しても何も変わりませんでした。

「……………ふう」

ずっと神経を集中させ、気配や物音、臭いを察知しようとしています。しかし、さすがのダメ男にも疲労の色が出てきてしまいます。大して動いているわけでもないのに、額から玉の汗が滴り落ちます。ドアや窓付近の壁などに耳をあて、探りますが、雨音が強くなっている、聞こえにくくなっていました。冷静だったダメ男に、余裕が失せていきます。

食料は何日分ありますか？

「一日二食計算だと三日分くらい。長期戦じゃ間違いないとお陀仏だ」短期決戦では不確定要素が多すぎて難しいですね。もう相手のことを考えるよ、

その時、

「！」

床に穴が空けられ、木片と一緒に何かが出てきました。

「マジかよ！」

ダメ男！ にげ、

フーの言葉を断ち切り、部屋は強烈な閃光に塗れました。網膜に無数の針が突き刺さるかのような閃光。ダメ男は、

「ぐああああああっ！」

目を覆って、蹲ってしまいます。

ダメ男！ ダメ男！ しっかりしてください！

「め、めがああ……！」

すたつ、と目の前にサバイバルブーツが迫ります。

「奇襲成功。獲物はクリア」

「袋の準備完了。獲物を確保する」

迷彩服の男が二人、ダメ男を囲みます。服の上からでも筋肉で膨れ上がっているのが分かります。

「お前らは何者だ！ 離せっ！ ぐうぬ……離せ……！」

ダメ男は懸命に暴れます。しかし、体格差がありすぎたのか、ひよいと担がれると、呆気なく袋にぶち込まれたのです。

敵の一人がダメ男のリュックをてにとります。

「これより帰還する」

二人が肩に担ぎ、歩き出した途端に、

「！」

手元が狂ったのか、袋を落としてしまいました。

「何をしている！ 早くはこ、……！」

ついでに、ぼとりと肩から先の腕も落としてしまいました。

「ぎゃあああああああ！」

下品な金切り声と一緒に溢れ出だす真っ赤なシャワー。びちゃびちゃと袋や床を血で濁してきます。その間にダメ男は急いで脱出します。

「き、きさまあああ！」

「死ねつええ！」

二人がハンドガンで応戦しようとした瞬間、ダメ男が二人とすれ違いました。

「？」

「へあ？」

二人が見ていた景色はごろごろと回転していき、やがて動かなくなりました。

「ふう」

残された身体も自然に倒れます。ぴくぴくと痙攣^{けいれん}して、ぴくりとも動かなくなりました。

首のリアルな断面図の出来上がりです。血が吹き出ていますが。

汗だくのダメ男は手で汗を払い落とします。

騙し討ちですか。驚きました

ナイフにはべつとりと血と何かの欠片が付いています。それを？元？人間の衣服で拭き取ります。そして、二体の所持品を粗方回収^{あらかた}して、銃は解体して破壊しました。

ふとして、ダメ男は死体の服の中に何かを見つけました。無理やり剥^はいてみると、黒いイヤホンのような物が襟元に装着されていて、コードがズボンの方へと伸びています。辿っていくとポケットにト

ランシーバーが入っていました。死体の耳からイヤホンを外し、自分の耳に入れます。

……しろ、ヒツジ、どうした？

「お前ら、一体何者だ？」

相手は一瞬黙ります。

知りたければ降伏しろ

「なら知らなくていい」

……ククク

相手は嘲笑います。

「今のうちに言っておくが、オレに危害を加えるようなら容赦はない。あなたの部隊を全滅させるだけだ。手を引けばこちらから攻めることはしない」

随分と駆け引きが下手だな。こちらには時間があるのでな。たっぷりと可愛がつてやろう。無様に地べたを這いずり回れ、青二才が……っ！」

ダメ男は床に思い切り叩きつけ、踏んづけて木っ端微塵にしまった。

何を企んでいるのかは分かりませんが、長くなりそうですな

「ターゲットをこの森から逃がすな！ 十五人で包囲し、連携しながら追い詰める。できるだけ捕獲しろ！ 万が一の事態には例外だ！」

「了解。アリ、コウモリ、ネコ、イヌ、ゾウの部隊は包囲を開始。捕獲優先とし、想定外の事態はクリアせよ」

アリ、了解

コウモリ、了解

ネコ、了解

イヌ、了解

ゾウ、了解

「絶対に後悔させてやる……」

鬱蒼とした密林、そこから滲み出る雨粒、半ば泥沼状態の地面。雨音が密林での唯一の音でした。

雨がしきりに降り、徐々に強くなっています。ダメ男の服は雨でずっしりと重くなっていました。衣服を着たままプールに入っただけのようにずぶ濡れです。

ダメ男はというと、木に登って一休みしています。木の枝に脚を挟み、木の幹に寄りかかっています。

「どうやら、オレを本格的に狙っているみたいだ」
ぼそぼそと呟きます。

そのようですね。今まではただのゴロツキばかりでしたが、あの二人、？見た目では？かなりの熟練者のようでした

「あんなのが何十人もいたんじゃ、骨が折れる……」
それに、デイン様も気がかりですね

「どうだか」

分厚い雨空に覆われ、光が森に差し込むことはありませんでした。むしる大粒の雨が陰りを強調して不気味に見せます。ダメ男の髪の毛の先端から、雨が滴り落ちていきます。

リュックは肩掛けのバンドを露出させ、それ以外の部位は黒い袋で包んでいます。近くの枝に引掛かっています。

そこに、三人やってきました。他には誰も見当たりません。ダメ男はフードをさらに深く被り、身を木の枝に伏せます。

声が聞こえてきます。

「……ゲットって、どんな風貌なんだ？」

「連絡きてないんすか？」

「寝てたからさ……」

三人はダメ男のいる木の根本で立ち止まります。一人が何かを取り出して渡しました。

「では改めて……。偵察隊からの情報によれば、二十歳前後で黒い長髪、百七十くらいです。装備はナイフが中心で臨機応変にあらゆる武器も扱えるみたいです」

「そして、ブービートラップや奇襲といった戦術も得意みたいですよ」

「ただ、左耳を負傷しているらしく、補聴器のような物を身につけているみたいです」

「……！」

ダメ男の表情が強張りこわばります。

ダメ男の追っかけにしては気持ち悪いですね。なぜここまでダメ男の情報が漏れているのでしょうか？ 今までも、そこまで話はいきませんか？

こくりと頷きます。

ということとは、かなり前から尾行されていたことになります。ダメ男に対して、相当な執着心と憎悪がうかがえますね。情報提供者はおそらく、

そのまま三人はダメ男に気付くことなく、通り過ぎていきました。それから数分後、悲鳴が聞こえました。

案外、間抜けなのかもしれませんね

ダメ男は物音を極力抑えて木から降り、慎重に歩きます。できるだけ地面が露出した部分を避け、木の根っこを伝い歩きます。

ダメ男の前方に大きな落とし穴がありました。近辺の木に身を隠し、様子を見ます。

確か、針山落とし穴でしたよね？

ダメ男は瞬きを細かく三回しました。フーは？ナムナム？と独り言こちます。

「！」

ダメ男は真上に、

「っ」

小型ナイフを投げました。

「がっ」

ぐしゃりと、先程の男が落ちてきました。腕にナイフが突き刺さっています。

「う、ああ」

次第に男は身体が震えてき、仰向けに倒れました。ダメ男は抱きかかえます。

「他の二人は？」

ダメ男は左目にナイフを突き付けました。

「その、穴の……なか……」

ダメ男はなんとか男を立たせ、千鳥足で向かいます。盾にしながら穴を見ました。確かに、肉塊が二つあります。

「い、いのちだけは……」

「なら、知っていることを全て話せ。煙に巻こうとしたら、指を一本ずつ切り落とす。喚いたり、騒いだりしてもだ」

「……」

くっ、と男の小指にナイフを突き立てます。

「三人十五部隊、武器は銃やマシンガン……」

「それで、オレを狙う目的は？」

「わ、分からない。俺達は傭兵ようへいなんだ。ターゲットを捕獲、抹殺するということしか分からない。本当だ！ 信じてくれ！」

「……」

ダメ男は男の、

「ぎゃあああああつ！」

……一ヶ所だけ、赤い雨が地面を赤く汚していきました。

「喚わめくなと言ったはずだ」

ダメ男、みだりに傷付けてはいけませんよ。敵の神経を逆撫でることにあります

「ひゅーっ、ひゅーっ、はあっはあっ……!!」

ダメ男は耳元で何かを囁きました。すると、男はぶんぶん頭を縦に振るうとします。

「傭兵、ということは依頼主がいるはずだ。誰だ？」

「それは知らない、本当に知らない、そによ早くたしけて……し、しぬっしぬ……」

「……」
ダメ男は紐を取り出し、男の手首をきつく締め上げます。流れていた血がやがて止まりました。

「残念。オレの期待を裏切ったもんな。正直に言えば間に合ったのにな」

ダメ男は男の？元？小指を摘みました。男は、

「たのむ、本当知らないんだ……！ やめてくれ……」

まだ痺れているのか、もそもそと芋虫のように蠢きます。

「じゃあ教えてくれるのか？」

まるで弱い者虐めで優越感に浸っているような憎たらしい微笑み。男は一貫して同じことを言いました。

ダメ男はなぜかペンチを取り出し、そこに挟み、

「はい、さよなら」

全力で握りました。

「うわああああああっ！ あっうん？」

取り乱した瞬間を狙って、後頭部を叩き、気絶させました。男はくたりと地面に転がります。

「……」

「……い、おい！」

「ん、ああ」

「大丈夫か！」

男は目を覚まします。他の仲間には保護されていました。

「尋問されたようだ、治療は済んだが……小指は……」

「……」

まるでプレスマシンにかけられたかのように、ぺしゃんこでした。

男はただ涙を流します。

仲間は六人いました。四人が陣形を組んで守り、二人が小指を失った男の手当てをしています。

「ターゲットはどうだった？」

「情報通りだった。ナイフはこれだ」

小指を失った男が渡したのは小型のナイフでした。

「情報通り、小さいナイフだが、切れ味がよく、痺れ薬が塗られていた。腕に直撃したら二十分は痺れて動けない」

「よくやった。これを化学班に鑑定させ、対抗薬を作らせよう」

小指を失った男は満足げに笑うと、そのまま目を閉じました。

「……」

「……ゆっくり眠れ。仇はう、」

その直後、その場は爆発しました。

両音以外の轟音が一帯を震わせました。音の津波がダメ男の衣服を摩なびかせます。

いつになくえげつない戦略ですね。度を越えた尋問、人間爆弾。

人道的に倫理的にダメ男の人格を疑います

ダメ男の耳にイヤホンから刺さる言葉。

「……殺意丸出しの相手に、手加減できるほどの余裕はない」

クズですね

いつになく、鬼気迫る雰囲気です。

ダメ男は来た道を帰っていました。しかし、見えてくるのは森ばかりです。

「あの道に帰れないな」

砂利道ですね？

「方角は合ってるか？」

この空間は磁気のような方角を狂わせる何かがあるみたいです。コンパスもダメみたいです。頼れるのはダメ男の野生の勘だけです

「……………」

ダメ男はさらに小一時間歩きました。しかし、辿り着きません。

「……まさか……………」

ダメ男は木陰に隠れました。

ただの迷子じゃないですね。迷いやすいように、獣道を見せています

「なら、別の道だ」

ダメ男は猿のように鮮やかに木に登り、辺りを見渡しました。

「！ 枯れ木が一つもない……………」

見えるところ全てが森林でした。くすんだ緑色一面です。

「こんなに広がったか？ あそこに行く時はぼーっとしてたから、広さを確認してなかった……………。いや、それでもこれは……………」

確かデイン様は、？墓地への道のりは地元の方でも迷いやすい？

と言っていましたよね？ それは墓地だけでなく、森林一帯全てだとしたら、抜け出すのは極めて困難ですよ

「それだけじゃない。連中に地の利があるってことにもなる。……………さっきのヤツ、生かすとけばよかった」

長期戦でも短期戦でも不利は確定ですね。今まで、こんな劣悪なじょうきよ、

ダメ男はいきなり、

「ぐあー！！」

呻き、

ダメ男！

バランスを崩して頭から落ちました。ばきばきと枝がダメ男を打ち付けます。メキメキと折れていきました。

「がはっあ」

何とか体勢を変え、膝を深く曲げ、前転して着地しました。

「……………」

ダメ男！ しっかりしてください！ ダメ男、ダメ男っ！

「だ、大丈夫……………っ、うああっ……………ぐう……………」

だらだらと脂汗を流します。悲痛な面持ちで、何とか身を起こし、木に寄り掛かりました。ぐはっ、と咳き込むと、血が吐き出されま
す。

内臓を傷めているじゃないですかっ！ 大丈夫じゃないですよ！

「このくらのピンチはいつものことだろ……」

しかし、

「！」

ダメ男は何かを感じました。

「っ」

すぐさまその場を立ち去ります。

左肩を撃たれたのですね！

「はあ、はあ、はあっ」

数十分走り続け、渾身の力で木を登りました。ダメ男の後を追っ
て、足音が通り過ぎていくのがかすかに聞こえます。そして闇に消
えていきました。

かなりの大木に登ったようで、幹が太いみたいです。一人一人くら
いが横になれるほどです。

ダメ男は木に感謝して、リュックを置きました。途端に、疲労感
で身体が急に重く感じます。全身を伝う雨と一緒に汗が流されてい
きます。

ダメ男がジャケットと防弾ベストを脱ぐと、左肩は黒に赤みが増
しています。

防弾ベストごとダメ男の肩を貫く威力、尋常ではありませんね
ウエストポーチから黒い傘とタオルを数枚、ピンセット取り出し
ました。傘を上にある枝に上手く引っ掛け、雨よけします。

ダメ男、辛抱してください

フーの言葉を無視して、タオルを啜くわええました。静かに、ゆっくり
と呼吸を整えます。

そして、

「ん、んんんううううううっ！」

思い切り噛みしめながら、ピンセットを傷口に差し込みます。肉を抉る感觸と悍しく溢れる血がダメ男の全身の神経を突き刺します。身体に染みだした雨と汗で濡れています。

ダメ男は全身で息をしながら、ピンセットを引き抜きました。その先には赤黒い弾丸が挟まれています。それを膝に乗せます。リュックからさらに包帯と薬瓶、黒い袋を追加して、止血を試みます。

「……………ぐああ……………」

止血はできそうですか？

苦痛で虚ろな表情を見せながらも、にこりと笑いました。

手馴れた手付きで、止血と消毒を繰り返します。薬をたっぷり傷口に塗り、包帯を軽く巻いた後に、しっかりと巻いていきました。何とか止血はできたようです。

「……………やつら……………まだ追ってくるかな……………」

間違いなく追ってくると思います

そして綺麗に仕上げた後、針穴の開いた黒い袋で肩全体を覆います。

ふう、と溜め息をつきました。

「……………だるい」

ダメ男？

「……………血が足りないな……………」

ウエストポーチから、携帯食料を取り出しました。もそもそと一箱平らげます。手が震えていました。

長期戦でしょうか？

「分からない。でも、少なくとも四十人くらいはいるからなしんどい」

まさに、？痴漢死ね？ですね

「……………」

どうしました？

「ツッコむべきなのか……………うん……………」

まさか、常習犯ですか

「違うから……。？四面楚歌？な。最近キワドイこと連発してないか？」

「そうですね？　そうでもないと思いますが」

「自覚しろよ……。ふう、大分楽になった。鎮痛剤が効いてきた」

またダメ男は怪しいクスリに手を出して、何回言えば分かるのですか

「大丈夫、安全な薬だから！　しかも？　また？　ってどうということだし！」

だ、ダメ男！　静かにしないと、

「！　やば！」

「いたぞ！」

ツツコミ体質が仇あだとなりましたか

「冷静すぎるだろ！」

木の根元に敵が一人構えていました。傘を素早く取り、銃弾を避けながら、ナイフを投げます。

「あっ！」

ダメ男は兵士の手元を狙い、銃を手放させました。そして、

「あぼ」

開いた口にも投げ込みました。ダメ男はすぐに迫り、首元を切り裂きます。凄まじく血を流しながら、敵は倒れました。

「！」

そして衣服を破り取りながら、すぐに近くの木に身を隠しました。取った服の一部でナイフを拭き取ります。

「おい、そこにいるんだろ？　それだけ殺意湧いてりゃ、齒軋りもするだろうに」

ダメ男の先にある大木の陰から、兵士が二人出てきました。自分の代わりに手鏡を覗のぞかせます。

「殺してやる」

「絶対に殺してやる……！」

双子みたいですね

確かに顔がそっくりでした。しかも、二人ともマシンガンを持っています。ダメ男のいる木に照準を固く合わせました。

「兄貴の仇……ここで討つ！」

「ちよつと待て。オレを殺す前に聞きたいことがある」

「……？」

左の兵士が銃口を下げました。

「話に乗るな！」

「お前らと依頼主は同じ組織の人間か？」

「違う。オレたちはただの傭兵で、個人の依頼だ」

「つまり、関係としては深くないわけか」

「もうお前は喋るな！ 早く殺すぞ！」

「まったく、やっと来てくれたか」

ダメ男が急に姿を現して、

「！」

その視線に、二人は振り返ってみると、そこには、

「おぼっ」

誰もいませんでした。しかし、隣を見ると、

「！」

死体が一つ転がっていました。喉元にナイフが深く突き刺さっています。そして、

「動くな。叫べば同じ目に遭うぞ」

ダメ男がナイフを突きつけていました。

「ひっ……！」

「お前はまだ新米のようだな。もう一人とは違って、まるで殺意がない」

「！ わ、私は、」

「とにかく、ここから離れるから付いて来い。殺しはしないつもりだ」

「？ つもりですか」

二人を殺された新米の兵士は、なぜかダメ男の指示に素直に従っ

たのでした。

「何？ ゾウがやられただと？」

ゾウから応答がありません

「了解。ゾウの代わりに八工を増援する。作戦は続行せよ」

了解。作戦に戻ります

「幸運を祈る……」

「ふふ……。随分と手こずってるようだが、大丈夫か？」

「元々こちらとしては長期戦を狙っています。もって二日でしょう。そのためここを選んだのですから」

「これで四部隊、つまり十二人消されている。このペースじゃあ、こちらが二日も持たないぞ」

「お伝えしませんでした、この作戦は言わば布石なのです」

「！」

「ターゲットは人質をとるのは容易いはず。それを逆手に長期戦だと思わせ、短期戦に追い込む。そればかりに集中させるのです。最終作戦はこの一帯に毒ガスをばらまきます」

「そんなことしたら、死ぬだろう！」

「四部隊を沈めたターゲットはもはや危険であり、捕獲は極めて困難です。ならば、手段は一つしか、」

「もついい、私が指揮を取る」

「は？」

「お前は……」

「！」

銃声は消音器と雨音でかき消されました。何発も。

「女？」

「はい」

「女が依頼主かよ」

男女差別ですよ

「それより、デインだとは思わなかったよ」

デインはダメ男の後ろを歩いています。時々、背後を見て、尾行されていないかを確認します。

「なぜ、オレに協力する？ それに、オレはお前の兄弟を殺したんだぞ」

デインはくすりと笑いました。

「あれは兄弟でも何でもありませんよ」

「？」

「顔を整形したんですよ、あの二人は。私の顔に似せてね」

「……」

ダメ男は唇をきゅっ、と噛み締めました。

「今回の作戦で、部隊はメンバーの誰か一人に顔を似せてます。おかしいとは思っていましたが、やはり関係ありましたか。あなたとどういうことですか、ダメ男？」

「お前には関係ない」

「でも、クライエントがだれか想像出来るんでしょう？」

「どうということなのですか？」

泥沼にはまらないように、足元を確認しながら歩きます。

「……話が逸れたな。なぜ協力する？」

デインはダメ男に何かを手渡しました。

「私たちの部隊だけに与えられた極秘作戦に、賛成できなかったからです……」

「防毒マスク？」

まさか、どく、

「ガスを使用し、味方もろとも殲滅する作戦です」

「！」

デインはダメ男の先を歩いていきます。

防毒マスクはなぜか捨てていきました。

「今回の任務はあなたの捕縛ですが、いくらなんでも犠牲が多すぎます。しかし、隊長は強引に極秘作戦を私たちに託したんです」

「……」
「だから、あなたにこうしてほしいんです」

デインはダメ男にナイフを準備させ、それを自分の背中に当てがうように指示しました。

「私はあなたに脅されたかのように振る舞えば、違和感はないはず」
「……分かった。だが、万が一の時には、」
「それはあなたが一番分かっているでしょう？」

「……覚悟は受け取った」
「では、行きましようか」

つつ、とダメ男は指でデインを押して、歩かせます。最初と違い、二人の距離はナイフ一本分くらいですが、デインは再び案内役となりました。

ぐしょぐしょになった獣道は雨で飛沫をあげ、はねています。そこを通らずに木の根を渡り歩き、暗い森の中を進んでいきました。二人の衣服は最早びっしょりで、身体をとことん冷やし、疲労感を麻痺させていました。特にダメ男は足の指先から突き上がる痛みと身体の中から走り回る激痛に、痛み以外の感覚を失いかけていました。

大丈夫ですか？ あの時の怪我が、
「心配すんな。……いつものことだろ」

ダメ男は囁きました。
「大丈夫ですか？ ペースが落ちてますけど、休みます？」

ダメ男は濡れた頭をがしゃがしゃと掻き回しました。
「心配性なやつが多いな、ったく……。ほら、早く歩かないとナイフが刺さるぞ」

「？」

ダメ男が強がりなのですよ
そうして歩いていると、次第に、

「雨、弱くなつてきましたね」

「足音を消したいこちらとしては……嬉しくはないな」

「もうすぐそこですよ。日も差してきましたね」

「一日が回ったってことか？」

「そうみたいです」

森がぼうつと仄かに明るくなつてきました。そして、見たことがある風景に差し掛かりました。

「……あれ？　ここって……」

「そう、本部はここにあるんですよ」

「敵に全然遭遇しなかつたな……」

「抜け道を通りましたからね」

「……それは何よりだけど、まさか、敵の巢の中で休んでいたとはな。ってか、お前がそう誘導したのか」

「あなたは用心深そうで、わりと騙されやすいみたいですよ。すね間抜けでお人好しだから大馬鹿で仕方ないのです」

二人して、くすりと笑いました。

ダメ男とデインは警戒心を解くことなく目の前のことに集中し、とある民家に素早く侵入しました。入ると、玄関から一本道の廊下を通つて、居間に達するように見えます。ダメ男はたまたま玄関にかけてあつた雑巾ぞうきんで、靴底を拭ふいて泥を落としました。

ダメ男がデインに合図して先に歩かせますが、特にないようです。すたすたと歩いて行きました。しかも、勝手に奥まで入ってしまいました。

デイン様は何をして、

「たいちよおおおっ！」

「……」

どさりと、デインは尻餅ししもちをついていました。その顔から良からぬ雰囲気しか感じられませんでした。ところが、ダメ男は驚く素振りも全く見せずに、廊下に入った瞬間、ナイフを、

「！」

ゆっくり下から振り上げました。ところが、

これはまたなんと

「やっぱりな……」

その手は急に止まりました。いや、止められました。高さはダメ男の脛すねの半分くらいです。

ダメ男はポーチからタオルを取り出して頭を拭ぬぐいました。それを丸めて廊下の方へ、高さは同じくらいで投げると、

あらあらあらあら

通過することにはすばすと、何等分かに切断されていきました。

「古典的だな……」

ダメ男は急ぎながらも廊下に張られた？鋼鉄線？を切っていきます。デインはくすり、とまた笑いました。

「オレが引つ掛かると思った、……！！」

すると、死体が一つ転がっていました。

「こっちはマジかよっ！」

「！！」

頭おほと思しき部位がぐちゃぐちゃに散乱しています。中身が露にされ、硬質の白い物体とゼリー状の白い物体が破損しています。そこから血あひただが夥しく溢れ返っています。近くにあるテーブルの脚を赤く染色していました。

全く動いていませんでした。

その死体は男です！ 女がいません！

「！ デイン、お前が言っていた？女？つてのはどこにっ、」

「後ですよ」

そこで、ダメ男の意識がなくなりました。

「ご苦労様。死体は放置して」

デインがダメ男の耳からイヤホンと首飾りを外し、女に渡しました。その後、身体を抱えて隣の部屋に運びます。

「あなたが？フー？だな？」

女が呼びかける対象物は、首飾りの水色の四角い物体でした。

「はい」

？声？は素直に答えました。これが？フー？のようです。

「あなた、いい声を持っているな。私のように野太いものではない。年齢的には、」

「それ以上は言わないでください。詮索せんさくされたくありません」

「……」

女はテーブルにフーを乗せ、自分も座りました。

「あなたは十五歳くらいとみた」

「っ」

にこりと女は微笑みました、一方のフーは珍しく舌打ちをします。

「こんなお嬢さんがどういう経緯けいゐであるような男と知り合えたか分からんが……、」

女は椅子を蹴り飛ばしました。無表情です。

「あなたは奴やつに騙だまされている。今すぐ縁を切るべきだ」

「それはこちらが決めることです。それよりも、あなたはなぜダメ男を狙うのです？」

「……」

女は腰にかけているホルスターから、銃を抜き取りました。

「あの男は……私の弟たちを殺した……！ その復讐を果たすために、私の心臓は動いているのだ……」

フーは言い返せませんでした。何も言えなくなつて、話題を逸らしにかかります。

「ダメ男を、どうするつもりですか？」

「もちろん殺す。だが、ただじゃ殺さない……！ 罠なわり殺しにしてやる！」

女はフーを鷲掴わしづかみにして、隣の部屋に向かいました。そこには、椅子に座っているディンと、ベッドに縛り付けられたダメ男がいます。ダメ男はまだ意識が戻っていません。

「毒ガスもセツトしましたよ」

「恩に着る」

「！まさか、一連の企ては、」

「そう。私が仕掛けたものだ。あの軟弱部隊に私の部下を紛れ込ませ、最終的に全てを毒殺する。何も残さないように……」

「私は彼女の部下にすぎません。極秘作戦も彼女からですし、隊長に提案したのも私です」

「で、では全てが、」

「そう、ダメ男さんをハメるための芝居ごぼしと裏工作でした」

女はダメ男に銃を突きつけました。

「もう起きているんだらう？」

「……」

銃口を左肩に押し付け、引き金を、

「ぐああああああ！」

引きました。ぱしゅっ、と気の抜けた音しかしません。しかし、撃ち抜いたところから、じわじわと血が滲んできています。

女はデインに銃を渡し、そして別の銃を受け取りました。その銃は、円筒状の黒いバレルが二つくっついていて、銃口が普通の銃より大きいです。ひらがなの？し？のような形をしていました。グリップにはなぜか黒い毛玉と貝殻のキーホルダーが付いています。

フーはそれを見て、凍りこおりました。

「止めてください！」

「フーさん、黙らないと壊しますよ？」

「っ」

デインはにこにこして、大工が使いそうなトンカチを振り上げています。

ダメ男は目を覚ましました。血と一緒にべたつく汗も流しながら、臆おぼろげ気な目付きで女を見ました。

「あ、あんたは……」

「ほお、覚えていたか。たとえば、お前が忘れていても、私は絶対に

「忘れない！」

女は二十代後半くらいで黒い長髪を後ろで結んでいます。左目尻に泣き黒子があり、縁が太くて黒いメガネをかけていました。雰囲気キツく厳格そうな感じの色白なお姉さんでした。似合わないごつい軍服を着ています。

ダメ男を思い切り殴りました。砕いたような鈍い音、ダメ男は咳こみました。どろりとした吐血です。薄らと涙を浮かべています。

次に銃口をダメ男の左肩にぐりぐりと押し付けます。歯を食い縛って脂汗を垂れ流しています。苦悶の表情と、恐怖による身体の震えが止まりません。

「姐さん、暇なんですか？」

「外で……見張っててくれ」

「分かりました。……ああ、それと、彼……身体傷めているみたいですよ」

デインはその場からささっと出て行きました。

「よくも私の弟を殺したな……」

「もう止めてください、お願いします、お願いしますから、」

「私の弟も殺される直前は、きつとそう命乞いをしていただろう。でも、この男は無慈悲にも身体を引き裂き、頭を撃ち抜いて殺したのだ！ 許すものか、容赦するものかあつ！」

女はダメ男の左肩を何発も撃ちました。恐ろしいほどの重低音とフーの悲痛な叫び声、そして、

「あああああつぐあああああつ、ヴあ！ あああああつ！」

何かを引きちぎられるように泣き叫ぶダメ男の声が森中を伝播していきました。

防弾ベストや応急処置の包帯、ジャケット、ダメ男の左肩ごと爆発したように血や肉片飛び散っています。肩甲骨や鎖骨、腕の骨が砕け散って、血管や神経、筋肉がぐちゃぐちゃに引きちぎられています。

ダメ男は左肩から電撃が体中に走るような激痛に襲われました。

そのせいで全身から脂汗がさらに溢れ、身体に溜まっていた体液や排泄物全てが出されてしまいました。最後には声が掠れすぎて空気が通り抜ける音しか出ません。

「……あ……あ……」
「ふんっ。痛みで小便糞便垂らしても、意識は辛うじてあるようだな」

「はあ……はっあああ……！」
「臭いものだな……ヒトの汚物というのは。くさいくさい……」

「……」
「貴様のイチモツもショットガンで吹き飛ばしてやるのか？ うん？」

女はダメ男のものに銃口を向けました。ふるふるからガタガタと身震いが激しくなります。ダメ男は、

「え、うええ！ おふっ！」
嘔吐して、左側に胃の内容物を吐き出しました。胃液に血が混じっていて、ベッドのシーツを淡い橙色で汚しました。

「あっはっはっはっは！ 口からも臭いものを出すか。怖いのか？ 使い道などないだろう？ ククク……」

「……うえ……」
女はダメ男の胸を足で踏んづけました。

「っふ！ ……」
枝が軋むような感触がして、ダメ男は口から血を流しました。

「なぜ殺した！ なぜ弟を殺した！」
ダメ男の眼からみるみる生氣が薄れていきます。顔に血の気がありません。いや、まるでもう死んでいるようです。

「こ、ころせよ」
「なに？」
「っ」

ぶっ、とダメ男は赤い唾を女に吐き捨てました。頬に付いて、どろりと伝います。

「き、きさまあああああ！」

女はさらにダメ男を殴りました。その度に吐血し、折れた歯を吐き出し、骨を砕かれ、意識を何回も分断されます。そして、

「はあ、はあ、ど、どうだ……！」

「……」

動かなくなりました。

「だ、ダメ男？　ダメ男！　だめおっ！」

「黙れ。不覚にも、息の根を止めてしまった」

「いや、いやだダメ男、×××が、」

「うるさい」

「×××っ！　目を覚ましてください！　×××早く、はやくっ！」

「……」

「うああああああああつ！　×××っ！　いやああああつ！」

女は外に出ました。止んでいた雨が自然の屋根を伝い、集落の外へ逃げていきます。ぽつぽつと逃げ切れなかった分が優しく降っています。ふとして見上げると、ぴしりと額に落ちました。額からその横へ流れ、いつの間にか頬ほほに付いていた数滴の返り血を通ります。それを無視して歩いていくと、ディンが立っていました。女は毒ガスの入ったポッドを手渡しました。

「決着、つけました？」

「……」

ディンは女の頬についた血を拭き取ります。ありがとう、と呟きました。

「拳こぶし……折れていますね」

「別に問題は無い」

「嘘つかないでくださいよ。殴る音がこちらに聞こえるくらいド派手だったのに、何もないわけじゃないじゃないですか。ほら、見せてください」

デインは無理やり女の両手を掴みました。手の甲が真っ赤に腫れあがっています。持っていた女のバッグからアイスを取り出し、手の甲を冷やします。

女は震えていました。

「あの男が真実を語り、そして姐さんが？平和的に終決する。これが私の望みでしたが、ただの理想幻想にすぎないようですねえ」

「……何だか虚しいな」

「結局、姐さんがしたことは、大切な人を奪われた人間を生み出しただけです。かつての姐さんのように……」

「！」

デインはぐつと女を抱き寄せました。

「今度は姐さんに憎しみが向けられることになるんですよ？ かつての姐さんのように……」

「私はもう、この世に未練はない……」

「そうして、姐さんを殺したやつを、今度は私が殺す。もう、憎しみの連鎖が完成してしまっただんです」

「……」

女はすうつ、と涙を一粒流しました。

おわり：みどりのだいぢ

曇り空からわずかに見える青空から太陽が優しく輝きます。その光を貰おうと、木々が空を覆い尽くそうとしています。わずかながらにできた隙間から日差しが溢れ、地上に降り注ぎます。緑の絨毯じゅうたんがびっしりと敷いてありました。

そんな森の中から、突如、銃声が鳴り響きます。木に留まっていた鳥たちが驚いた様子で喚わめき、一斉に飛び立ちます。

森の中で、ちょうど太陽の光を直接受けている場所がありました。そこには半円の薄い石が二つ並んでいます。それぞれに花束が置いてあります。石の傍らには木が一本生えています。それに背を預けて座っている女がいます。無地のロングTシャツに青いジーンズを着合わせていて、両腕に黄緑色の腕時計をしていました。手には拳銃が握られていて、周辺には薬莢が散乱しています。銃口から白煙が立ち上り、間もなく消えました。

しかし、お腹が動いていて、瞬きもしていません。生気が薄いです。

女はぐったりとしていますが、辛からうじて呼吸はしていました。ただ俯いているだけのようです。

きつ、と目つきが変わり、自分の額に銃口を押し付けます。ふるふると力を込めすぎて震えています。しかし、

「……………」

急に力が抜けて、銃を持つ手が下がりました。そのまま手放してしまいました。銃口は、

「姐あねさん、またですか……………」

デインに向けられていました。女から拳銃を取り上げ、自分の腰のホルスターに収納します。

「あれからもう、何ヶ月か経ちますけど……………その……………」

女は左肩を摩さすりました。

「眠れない……。まるで、私に何かがり取り憑ついているかのよう……。」「確かにクマが酷いですね。私が添い寝してあげますから、ゆっくり寝てください」

「フ……」

「どうしました?」

「あなたがいないと安心して眠れないとは……。滑稽こっけいだな」

女はデインの腕にしがみ着くと、すぐに寝入りました。頬ほほを突っつかれても起きません。泥のように眠っています。

「!」

木陰こかげから、男がやってきました。

「誰だ?」

だぼだぼの黒いセーターを着ていて、黒のパンツと黒いスニーカーを履いています。ファアの付いたフードを深く被っていました。荷物は持っていません。ただし、

「……」

ナイフです。男の右手には鋭く尖ったナイフが握られています。刃渡りは拳三つほどです。身体の一部であるかのように、手に馴染んでいるように見えます。それをチラつかせながら、じりじりとじり寄ってきます。一歩ずつ、まるで獲物を追い込むように。

一歩近づく度に、握り締める力が強くなっているようです。

デインは気取られないように、慎重に手を腰に持っていきます。

その手は震え、嫌な手汗がじつとりと滲にじんでいます。

その瞬間、

「!」

男が猛烈な勢いで迫ってきました。

デインはホルスターから拳銃を抜き、

「っ!」

男がデインの喉元にナイフを突きつけると同時に、
「惜しかったですね」

「っ！」

デインは再び銃に、

「！」

しかし、音とともにホルスターに何か当たり、遠くに飛ばされてしまいました。

「く！」

その発生源は、

「動くなよ？」

ダメ男の腹でした。小さく穴が空いています。

「その左腕はダミーってわけですか」

「まあな」

右手で左腕を引き抜きました。手の部分は人の手にそっくりですが、セーターに隠れていたこの腕からは簡素な造りでした。そして、胸元から左手を出して、下しながらセーターのファスナーを開きました。

「さすがに一ヶ月だと、ろくに回復しないな。撃つだけで精一杯だ」

「あなたが銃を使うなんて、信じられませんね」

「……」

ダメ男は再びナイフを突き立てました。そして、銃口は女へ向けられます。

「オレには恨みはない。むしろ、今でも殺されて当然だと思ってる。でも……、」

服の中から、水色の物体を取り出しました。

「こいつが駄目なんだ」

「ダメ男、早くその女を殺してくださいっ！」

「フー？です。」

「あなた……」

「本当に死にかけたオレを見て、今でも荒れてるんだ。いくらオレが諭しても、聞く耳すら立ててくれない」

「ダメ男、早く八つ裂きにしてください！ その男を殺して、女を

×××して××して、」

「フー、落ち着け。レディの言葉じゃないぞ」

ダメ男はそう宥^{なだ}めて、フーとナイフと拳銃を？きちんと？しまいました。

「だから、話を聞いて欲しい。デインだけでもさ」

「……わかりました」

ダメ男は二人の前で座りました。

「その前に、デインに一つ聞きたいことがある」

「何でしょう？」

「お前があゝの二人を、殺したんじゃないか？」

「……！」

デインは少し間を空けて、

「当てずっぽうもいいとこですよ、あははは」

笑い転^こけました。

「思い出したよ」

「え？」

さあつ、と青ざめていくのが容易に分かりました。

「お前は二人を殺した後、オレが現れたのを悟^{さと}ってオレに責任を押し付けたんだらう？」

「何を言っているのか分かりませんねえ。第一、証明できないじゃないですか。双子を殺したのが私だと」

「……」

「……？ ……あ」

ダメ男はにたりと口角を上げました。

「オレは？あゝの二人？としか言っていないのに、双子ってことよく分かったな」

「そ、それは、その姐さんから話を聞いたんですよっ」

「だが、この女は写真も撮ってなかったのに、よくオレが？二人？を殺したって分かったな。この女とオレがどんな関係かを？話としてしか？知らないはずなのに。つまり、オレの？顔？を知っていないな

きや、ほぼ不可能な会話なんだよ」

「で、でも私は、」

「お前がオレの情報収集の役割だってんだろ？ それだってオレの顔？を知らなきゃ、尾行なんかできるわけがない。オレは常にこの女の顔を覚えてて、避けていたんだからな」

「……それは姐さんがあなたを尾行して、あなたがどんな人物なのかを生で教えてもらったんですよ」

「……ああ、なるほど。そっちの方がしっくりくるな」

ダメ男はわざとらしく、あっさりと自論を捨てました。悔しいというより、したり顔をしていました。

「……まったく、動揺しましたよ。いきなりそう迫られたら恐怖を感じますよ」

「一手足りず、か……。まあ、オレの責任なのは確かだからな。……」

「……なんか話す気がなくなっただからもう行くよ。……彼女にごめんって伝えといてくれ」

「……分かりました。ここ、お大事に」

デインは胸の辺りを指しました。ダメ男は鼻で笑います。

ダメ男は去り際に、なぜか銃をデインに向けながら木陰に消えていきました。その直後のことでした。

生々しい音と悲鳴が森中をざわつかせたのは。

「きもちい……」

「だ、ダメ男、その、」

「気にすんなよ……」

二人はまだ森の中にいました。ハンモックを木に巻きつけて、ぶらぶら揺れています。ダメ男の荷物はそのハンモックの脇にきちんと置かれていました。

すっかり晴れ間が広がったのか、ダメ男の視線の先には、きらきらと緑の空が輝いています。風で囁いては、木漏れ日が優しく身体

に降り注ぎます。心地好くて、

「眠い」

眠気を誘います。

「どちらなのですか？」

「どっちだつていいだろ。さつきからしつこいぞ」

「あんな話を直に聞いて、気にならないわけがありません」

「……」

ダメ男はごろりと寝返りしました。

「逃げていたら、真実から逃げていてはその、また同じような事が起こるのではと心配です。お願いですから、」

「……っ」

急に、ダメ男の左肩が疼きました。筋肉の線維が千切れたような痛みが走ります。

フーはそれ以上、言及できませんでした。それから、ダメ男の悲痛的な表情をじつと見守りました。痛みによるものなのか、傷みによるものなのか、汗が薄い膜のように顔を覆います。

ふうつと軽く息を漏らしました。

「もう、医療大国周辺で暮らすしかないかもな」

「そうですね。ダメ男は無理をしてみました。もつと休息を取って、万全になったら旅を再開するようにしませんか？」

「……そうじゃない」

ダメ男は服の中からフーを取り出して、それを胸の上に乗せました。フーの透き通る声に、暗さが混じります。

「どういうことですか？」

「人の生命を奪ったら、それ相応の代価を支払わなきゃならない。もう、オレの生命一個なんかじゃ、足りないな」

「つまり、復讐を企む輩がもつと現れるということですか？」

「いくら命を助けたつて……そんなの……ただの自己満足……」

「それでも救われた方々はダメ男に感謝をしているはずですよ。どうか、気を落とさな、」

「オレはただ、罪悪感に苛まれないようにしてきただけ……」

「ダメ男、しっかりしてください。会話になって、」

「人助けといっても所詮は人殺しだ。色んな人を殺して、また殺して、殺して……殺して、殺しまくって……！ 手に残るんだよ。人間を突き刺した時の、あの柔らかい感触が……痛みで収縮する筋肉や内蔵が、くつきりと、手で直接触つてるような感覚に襲われるんだ……。後で急に思い起こされる度に気持ち悪くなって、吐きたくなって、胸が握り潰されるように痛くて……。オレが人でなくなる感じがするんだ……」

「ダメ男、」

「消えないんだよ、落ちないんだよフリー……！ 何度も何度も、何度も何度も何度も！ 手を洗っても、手に付いた血の臭いと生温いのが！ 全身にこびりついてるんじゃないかって……」

フリーは、

「ダメ男っっ！」

「……！」

声を荒げました。

「……」

ダメ男はフリーをハンモックに引っ掛け、背を向けました。身体全体が異常なほどに震えています。その後ろ姿はまるで、？薬？が切れた男のようです。頭を抱え、がたがたと、地面に何かの液体をまき散らして、震えています。

しかし、フリーはさほど驚いていませんでした。いや、虚勢を張っていません。

「ダメ男、休みましょう？」

そこに、

「！ 誰だっ！」

誰もいませんでした。

フリーの緊張の糸は張り詰めてしまっています。それでも、ダメ男を落ち着かせようと声をかけ続けます。

「ダメ男、誰もいません」

「いや、誰がいる！ いるんだろ！ 出て来い！」

ハンモックから飛び降りてナイフを構えましたが、何も起こりませんでした。

「お互いに気がおかしくなっています。確か、山を降りてすぐに、長閑な村がありましたよね？ 一先ずそこで休養を取りませんか？」

「……気が進まないな」

「それでは、またここで野宿をするのですか？」

ダメ男は再びハンモックに寝て、ぶらぶらと揺れました。

「嫌か？」

「当たり前です。不潔ですし、お手入れも満足にしてくれませんか、さらに気持ち悪くなるだけです」

「……悪いな。いつもいつも……」

「気をかけるくらいなら、自分を大切にしてください。むしろ、そういうことを言うと気味が悪いです」

「もうちょっと優しい言葉はかけてくれないのかよ？ スタボロに傷ついたオレを癒して、」

「早く寝てください。永遠に眠ってください」

「……そうした方がどんなに幸せなんだかね……」

「すみません」

ダメ男は服の中から、拳銃を取り出しました。黒く、怪しく存在感を主張するそれはダメ男に、あさつての方向に投げ捨てられました。ところが、

「痛い」

そちらから声が聞こえてきました。ダメ男は見向きもせず、

「ああ悪いな。それ、あんたにあげるよ」

「そうか。なら、手を上げてこちらに来い」

頭に突きつけられました。

「……とか言つて、自分から来てんじゃん」

「私がこうすることも？ ここに来る前のこと？ も、読み通りなんだ

る？」

ダメ男はにやりとして、

「まあな」

笑います。ですが、ダメ男も虚勢を張っていました。じわりと汗ばんできます。

「まだ恨んでるんだろ……？ また好きに殴れよ、撃てよ、……殺せよ。そうでもしない限り、あんたの恨みは消えそうにない……」

「……」

ふつと、ダメ男を解放しました。

「何のためにあなたを生かしたと思っっている……」

「？」

女はすつとダメ男の視界に入ってきました。

「真実、か……」

「……」

ダメ男は身震いしていました。それに気付いて、女が触れようとした時、

「触らないでください」

フーが言い放ちました。

「あなたがダメ男を許さないように、こちらも絶対に許しません」

「……分かってている。話は聞いていた」

「ダメ男は既にあなたと会おう前から傷ついています。それなのに、目の前であんなのを見せつけられたら、気が狂いそうなのですよ」

「殺す気はなかった。尋問だ」

「あれだけダメ男を蹴り、人間の尊厳を崩壊させ、完全治癒できない身体に破壊しておきながら、ただの尋問？ 外道人外の行為に他

ならない！ しれつとしたそのツラを、平気で晒せたものだ！ あ

なたのカラダを達磨たるとまにして××しても、

「フー……やめてくれ」

「で、でも、」

「頼むから……もうやめてくれ」

女は何も言えずに俯き、佇んでいました。ダメ男は、
「少し日が落ちてきた。あんたも今のうちに荷物……いや、オレが
そっちに行こう」

ハンモックを片付け、荷物を入れて、あそこへと歩いてきました。
女はダメ男から離れて付いていきました。

日が暮れて、雲の隙間から夕日が見えています。その雲も夕日の
橙色に染められて、離れていくほどに暗い影が迫っています。森が
静かにしている代わりに、鳥の声やら虫の鳴き声やらが森に音を吹
き込んでいます。

女がいた場所は既に陰りが占めていました。しかし、そこから少
し離れたところは、仄かに灯る光で周囲は照らされています。ちょ
うど地面が露出していて、ダメ男が焚き火を起こしていました。そ
こに鍋やカップが熱を受けています。

「うん……まだみたいだな。温いし。あんたのもあっためる？」

「いや、私は結構だ」

「そう。めっちゃめっちゃ美味しいココアがあっただけど、ざんねん、

「いただく」

「……そうでございますか」

女は膝下をタオルケットで包み、ダメ男がくくり付けたハンモッ
クに座っていました。

「……ほれ、できた。熱いから火傷しないでくれよ」

「ありがとう……」

女はダメ男からカップを受け取ると、ふーふー、と中を冷まして
啜ります。飲んだ後の吐息が熱かったようです。ダメ男はついにて
フーも手渡しました。かなり渋りましたが、？熱湯風呂は嫌だ？と
のことで、仕方なく承諾しました。

「……ディンは、」

ダメ男は夕食の支度をしながら打ち明けます。

「ずっと昔、依頼を受けて組んだパーティの一人だ。本当に仕事だけの仲で、名前すら知らなかったんだ」

「そう、なのか……」

女は何とも言えない表情で、ダメ男を見つめています。

「依頼は遠くの国に荷物を届けることで、あんたの村とは全く関係無い。ただ、通りすがりに立ち寄っただけなんだ。でも、そこでオレの荷物が盗まれた……」

「私です」

フーは女の膝上から小声で女に伝えます。

「その犯人があんたの弟たちだ」

「……」

ダメ男はあちち、と反射的に手を離しました。そして、作業に戻ります。

「あなたの言う双子の弟さんで間違いないと思います」

「そう……。でも……あの村は生き延びるだけで精一杯なくらいに貧しい村で、その………すまない」

反論しかけて、途中でやめました。

「いいんだ。そこら辺はオレも弁わかえてるつもりだし、とっ捕まえて返してもらえば良かったからな」

「ダメ男はあの時、油断していたのです。依頼が簡単でしたし。何よりも盗まれることに慣れていきますから、あまり気にしていなかったのです」

「……ふ」

女は思わず笑いが漏れてしまいました。

「おい、さっきから何言ってるんだよフー。ばつちり聞こえてんぞ」
「第三者の情報も交まじえた方がより明確になるかと思いました」

「それ、ほとんどオレの悪口じゃん」

「ダメ男は女性に対して、ダメダメになりますからね。それに対するフオローでもありません」

「だからオレの情報はいらんだろ別につ。しかもフォローになつてないし」

先を読んだ女は、

「……えつとその、話を……」

申し訳なさそうに遮ります。悪い、とダメ男は小さく謝りました。「い、とダメ男は小さく謝りました。

「それで、オレが取り返しに行こうとしたら、デインが真つ先に追っかけていったんだよ」

ダメ男は皿を二つ用意して、そこに料理を盛り付けていきます。

「ダメ男が依頼品を持っていたので、デイン様が行ったのだと思われます」

「ところが、悲鳴が聞こえてきてな。心配になって、パーティ総出で声のした方へ行つたんだ。んで、その途中にあつた倉庫みたいな所にパーティを待機させてオレが行つた」

「ダメ男は私がいたのを確認して見張らせたんです。ですが、私の存在も知られなくなつたようで、奪還したことを教えませんでした」

「そうしたら……」

「！」

あの砂漠の街での話です。フーを盗まれたダメ男が追い掛けた先で、既に子供が二人死んでいました。体格としてはおそらく、すれ違った子供と同じです。無情にも、額に黒い穴があり、後頭部を赤く浸しています。痙攣しています。

二人はマントを着ていて、ダメ男がそれを取ると、

「こ、これは……！」

二人が融合していました。まるで鏡に映った者同士が両肩から横腹までをくつつけたみたいです。そのせいか、腕がありませんでした。

「? シヤムの双子?、……?」

片方の子供が身につけているズボンに何か入っていました。手に取ると、四角い木箱でした。開けてみると、

「……」

? 手紙? がありました。周りを見た後、しばらくそれを黙読していきます。そして、徐おもむろにナイフを取り出しました。

「ここで居合わせたのも何かの縁だ……。オレが手向たむけてやる」

ダメ男は二人の接合部をナイフで切り離しました。とろとろと黄色い部分が露あらわになり、新たに血が地面に流れ落ちていきます。

「!」

「あ、ああ……」

ダメ男が振り返ると、一人の女が驚いています。

「……」

女でした。

ダメ男はゆっくりと立ち上がり、女に目を合わせることなく、擦れ違いました。ダメ男の背後で女が崩れ落ちました。

どうやって作ったのか不明なポテトサラダを二人で食べていました。できたてで、ほこほこ湯気が立ち上っています。

「私はそこしか見てなかった……。だから、あなたが弟たちを手にかけたのだと思うしかなかった」

「その時、あなたに恨まれるのを覚悟したよ。弁明しようがないからな。だけど、オレはあの時拳銃を持ち合わせていなかった。荷物検査でもすれば、オレの無実は晴らせたけど、依頼品が盗まれるのが怖かったんだ。……言い訳をすればこんな感じだ」

「……デインは、奴やつはどうしたんだ?」

ダメ男は水をこくりと飲みました。

「それ以来見てない。殺されてどこかに処分されたか、ヤツ自身が盗まれた? か……って思い込んでた」

「……ディンは少ししてから、弟を殺した犯人を知っていると話を私に持ちかけてきた。そこからディンの情報を頼りに、私はあなたを追い続けた」

「……」
ダメ男はポテトサラダをおかわりしに、席を外しました。その隙にフーが語ります。

「ダメ男は実は普段から拳銃を持っていました」
「え？」

女はびくりと驚きました。ダメ男の言ったことに反することをフーが言ったのです。

「ですが、その一件を終えた後、銃なる物全てを解体処分したのです。個人的な解釈ですが、かなりトラウマになったのだと思います。その光景にも、あなたにも」

「……」
「悪夢に魘うづなされることも以前より多くなりましたね。そのことは本人は自覚していませんが、傍はたから見れば一目瞭然です」

ダメ男がむっとして戻ってきました。

「また変なこと言ってたろう？」

「ダメ男は全てが変ですからね」

「サラダにして食ってやるのか？」

「食べれるものならどうぞお好きに。心身ともに障害が出るのは明白です」

「……うぐぐ……」

ダメ男はやけ食いしました。そしてお約束の通り、喉を詰まらせて急いで水を飲みました。

「……ふう」

「……ありがとう。どうやら私は今まで勘違いをしていたようだ」
「本当に信じるのか？ 嘘ついてるかもしれないぞ？」

「……あなたが嘘をつくような人間に見えない」

「正解です。ダメ男は馬鹿正直で単純馬鹿です」

「お褒めの言葉として頂戴しとくよ、フー。覚悟しとけよ」
二人はとにかく作りすぎたポテトサラダを食べるはめになりました。

食器洗いをして片付けてから、眠る支度を始めました。

「あなたはテントで寝るよ。クマひどいからな」

「……あなたは？」

「せつかくの景色だ。空を眺めながら寝るよ」

「……でも、テントなんてどこに？」

ダメ男はリュックから黒い包みを取り出しました。中は黒い傘でした。それを手馴れた手付きで組み立てていくと、あっという間に、「バズーカの完成です」

「違うわ。テントだ」

「こんなものがあるんだな……」

「ばず、テントの完成です。」

「中はわりと広いから眠れると思う」

「……ありがと、う……」

「んじゃお休み」

ダメ男はそそくさとハンモックに寝っ転がり、程なく眠りにつきました。

「は、早い……」

「ダメ男はいつでもどこでも眠れますからね。でも、景色は見なくていいのでしょうかね」

「確かに」

女もフーと一緒に中に入りました。

「あなたは、」

フーが凜として尋ねます。

「彼をどうしたのですか？」

「……」

女は用意されていた毛布くもに包まれます。

「黙る気ですか？」

「分からない」

「そうですか。心の拠より所よにしていたのに、殺しましたか」

「……」

女は毛布を頭まで被かぶります。

「一人ではるくに眠れないのでしょうか？」

「……！」

もぞもぞと動きます。

「ですが、ダメ男には近づかせません。信頼度はゼロですからね」

「……」

「ですから、変なことをさせないために、ずっと監視していますから、さっさと寝てください」

女はがばつと飛び起きてフーを見ました。フーはテントの出入口にいます。

「勘違いしないでください。あくまでも？あなたの監視？ですから女はクスリと笑いました。

「俗に言う？つんでれ？だな、あなたは」

「私は違いますが、あなたには言われたくありません」

「では、私が彼を奪っても文句はないな？」

「な、なんでダメ男が出てくるんですか？」

「あなたの発言は全て、彼が大切だって言っているのと同じだ。何かとこじ付けてるが、本質は同じだろう？」

「ち、違います。ダメ男はただのダメ人間で、」

「動揺すると、口調がすぐ崩れるのがあなたの癖のようだな……。あはははっ」

「とつとと寝てくださいっ」

女は満足気に眠りにつきました。

そろそろ太陽が地平線から顔を覗かせる頃でした。真つ暗だった空に青みがかってきて、世界を照らそうとしています。風が吹くことなく、鳥や虫たちも眠っているのか、まったくの無音です。テントから女が出てきました。ぐっと身体を伸ばして、軽く動かしています。その後、すたすたと歩いて行きました。その先には、ハンモックがありました。

まだ薄暗く、ダメ男がそこにいるかははっきりと見えませんが、女はそこで立ち止まります。

「……………」

じつと見ていました。ダメ男はまだ眠っているようです。しかし、

「……………」

ダメ男は唸うなっていました。

少し経たつと、太陽が見えてきました。その瞬間、世界が輝いて、眼まなこに景色が映されます。

「！」

はっきりと見える状況になって、女は愕然がくぜんとしました。

「おはよ……………」

「あ、あなたっ……………」

ダメ男の目は兎うさぎの目のように真つ赤に充血し、目の周りはパンダのように真つ黒な？クマ？ができていました。

全身が汗だくになっていました。

「うっし、朝食にするか」

「あなた、寝ていないのか？」

「ん？ ばっちり寝たに決まってるじゃん」

「……………」

ダメ男はハンモックから降りて、朝食の支度に取り掛かりました。なんだか足取りが怪しく、頭がフラフラしているようにも見えます。

女は一旦テントに戻り、身支度を済ませることにしました。

「ダメ男はどうでした？」

「フーが尋ねます。」

「……不眠症なのか？ 本当に……」

「それもありますけど、今回は別の理由もあるようです」

「？」

女がそれを問い質しても、フーは答えようとしませんでした。そこにダ、

「おい、朝食できた、……」

メ男が……、

「……」

思い切り殴り飛ばされました。隣でフーが、流石は変態、と冷徹なる一言を放ちました。

二人は朝食を摂ることにしました。昨日のポテトサラダとロールパンで、ジャムも用意してありました。しかし、ダメ男は血の味しかなかったそうです。ちなみに、顔の左半分が大きく歪んでいたようで、フーは笑いが止まりませんでした。

朝食の片付けと荷物の片付けを早々と終わらせ、一休みしました。「そういえば花、ありがとう」

「うん？」

「私がここに来る前から、花が供えられていた。ここの在処を知っているのは私とディン以外にあなただけだ」

「……」

「あなたも私と同じように苦しんでいたんだな」

「……」

ダメ男は左肩をずっと摩っっています。

「……大丈夫か？」

「……」

目を合わせません。ダメ男は少し震えていました。そこに、女が触れようとします。そして、触れました。

「私はな、……自害しようとしたんだ。あの後から」

「！」

女の手ダメ男の震えが伝わります。ゆっくりと撫でるように指

先で磨ります。そして、掌てのひらで包み込むように撫でていきました。
「でもダメだった。怖くて引き金を引けなかった。他人には躊躇ためらう
ことなく引くというのに」

「……オレはフーがいなかったら、とっくにあの世にいると思う」
「昨日の相棒とのあの話は……悪かったが盗み聞きさせてもらっ
たよ」

「……まじか。恥ずかしいなっおいっ」
「おちよくってるのか？」

女はぐりぐりと左の顔面に指を押し付けてきました。顔の痛みも
引かないようで、呆気なくダメ男は降参です。

ダメ男の左肩をにぎにぎと柔らかく揉もみほぐします。

「もう殺さない方がいい。 Dein から話は聞いていたが、あなたは
自分を襲った人間を躊躇ためらせず殺している。それはそれで正しいけど、
これ以上は危険だ。精神崩壊しかねない」

「……誰かに言われた気がする」
「今ならまだ間に合う」

「？」

女の手は左肩から離れ、きゅつと自分の服を掴みました。

「人を殺しても負い目を感じないのは本当の怪物だ。その分、あな
たは大丈夫」

「……あんたは？」

「私はもう手遅れだ。……怒り以外の感情が消え失せ、冷淡で醜みにくい。
殺戮兵器さつりくのようにな……」

「……それは、オレのせいだよな？」

「無論。でも、もういい。これからは気にしなくていいのだから……」

……
女は皮肉って鼻で笑いました。ダメ男は何も追及しませんでし
た。できませんでした。

その代わりに、

「あ、ちよっと、」

ダメ男はいきなり女の手を掴みました。

「オレが言う資格なんてないけど……」
ぎゅっと両手で女の手を覆いました。

「感情が冷めきったかもしれないけど、あんたの手はすごいあつたかい」

「……………！」

「オレたちは……………生きてる。どんなに病んでても生きてる」

「……………だから、なんだ？」

「……………冷えても生きた心地がしなくても、また元気になれるってことだ」

ダメ男は照れくさそうに俯きました。

「……………あなたが、私を元気にしてくれるというのか？」

「ん、まあそうなるのかな？」

「それならば、」

女はダメ男を引き寄せました。

「え？」

「……………」

そして、抱きました。

みるみるダメ男の顔が赤くなっていきます。

「な、なにしてのっ？」

「私を……………抱いてくれ……………」

「は、はいついいいいい？」

「いやか？」

女は眉を潜めて、ダメ男の顔を触ってきました。熱くなっています。

「このシーンはカツ、とじゃなくて、大人の世界はNGなんだよ！
健全な旅をしたいのっ！ だから、」

「責任、どうしてくれる？」

「い……………！ それは、その……………」

女はくすくすと笑みを零しています。

ダメ男がこの女を？異性？と初めて認識した瞬間、顔だけではなく身体全体が火照り始めます。どきどきと心臓がペースを速め、頭が痺れて朦朧としていきます。おかしいっおかしい……、ダメ男がそう呟くと、女はただただ頷きます。

女はダメ男の顔を自分の方へ引き寄せていきます。ダメ男の眼は女の唇にしか向いていません。熱い吐息が触れ、おでこがくっ付きました。それだけで心臓が破裂しそうなくらいに興奮して、鼓動の音で何も聞こえなくなります。

そして、口と口の、その間の距離が数ミリ……、

「！」

「う、ごめん……！」

というところで、ダメ男は引き剥がしました。

「オレにはできないし……責任はその、ごめん」

「……」

「ダメ男」

「なんだよ」

「酷ではありませんか？」

「何が？」

「あなたに委ねきっていたというのに、それを拒んだことです」「なんでぬれ、じゃなくて、そういうのはナシにしたいんだよ」

「一度だけなら許しますよ」

「お前はオレの彼女か。しかもすごい上から目線だし」

「ダメ男はこれだから？ヘタレ？なのですよ」

「もうやめよ、なっ！ はいこの話終わり！」

「分かりました」

「うん」

「……？イケメン食わぬは蜜の味？というシメでいいですか？」

「やめてください。表現がイヤラシイので」

「ナルシストもいいところですよ。木に三十回頭突きして死んでくだ
さい」

「オレは猪いのこか。フーを三十回木に向かつて投げてやるうか？」

「？ダメ男暴走？ですね。傍はたから見えていたら、気違まちがいにしか見えま
せんね」

「……何言ってるか分かんないし、？気違い？ってのは良くない用
語なんだぞ？ 軽率けいそつに使うなよ」

「そうでしたか。では、ただの馬鹿ばかってことにしますね」

「それはそれで悲しいけどな……」

「ところでダメ男」

「なに？」

「あれは何だったのですか？」

「あれって？」

「木箱ですよ。別れ際に渡したではないですか」

「なんだったつけ？ 忘れた」

「どうやら白痴ばかのようですね」

「それも差別用語！ 本当に傷つくから使うなよ？」

「了解です」

「……おねえちゃんへ」

ぼくらとおねえちゃんはほんとうの？きょうだい？じゃないのに、
やさしくしてくれてありがとう。おとうさんとおかあさんにすてら
れてないたときに、おねえちゃんがたすけてくれたね。ぼくらの
からだのことをへんなふうにおもわないで、いっぱいあそんでくれ
たし、ごはんもつくってくれた。そんなぼくらはおねえちゃんにめ
いわくばっかりかけていました。ぼくらのからだのこと、そのせい
でおねえちゃんもいじめられているときいて、かなしくなりました。
だから、めいわくをかけないでいられるほうほうをかんがえました。
ぼくらがいなくなればいいんだね。

だから、いっぱいひとのものとおこらせた。でも、ぼくらのからだをみて？ばけもの？っていたりして、はしっていたりするからだめだった。でも、ぼくらをこころしたひとをおこったりしないでね。おねがいします。

ぼくらをこころしたひとへ

ぼくらのからだをはんぶんこしてください。いつかふたりになつておいかけてこしたかったのでおねがいます。ぼくらはおこったりかなしんだりしません。それとおはかほかくにあるもりに……」

「男ってなんでこころも一人で抱え込んだのかなあ……？でも……私、間違えてみたい。待つてね。私も……そっちに……？」

ふと箱が目につきました。箱の厚さに比べ、底が浅いように見えます。女は箱を逆様に持つて、とんとんと叩きました。すると、

「！」

ばかりと底が抜け、ぼとりと何かが落ちました。それは小型ナイフでした。

「これは……×××の……」

それを手に取って調べてみると、刃に文字が彫ってありました。ミミズが走ったような字です。

「……？生きる、ナナ？……」

それを少し眺めていました。そして、立ち上がります。

「偉そうに……人のこと言える立場じゃないだろう……」
くすりと笑いました。

「突き返さないとな……」

？ナナ？という名の女は森の中へと消えていきました。

おまけ

?????

皆様、なんだかんだで今回もありがとうございました。なんとか無事に終わりました。今回は頑張りましたね……。

さて、今回のゲストは……！ ダメ男さんとフーさんです！

ダメ男：

久しぶりだな。

フー：

またまた、招かれました。

インタビュアー：

いや〜お二方、第三回でまさかの二回目のゲスト……申し訳ないです。(^^^^)

ダ：

別にいいよ。何かいろいろ大変そうだし。

イ：

ありがとうございます〜！

フ：

また、あなたの顔を見ることになるとは、気持ち悪すぎて胃液が逆流してきそうです。

イ：

出ました、伝家の宝刀！ というか、私に何か恨みでもあるのでし

ようか……？ () () () () ()
しかも、またご？本体？ですし。

フ：
はい。

ダ：
仕方ないだろ。？それ？がフーなんだから。

イ：
う〜ん……。あの、どうにかなりませんかね？

ダ：
どうにもならないだろう。

フ：
私は構わないのですが、ダメ男がこう言うので、無理ですね。

イ：
そうですね……。

では、いろいろ伺いたいなと思います！

フ：
お答えできる範囲であれば大丈夫です。

ダ：
(フーは基本、秘密主義だからな……)
でも、聞くことって何かあるのか？

イ：

もちろん！ やはり、お二方の関係ですよ！

ダ：

……なんでそういうの好きなんだかな……。

フ：

このようなお仕事をされる方々はそういうものですよ。

イ：

どんな感じですか？

ダ：

どんな感じって……普通だけど……。

イ：

普通ってことはないでしょう？ （ ） （フフフ…

フ：

二人して顔が気持ち悪いですね。

ダ：

なぜにオレまで？

イ：

私はもう見切っていますよフリーさん。照れ隠しですよね？
そうやって煙に捲こうとしちゃダメですよ？

フ：

成長しましたね。

イ：
あざーっす（^^）

フ：
恋人です、

ダ：
えっ！

イ：
オホホ！（-^O^-）

フ：
とでも言えば納得するのですか？

イ：
って違うんですか。びっくりしましたよ。

ダ：
オレも。オレらって一線を超えた仲だったか、変なことしてなかったか本気で考えまくったよ。

フ：
ダメ男の裸は見慣れていますけどね。

イ：
え？

ダ：
……。

フ：

どうしました？ 何か変なことを言いましたかね？

ダ：

どストライクだバカやる……！

イ：

やっぱりあんなことやこんなry)

あばばば！

フ：

大丈夫ですよ。あなたの頭の中のこととは絶対にありませんから。

イ：

たとえば何ですか？

フ：

え？

ダ：

おいおい、そんなこと言え、

イ：

たとえば、何かあると思いますか？

フ：

そ、それは、その、え〜っとな〜その、

イ：

(生のフリーさんがいたら、すごく可愛いんだろうな……)
にへへ…… (# ^ . ^ #)

ダ:

あんだ、それ以上フリーをイジめるなよ？
この場でできるわけないだろう、そんな質問……。

イ:

では、ダメ男さんに伺いましょうか？

ダ:

お、オレ？ ……えっと……なんていうか……。

イ:

(ダメ男さん、顔真つ赤……！ あまり表情に出さない人だから、
すごく新鮮……っていうかかわいい……)
えへへっ。(* 、 *)

フ:

何をにたにたしているのですか？ この下ネタ解禁変態人間が。

イ:

正当な質問ですよ！ (; ;)
答えられなければ無理にしないでいいんですし。

フ:

そう言って、こちらから、その、如何^いわしい発言を取ろうとしたの
でしょう？

イ:

そこは仕事ですから！　（　・　・　・　）　キリッ

ダ：
じゃあ、無理ってことで、次にいかないか？

イ：
わかりました！

次はですね……やはりこれでしょう。？　フーさん××××疑惑？！
徹底解剖ですね！

ダ：
言わなきゃダメか？

イ：
ダメです。

フ：
どうしてもですか？

イ：
どうしてもです。

フ：
全ての謎を解き明かし、**真実を曝け出す**^{ヒラキ}ことが絶対的に正しいこと
とは一概に言えないのですよ？

イ：
どういふことですか？

フ：

たとえば、ダメ男はこんなへらへらして真面目で優しい一面があります。人を殺めたり、拷問を行ったりするのは。

ダ：
フーやめる。……思い出したくない。

フ：
ほら、本人が嫌がっています。あなたはそれでも聞き出そうと思えます？

イ：
そ、それは……。

フ：
そういうことなのです。デリケートな部分を安易に聞き出そうとすれば、本人は嫌がります。相手に気持ちよく話してもらうには、質問の取捨選択が必要なのです。軽々しく質問しないでください。

ダ：
……フー……。

イ：
す、すみませんでした……。 (-_-)

フ：
と言いつつも、私は話してもいいですけど、ダメ男の許可を得てください。

イ：
分かりました。

ダメ男さん、どうかお願いします。これをご覧になっている方々も、気になっっているんです。私がどうこう言うより、ダメ男さんの一言の方が信頼できるんです。……どうか、お願いします……。

m (| |) m

ダ：

……これ以上隠しても仕方ないか……。

フ：

そうですね。

イ：

おおおお！ で、では！

ダ：

仕方ないな。出血大サービスだ。

イ：

さすがは素直じゃないお人好し！

フ：

(ダメ男は秘密主義ですからね。すごく意外です)

ダメ男、お願いします。

ダ：

ああ。フーはな……、は、……あで、……なん、……

(ただいま、電波の都合上、画面と音声が激しく乱れています。誠に申し訳ありませんが、今しばらくお待ちください)

ダ：

……ってことなんだ。

イ：

はは。そうだったんですね。皆さんも納得しまし、……え？
今の会話が全部カットされてる……？

フ：

おや、事故ですか？

イ：

電波が乱れたようですが……え？ 次の話題にいけ？ ……尺がな
い……？

ダ：

何が起こった？

イ：

……どうやら、事故のようです。なぜか、今のダメ男さんの発言が
キレイに映らなかったようです。

ダ：

もう一回言おうか？

イ：

それが、ディレクターさんから、次に行けと……。

フ：

誰かが良からぬことを仕出かしたようですね。ならば仕方ありません。ちよつと黙りますので、お二人でお話をしていてください。

イ：
わかりました……。

ダ：
おま、まさか、

フ：
失礼します。ぷつりっ

イ：
……不思議な事故がありました、気を取り直して次の話題にいきましよう！

ダ：
（いいのか？ あいつ……）
そうだな。

イ：
ダメ男さんはフーさんのどこがいいですか？

ダ：
……フーの人柄（？）ってことか？

イ：
それも含めてです（^^^^）

ダ：

うーん……なんだかんだで手伝ってくれるところか？

イ：

ああ……？フーデレ？ですね？

ダ：

なんだそれ？

イ：

？フー？さんの？ツンデレ？で？フーデレ？です。とあるところでは大流行ですよ？

ダ：

どこも流行ってないから。しかも？ツンデレ？ってなんだよ？

イ：

（二人して知らないんだ……。似た者同士、いや、似た者夫婦……？）

普段はツンツンしてるんですけど、好きな人の前ではデレデレする人の性格ですよ。

ダ：

あいつがデレデレするところなんかないな。しかもその説明なら、ツンツンじゃなくてグサグサだけだな。

イ：

それは言えていますね。ダメ男さんもなかなかツライんですね（；< |> ;）

ダ：

まあ慣れたしな。

イ：

(まさか、ダメ男さんってドM……?)

ダメ男さんってドMなんですか？

ダ：

え？

イ：

……あ、し、失礼しましたあああつ！　いまのはナシで、

ダ：

そうかもな。

イ：

ええええええつ！　(;) (;) (;)

ダ：

だって徒歩で旅してるし、武器の切れ味は自分の腕で確かめるし、あまり怪我させるの好きじゃないし。

イ：

(じ、じゃあフーさんとの……あわわわわ……)

そ、そうなんですかあゝ。(;) (;)

ダ：

……なんかカミングアウトしちゃった？

イ：

はい。かなり。

ダ：

……。

イ：

このままだと、ダメ男さんは変態ってことになっちゃいますね。

ダ：

オレ、そういうキャラじゃないんだけど……。ネクラだし、ぶっきらぼうだしな。

イ：

……今思っただんですが、フーさんはダメ男さんのどこに惹かれたのでしょうかね？

ダ：

さあな。本人に聞けばいいじゃん。

イ：

……フーさんが語ってくれると思いますか……？

ダ：

あいつ、本気で頼めばやってくれるよ？ ノリいいから。

イ：

ホントですか？

ダ：

あいつの悪ノリを止めるのもオレの役割だからな。

イ：

フーさんも同じ役割だと思えますけど……。

ダ：

……そうだな（微笑）

イ：

（ダメ男さんの微笑みカツコヨス……）

（*、*）

ダ：

そろそろ終わりにするか？

イ：

あ、そうですね……。本日はすみませんでした。せっかくカミングアウトしてくれたのに……。

ダ：

オレもあまり話せなかったしな。そこら辺は悪かった。

イ：

それでは、ほんじつは、

フ：

ちょっと待ってください！

イ：

え？

ダ：
あ。

フ：
何を勝手に終わらせようとしてるのですか？

イ：
……あの、どちら様ですか？ というより、勝手にこちらに入っては、

ダ：
これ、フーだよ。

イ：
……。(・・・)

フ：
な、なんですか？ じろじろ見ないでください。f . *

イ：
……めっちゃめっちゃかわいいじゃないですか！ ああ、何と言っびしよ、

フ：
それ以上説明したら怒ります。とは言っても、このような形で登場してしまったら、ネタばらしでしかありませんけどね。

ダ：
とりあえずは信用できるから安心しろよ。

イ：
はい。絶対に秘密にします！

フ：
ですよ。もう、ダメ男のせいなんですからね。

ダ：
わかったからここに座れ。立ってるの疲れるだろう？

イ：
ディレクターさん、延長でお願いします。……はい。

ダ：
大丈夫なのか、時間？

イ：
ディレクターさんはフーさんの大ファンなんですよ。？ご本人？がこうしていらしてくださったのに、終了なんてできませんよ！

フ：
そ、そうですか……。それにしても、ダメ男、ヒザ硬いです。お尻がいたい……。

ダ：
ヒザに座るからだろう？ もっと奥まで……。そうそう、太ももに座る感じで……。

イ：
（フーさん、まるでこども……）
あの、フーさんって年齢はいくつなんですか？

フ：

…… / / / (# / \ #)

イ：

(あれ？ ダメ男さんのセーターに隠れちゃった……)

あの、フーさん？

ダ：

ああ。こいつ、こづいづの苦手なんだよ。普段は？ x x x x ? 越しだから普通に喋れるんだけど。

イ：

(これは確かに変な質問は無理だなあ……)

そういえば、言ってみましたね。

ダ：

オレとなら話はできるから、フーに質問するときはおれに言えばいいよ。

イ：

(言葉が通じるのに通訳みたいなことをするなんて、ちょっと変……)

分かりましたあ。それでは、フーさんはダメ男さんのどこに惹かれたんですか？

ダ：

ごじょしごじょし……。

フ：

(え？ それ、答えなきゃいけないの……？) ヒソヒソ

ダ：

(できればだな) ヒソヒソ

フ：

ごにょごにょごにょごにょごにょ……。

イ：

(なんて答えるんだろ?)

(^・^)

ダ：

……それは、フーの口から言いな。オレが言うのは恥ずかしいから。

フ：

やっぱりそうなるじゃないですか……。

イ：

そうですね。やはり、できればフーさんから言っていたいただきたいで

す！ (- ^ ^ O ^ -)

フ：

わ、わかりました……。 (# . #)

イ：

(か、かわいすぎ……！)

(# ^ . ^ #)

フ：

特にないです。

イ：

……へ？

フ：

ダメ男なんて、バカでアホでドジで間抜けで性格破綻者で臆病者で恐ろしいほどの顔面崩壊があるのに、どこに魅力があるというのですか？ おかしすぎてお腹が破裂しそうです。

イ：

(毒舌の時はいつも通りなんだ……)
……まさかの生毒舌、あざーっす！

ダ：

な？ こんな自分で言ったら、惨め^{みじ}すぎて恥ずかしい。

イ：

(？フーデレ？理論では、これは？好きすぎて死にそう？……だね……)
素直に同意できないですよ。複雑すぎて。) — (;)
あと、フーさんは何歳ですか？

フ：

ダメ男より……年上ですっ。

ダ：

そうだな。一・五倍したら、オレより二歳年上だな。(笑)

イ：

(フリーさん、背伸びしすぎカワユス……)
……そう言えば、フリーさんの声って普段と全然違いますけど、変声器か何か使っているんですか？

ダ：

ああ。こいつ、今は子供っぽいしふざけてたけど、実際はオレより年上だからな。

イ：

……え？ ダメ男さんっていくつですか？

ダ：

具体的に言えないから、見た目で判断してくれ。

イ：

独断になりますけど、二十歳前後だとして……フリーさんはもっと上っ？ こんなに幼いのにつ？

ダ：

そうなんだから仕方ない。

？アレ？越して話す時が大人バージョンだな。知らない人と話す時は子供バージョンになる。赤の他人と話す時は、口調がグダグダになるらしい。極度の人見知りで、他人とは話もろくにできないんだ。

イ：

(だって、フリーさんの見た目、十代半ばだよ……？ ダメ男さんに頭なでてもらってるし……。犯罪でしょ……？)なるほど。ダメ男さんの妹さんみたいです。

ダ：

年齢で言えば、姉になるんだけどな。

フ：

ダメ男、そろそろ帰りたいです。

ダ：

どんだけわがままだよ？ 別にいいけど、質問に一個答えられたらにしようか。

フ：

う……それはイヤです。

ダ：

じゃあ続けよう。

フ：

………ごうごう時のダメ男はいじわるです………。(つ………)

ダ：

じゃあ、悪いんだけど、次がラストでいいか？

イ：

(あの論理的で口喧嘩の強いフーさんがいとも簡単に………)
いいですよ。

フ：

か、かんたんなのを望みます。

イ：

分かりました。(*、 *)

ダメ男さんのことは好きですか？

フ：

ええっ！ よりによってそれですか……？

イ：

（ホントは知ってるけど、あえて、ね……）
（フフフ…）

フ：

……。

イ：

（真っ赤っか……）

フ：

……きらいです。

イ：

はい？ よく聞こえませんでしたね〜。 （ ） （フフフ…）

フ：

……だから、その……きらい……。

イ：

（？キライ？を断言しないところも？フーデレ？ですな〜）

ダ：

悪い。本気で拗^すねるから……。

イ：

（ダメ男さんの天使のようなフォロー……）
分かりました。それではこちらへんでお開きにしましょうか。

ダ：

悪いんだけど、先に戻ってていいか？

イ：

え？ シメはどうしますか？

ダ：

（こいつ、久しぶりに他人と直接話したから、まじで怖くて泣きそうなんだよ）ヒソヒソ

イ：

（分かりました。落ち着いたら教えてください）ヒソヒソ

フ：

う……う……。

……

イ：

ただいま、ダメ男さんの休憩室の扉の前にいます。え、何を話しているのでしょうか……？ やっぱリニャンゴロですかね……？
いいなあ。……え？ テープが切れかけてる？ うん……どうやらお時間のようですね。……ん？ 今、ディレクターさんから紙をいただきました。ダメ男さんからのメッセージだそうです。事前

に渡してくれたようですね。読み上げます。

「いつもご覧になっていただき、ありがとうございます。この第三回には特別な思いを持っていました。それは、『フーと散歩』の節目だということです。つまり、ある意味での最終回です」

……えっえ？ す、すみません、続きを……。

「とは言っても、まだ旅は続けます。まだまだ面白そうなお話があるんですよ。それがどんなに醜く残酷で悍ましいか、あるいは逆なものは分かりません。でも、そんな世界が存在する限り、ありのままにやっつけていこうと思います。そういうところがあるから、綺麗で美しいところが映えるのだから……。みなさんもこれからもお楽しみください。

ダメ男こと×××・×××より」

……なるほど。では、私はまだ活躍できるということですね！ これからもいろんな方をゲストとしてお迎えするので、お楽しみください！

その前に、何してるか気になりますよね？ よし、とつげきいいい！

ガチャッ！

イ：

お二人とも！ そろそろシメにはいり、……ま……す、か？

ダ：

……。

フ：

……。

イ：

あの、なにしてるんですか？　ここ休憩室なんですけど？

ダ：

……そ、その……みみかき……してやっ……。(# | ……#)

フ：

…… / / / (# | \ #)

イ：

生？フーデレ？あざーっすっ！

(# ^ . ^ #)

おまけ（後書き）

おかえりなさい。……疲れたでしょ？ こっちに座ってて。今飲み物持ってきてあげる。……え？ オレンジジュースでいいの？ 甘党なんだね……っと。はい、どうぞ。おいし？ ……そう。ん？

なんでこんなに気を利かせてるかって？ 決まってるじゃん。どんなお話だったか、感想はどうなのか聞きたいからだよ。……言えない？ 意外と恥ずかしがり屋さんなのかな？ あははは……え？

あなたは誰かって？ うふふ、知ってるくせに。私は？あ・と・が・き？だよ？ ……？まえがき？のお姉ちゃんだよ。……驚いた？ って言っても、私が妹でも字数が違っただけだね。？まえがき？は妹なんだけどね。まあ、それはあくまでも？ここだけの話？ 今回の物語は憂鬱な内容だったんじゃないかな？ それは？まえがき？と？あとがき？の私たち姉妹が？誰かさん？の代弁をしてあげてることに繋がってるね。今、？どこかの国？がすごい大変なことになって、どうにもならなくなってる。？誰かさん？はちょっと前に酷いことになって、一人ぼっちで悩んで自分に嘘ついて、自暴自棄になってたの。そこに、追い打ちをかけるようにいるんなことが起こって……。もう、将来を全てを投げ捨てる寸前だったみたい。

……きつとそれが反映してるかもしれないね。

でも、そんな？誰かさん？を支えてくれた人がたくさんいて、もう一度歩き出したみたい。本当に感謝の気持ちでいっぱい、感謝しきれなくて、情けなくて、鼻水たらして泣き叫んだんだ。なんとなく……分かるよね？ どこのお話のことなのか。

？誰かさん？は照れ屋さんみたい。だから私たちが代弁してるんだけどね。こんなお話を見たり聴いたりしてくれてありがとう、って言ってたよ？ もう大丈夫だって。それと、このお話を広めてくれた場所や機会にも感謝してるって。これ、私たちも言った方がいいよね。ありがとうございます！

そして、このお話のことだけど、？誰かさん？が死ぬまで、お年寄りになっても、できるだけ続けるみたい。ちよつと紛らわしかったから念のために……。

最後に、今まで読んでくれた人たちもありがとうだって。ありがとうございます。ひよんなことで始めたこのお話が、ここまで続くとは思わなくて、皆さんのお陰に他ならないって言ってたよ。……ここまですつなら、普通に言えばいいのにな。

それじゃ、またね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8900w/>

フーと散歩 - 大地を感じて -

2011年9月27日09時52分発行